私は静かに報復する

ｎｅｔ－ｗｏｒｋｓ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私は静かに報復する

【Ｎコード】
Ｎ８７９２Ｓ

【作者名】
ｎｅｔ－ｗｏｒｋｓ

【あらすじ】
私は探偵である。
ただの探偵ではない。芸能関係専門の探偵である。
大手芸能事務所から、失踪したマネージャーの捜索を引き受けることになり……。
二大事務所の対立と思惑、権謀術数、情報収集および操作――。
そして、私は一人の女性タレントと出会う……。

主要登場人物

●根津
芸能人専門の探偵。芸能事務所『芸翔』から失踪したマネージャー森川隆の捜索を依頼される。

●小川瑞貴
グラビア出身の若手女優。芸能事務所『セレブ』の系列事務所に所属しているが、現在仕事を干されている。

●物部守雄
芸能事務所『セレブ』の会長。芸能界のドン。

●蓮沼嘉津雄
芸能事務所『セレブ』の幹部。私的感情を優先し、所属タレントの売込みを行なう。テレビ局へのキャスティング権が強いことから、何人ものタレントが愛人や身体を強要されている。

●曽根崎
『セレブ』のトラブル処理人。元マル暴の刑事。

●芹沢玲香
芸能事務所『アクティブスター』所属の超売れっ子タレント。

●藤崎理奈
芸能事務所『セレブ』所属のタレント。スキャンダルに巻き込まれる。

●小田

芸能事務所『芸翔』の危機管理部の人間。

●神山豊
セレブと勢力を二分する大手芸能事務所『芸翔』の社長。セレブを敵対視する。

●宮島
フリーライター。根津の情報源の一つ。

●桧垣恭吾
男性ファッション誌の元専属モデルである。今の事務所に引き抜かれ、俳優に転身。俳優業の他に音楽活動も行なっているが、どちらも中途半端な実力しかない。

●森川隆
芸能事務所『アクティブスター』の芸能マネージャーで、芹沢玲香の担当。現在失踪中。根津の捜索対象者。

●片岡征也
アクティブスターのマネージメント事業部部長兼新人開発部統括。神谷祐希のチーフマネージャー

●奥野仁
芹沢の現マネージャー。森川の後輩。

●神谷祐希
最近、ＣＭの契約数を飛躍的に増やしているアクティブの看板タレントの一人である。

●大塚えり
芸能事務所『アクティブスター』の駆け出しタレント。根津が情報欲しさに接近する。

●東希紗智
蓮沼が極秘裏に売り出そうとしているタレントの卵。

プロローグ

同じ世界でありながら、絶対に近付けない世界が存在する――その世界は例えば、私の視線の先にあるような所だ。

春だというのに、日が落ちたとたんに肌寒い。風が強く、車の中でなければ風邪をひいてしまう。

格式に満ちた歴史あるホテルらしいが、一般人の立ち入りなど端から拒絶する傲慢さを発散していた。ホテルの入り口付近のロータリーでは、ハイヤーやタクシーが数台数珠繋ぎで連なっていて、車が途切れることはない。

私はホテルの斜向かいに車を止め、運転席で携帯電話を玩んでいる。携帯電話は一二〇〇万画素の高感度撮影が可能なカメラ機能重視の機種だ。ただし私自ら改造し、スピーカーの配線を切って無音化している。着メロなどチャラついた機能も無くなるが、その代わり音も無く盗撮できる。

メールを打つふりをしながら、私はホテルを張り込んでいた。

警備が妙に厳重だった。黒いスーツに身を包み、イヤフォンを耳に差し込んだ連中がホテル周辺をうろうろしている。ホテルに入るものに厳しい視線を向けている。私は警備から逃れるように時々車を移動させた。

ホテルニューオオタニ大宴会場――芸能事務所『セレブ』創立五〇周年パーティーの会場である。7時からの開演となっている。

物部守雄――芸能界のドンと言っても過言ではない、セレブの社長のご機嫌を伺うためにＴＶ関係者や有名芸能人のみならず、格闘家や格闘プロデューサー、ＩＴ長者など名士などテレビや雑誌で見たことのある連中が訪れている。

言うまでもなくマスコミは完全にシャットアウトだ。もっとも、日頃の接待や圧力で骨抜きにされたマスコミに今日の宴を取材しようとする人間はいない。

それでも反体制精神に満ちた一部の連中は、出席する芸能人をカメラに収めようと、獲物を狙う狩人のように身を隠しながら張り込みしているかもしれない。

私のように――。

ハイヤーから現場マネージャーと思われる男と共に一人の青年が車から降りた。私は携帯電話を助手席に置くと双眼鏡を手にした。レンズには、青年の顔がはっきり確認できた。

面差しは少年のような幼さを残している。女性受けしそうなフェイスだ。身長は高く、身体から無駄肉の類は一切無い。少年性と男性性が混在したアンバランスさが印象的だ。

伊沢達也――私が今調べている調査対象である。

伊沢は、パーティー用のフォーマルな格好に、指をシルバーアクセサリーで飾っている。シルバーアクセサリーは伊沢の趣味であり、たびたびその手の雑誌の表紙を飾っている。今日ここを先回りできたのは事前に伊沢のスケジュールを入手できたからである。

すぐに別の車両がホテル前で停まると一人の美少女が車から降りた。

藤崎理奈である。

栗色に染められた艶やかな髪はパーティー使用にセットされ、肩が大きく出た赤いドレス身に付け、その上にダウンコートを纏っている。藤崎に後ろから髪を後に撫で付けたヘアスタイルの男が続く。

蓮沼嘉津雄――セレブの幹部にして藤崎のチーフマネージャーだ。気分屋で、仕事において私的感情を平気で持ち出す、上司としては最悪の男としてその筋では有名だ。

伊沢とマネージャーは蓮沼に深々と頭を下げると、蓮沼も軽く頭を下げた。双方の事務所の力関係が如実にあらわれていた。伊沢の事務所はセレブの傘下には入っていないが、セレブのパーティーに出席しているようでは時間の問題だろう。

伊沢のマネージャーは卑屈なぐらい、蓮沼に媚びていた。伊沢の方は藤崎に近寄っていくと言葉をかわす。二人はドラマで共演経験

がある。友人関係なのかもしれない。伊沢と藤崎はマネージャー達と一緒に一緒にホテルのロビーに入っていった。

気温は低いにもかかわらず、私の全身は軽く汗を掻いていた。スーツの下にインナー式スペクトラ製抗弾ベストを着込んでいる為だ。ボディアーマーなどで使用されているケプラー素材以上の防弾性を有し、犯罪大国アメリカのポリス達の装備として採用されている。

体温を逃しやすいので蒸れにくく、擦り切れ、防カビ、対ケミカル性にも優れている。また防弾性もさることながら防刃効果も高い。

ネクタイも従来の首に巻くものではなく、シャツに引っ掛けるものだ。着脱がすぐでき、引っ張られても首が絞まることがない。ボディーガードが好んで付けるものだ。

武器の方のぬかりなくメインは催涙スプレー、バックアップに強力ライトのシュアファイアを用意している。催涙スプレーはＦＢＩやアメリカ陸軍がデモや暴徒鎮圧に正式採用しているものだ。成分濃度は民間用のスプレーの倍以上あり、護身具というよりは兵器に近い。

私は普段からこの手の装備は欠かさないことにしてる。仕事上、危険に会うことはざらだ。ゆえに実戦向きの武器を装備する必要がある。特に今日のような日は何が起こるかわからない。

ホテル入り口には新たな出席者が到着していた。ハイヤーの後部座席からマネージャーと思われる男の後で、引き締まった長身の女が表われた。女はストールを羽織り、ドレスを着ている。ドレスとストールだけで寒くないのかと、私は疑問だった。

身に着けているドレスも、金掛かっていそうだが、デザイナーがふざけて作ったとしか思えない醜悪なデザインだった。だが、着ている本人がそれを有り余るくらいにカバーしている。

美しさに異論を唱えるつもりはないが、顔を含めて全身がどこか人工的で作り物めいている。美容整形を施しているのは明白だ。莫大な金を賭けて、手直しされ創り上げられた肉人形という言い方がふさわしい。

芹沢玲香に間違いなかった。
芹沢玲香――元々はモデル事務所から現在の事務所に移籍し、大きく飛躍した強運の持ち主である。
現在抱えているＣＭは１５本を越え、主演を張るドラマは高視聴率を叩き出す。ファッション、発言にいたっても世の女性に多大な影響を与える存在。今もっとも乗りに乗っているタレントである。
だが、芹沢玲香はセレブ所属ではない。事務所自体もセレブ系列ではないはずだ。つまり彼女がこのパーティーに出席する理由はない。
疑問に感じながら、芹沢玲香を双眼鏡で覗いていると、助手席で携帯が振動した。携帯電話を開くと、「芸翔　小田」という名前が表示されている。私は通話ボタンを押す。
――根津さんですか？
と呼ばれると、私は「はい」と返事をした。
根津――という名は偽名だ。本名ではない。名前というものは無用に個人情報を垂れ流す。特に私の仕事に於いて本名を名乗ることは命取りになる危険を孕んでいる。
「どうしました？」と私は尋ねる。
――今すぐこちらにおいで願えますか？
電話の奥の男の声は切迫していた。
「……分かりました。すぐに向かいます」
電話を切ったとき、車の近くに一人の男が接近していた。私は舌打ちした。
男は運転席の窓を叩く。パーティーの警備担当の人間に間違いなかった。
「……何、やってんだ？」
窓越しに響く荒々しい言葉使いだった。
私は無視する。助手席に置いてあるシュアファイアを掴み、ライトの底部の突起に親指をおく。車には、他にも数人近付いてくる。
「……お前、芸能記者か？」

窓を叩いた男が再び尋ねる。警備担当とは名ばかりの、チンピラとかわらない。私は答えず、無言を突き通す。
「どこの出版社かってきいてんだ……！」
男が声を荒げた時、私は底部のスイッチを入れると光を相手見向けた。
純白の光が男の眼を灼く。男は短い悲鳴を上げた。
視界を光で奪われ男達が怯んだ刹那、私はキーを回しエンジンをかけ、サイドブレーキを下げるとアクセルを踏んだ。
踞る連中をバックミラーで確認しながら、またしても自分の用心深さと用意周到さに口の端が弛んだ。

芸能人専門の探偵

後続に尾行車両が無いことを確認しながら、私は目的地をめざしていた。

神宮にある芸翔本社である。三十階建てのインテリジェントビルの一六階と一七階の2フロアを借切り、オフィスにしている。

私は車を地下の駐車スペースに止めるとエレベーターに乗り、オフィスへ向かった。

エレベーターが開くと、芸能事務所のものとは思えない豪勢な作りのフロントだった。

芸能事務所『芸翔』――業界で五本の指に入るほどの、巨大芸能事務所である。

社名が大きく掲げられた受付に、フロアの角には商談や休憩場所としてテーブルや椅子が数脚設置されている。壁には大型プラズマテレビが壁に埋め込まれていて、自社のタレントのプロモーション映像が映し出されている。フロントの所々に柱を模した水槽が設けられ、中では熱帯魚が舞い、明かりが灯され、一種のオブジェと化している。

芸能事務所の受付はどこも質素で地味な作りだが、さすがはエンターテイメントの総合商社を目指すだけのことはある。最近は映画配給部門を新設し、海外の映画の買い付けや自社制作に乗り出している。

受付には警備員が常駐していて、ＩＤカードの提示がなければ奥を入ることすら許されない。監視カメラも設置されていて、どこか物々しい。

就業時間が過ぎたためか、受付は明かりが落ち、受付嬢は居ない。だが事務所内は、どこか騒々しかった。

社員と思われる人間が、私の横を何人も早足で通り過ぎていく。その表情はみな険しい。携帯電話を手にしながら、電話越しに頭を

何度も下げながら会話している者も少なくない。
受付近くの通路奥から一人の男が私に近付いてきた。
「お待ちしていました。根津さん――」
小田だった。先程の電話の主である。
小田は芸翔の危機管理部の人間だ。危機管理とは聞こえはいいが、芸能人のもめ事や男女関係の示談、地方興行主の交渉など汚れ仕事が全般である。時には女性タレントの整形手術や堕胎の段取りまで取りつけるらしい。
それだけ芸能人はモラルがなく、自分のケツを自分で拭けないという事だ。
芸翔はモデル出身の俳優を大きく抱え、セレブとは違い、確実に数字のとれるタレントが数多く在席する大手芸能事務所である。
テレビ局の事務所に対する影響力の無さは周知の事実だが、視聴率をを稼げる芸翔はキャスティング権においては絶大な影響力をもつ。
その証拠に今期クールで芸翔出資のドラマは三本。それだけ所属タレントの問題も多く抱えている。
「……何の騒ぎですか？」
私は小田に尋ねた。
「……詳しくは部屋の方でご説明いたします。こちらへどうぞ」
小田に導かれるまま、私は事務所奥へ向かった。
通された部屋は窓が一切無く、外部が見えない部屋だ。小さなテーブルを挟むようにソファーが設置されている。天井にはカメラがある。まるでドラマに出てくる取り調べ室のようだ。
クレーマーなどを処理する応接室だ。要は私は部外者ということだ。
私はソファーに腰を下ろす。殺風景な部屋に置いている割りにはフカフカで、座りごこちがいい。
小田は私の真向いに座ると、「これをご覧ください」とテーブルにプリント用紙を数枚置いた。　　私は用紙を手に取る。
一組の男女が手を繋ぎながら歩いている。

二人とも帽子を深々と被り、一人はカメラ目線で、女は男の方を向いている。
女の方は見間違えないようなほどはっきりと顔が解る。
瀬川さやか――芸翔が今売出し中のタレントだ。芸翔の力を得て、テレビに数多く出演している。主戦場はバラエティとドラマが半々。癒し系の魅力を武器に、世の男どもの心を捕らえ、人気を獲得してる。
そして、隣の男の方は意外な人物だった。
「……お笑い芸人ですか。いい趣味をしている――」
声を出して笑ってやりたかったが、私は小田の手前上自重した。
芸人のみを抱える大所帯の事務所に所属する若手お笑い芸人だった。最近人気が出始めて、テレビや雑誌でよく見る一発ギャグしか売りの無い、泡沫タレントだ。おそらく来年の年末には消えているだろう。
「……今週発売の、ショットアップの方に掲載されるそうです」
「――成程。会社内が騒がしい理由が分かりましたよ」
所属タレントのスキャンダル――芸翔社員達は、仕事の関係者たちに状況の説明と謝罪の対応に追われているのだ。
週刊ショットアップ――日本で数少ない写真週刊誌である。毎週の如く、スクープを連発する芸能ニュースを牽引する存在であり、その為か訴訟沙汰も少なくない。
「……イメージダウンも甚だしい。全く何を考えているんだか。大事な時期にこんな男に自分を安売りをしてなんになるのやら……」
小田は苦々しげに言う。これで、小田の仕事が増えるということだ。写真を見る限り、二人が男女の仲であることは明白だった。少なくとも肉体関係はとっくに済ましているだろう。
「瀬川さんは認めてらっしゃる……？」
私の問いに、「……ええ」と小田は溜息を吐く。
セレブの妨害工作――小田の溜息を聞きながら、私が真っ先に思ったことだった。

芸翔もセレブも、共に業界内において勢力は五指に数えられるほどの規模を持つ大手だ。そして芸翔とセレブの仲は犬猿の仲ときている。世間的には問題はなくても、広告主には体裁が悪い。そして芸能事務所側は、それをもっとも恐れる。

役者との付き合いならば未だしも、遊び人のイメージが根強いお笑い芸人だと世間のイメージを操作しにくくなる。事務所側も頭が痛いだろう。

「ご存じの通り、瀬川はスキャンダル処女です。契約しているＣＭのイメージの関係上、男関係が公になることはマズい……」

瀬川さやかは、芸翔が今売出しに力を入れているタレントの一人である。ドラマなどにも主演のバーターとして、プッシュしている。

だが、所詮は女優などの器ではない。彼女も芸人同様、ＣＭタレントという名の消耗品だ。

「……マスコミの方には手を打ちましたが、クライアントと代理店の方には自粛するようにと注意を受けました。最悪、違約金の支払いはもとより契約の打切りもありうると仄めかされましたよ……」

「芸翔はテレビの編成に影響力を増しつつあるし、タレントは数字が取れるから何かと悪意を買いやすいと見える――」

私の言葉に、小田は不愉快さを滲ませた。

「……神山はたいへんご立腹です。ご存じありませんか？」

「答えるまでもありませんね。……セレブでしょう」

「……何処からのソースですか？」

「ソースも何も……。当てずっぽですよ。ゴシップ好きの主婦でも予想がつくことだ」

私は言った後で、自分の発言を後悔した。今の状況では、少々不用意だった。

「だが、今の段階では男側の事務所による策略とも考えられる……」

「ありえませんよ」

小田は即座に否定した。男が所属している事務所は確かに小さいところだ。芸翔に喧嘩をふっかけるような真似はしないだろう。

今回を含めて、芸翔所属タレントのスキャンダルが立て続けで三連発だった。セレブが暗躍していることは眼に見えている。
「もし何か情報が入ってきたら、教えていただけないでしょうか……？」
小田の頼みに私は頷く。
「でも、小田さんの情報網には敵わないと思いますよ」
「……芸能専門の探偵が何をおっしゃるんですか」
小田の言葉に私は笑う。
――そう、私は芸能関係専門の探偵である。広告代理店や番組制作会社などの依頼を受け、日銭を稼ぐという毎日を送っている。
広告代理店は芸能人に関して芸能マスコミ以上の独自の情報網をもつ。クライアントである企業の依頼で代理店がＣＭを作成する場合、起用したタレントがスキャンダルを起こしたら広告はもちろん広告主のイメージダウンになる。ＣＭ契約の条項に盛り込むくらい、スポンサーサイドはタレントの交際には厳しい。
無用なトラブルを避けるため広告代理店は事前に起用候補のタレントの交友関係やプライベートを徹底的を調査することがある。そういう仕事は民間の調査会社に頼むのだが、私はそれを専門にやってる探偵である。
リサーチ会社の方は番組企画制作の為の調査が多い。初恋の人物や幼なじみの行方、過去の人物となった芸能人の追跡や、最近では芸能人の日常を暴露するような企画の為の行動確認業務などを行なう。
そして、優良なクライアントに芸能事務所がいる。芸能界は、権謀術数の世界だ。タレントを売り出すためには、とにかく金がかかる。事務所は宣伝の為、先行投資として多額の金をタレントに注ぎこむ。
だが、手塩に掛けて育てたタレントを引き抜かれでもしたら、たまったものではない。よく、事務所移籍に絡み、タレントが見せしめに仕事を干され、芸能界追放となってしまうのはこれである。

また、キャラクターが被っているという理由などで、仕事を妨害するため、ライバル事務所がタレントを調査し、スキャンダルを掴み、懇意のマスコミにタレ込むなどということはよくある話だ。
芸能報道に対しても、接待攻勢を行なってマスコミを骨抜きにしている。
ワイドショーでは特定の芸能事務所の報道は絶対に行なわないのは周知の事実だし、また活字媒体に対しても自らの意の侭になるよう支配下におき、従わない芸能記者に対しては恫喝や暴力も辞さない。
また自社所属のタレントに対しても、他の事務所への引き抜きを回避するために交友関係を洗い、弱みを握った上で管理し、言うとおりに行動しなければ、情報をマスコミにリークし、潰す――。
現在の芸能界では、情報をいかに掴み、コントロールするかがタレントおよびプロダクション繁栄の鍵になるといっても過言ではない。
ゆえに私のような人間が必要になる。事実、仕事の依頼は面白いくらいにある。
芸能事務所の依頼は広告代理店に比べ、汚れ仕事の片棒を担ぐことになるのだが、報酬は格段にいいのも事実だった。
今時、ただの調査業を唄っても客は来ない。
「お話はこれで終わりですか？」と私が訊くと、「いいえ」と小田は否定した。
「申し訳ありませんが、伊沢達也の調査は今日で打切りにさせて頂きたいのですが……」
「どういうことでしょう……？」
私は尋ねた。
不愉快だった。調査はこれから佳境に入る。つまらない理由で邪魔されたくない。
「上での意向でして……。伊沢達也の調査は今後我々の方で引き継ぎます」

「……神山さんの指示ですか？」
私の言葉に小田は頷く。
神山豊――芸翔のトップであり、芸翔系列の子会社や音楽出版、養成スクールの社長などを歴任する。四〇代若くして次の芸能界を牛耳る男とも噂される男だ。
物部の威光が霞むのに反比例し、神山の力は日々拡大している。業界政治力においては、セレブと拮抗するほどの勢いを持つ。ゆえに芸翔とセレブは犬猿の仲、いや不倶戴天の敵同士といった方がいいだろう。
「それで根津さんには別の仕事を頼みたいのですが……」
「……まさか、このネタの裏取りですか？」
私は写真をこつこつと指で叩くと、小田は「いいえ」と否定した。小田は別の写真を一枚取り出すとテーブルに置いた。
私は写真を手に取る。写真のレイアウトやアングルから明らかに隠し撮りしたものだった。
男女一組が写っている。どこかの店先から出ているところを撮影されている。スーツ姿の男が手前に映り、奥の女は帽子とサングラスを目深に被っている。
女の顔を見たとたん、肌が粟立った。サングラスを掛けていてもすぐに誰か分かる。
「……芹沢玲香ですか？」
私の写真を持つ手は震えていた。一発屋芸人や消耗品のＣＭタレントとは違う、久々のビックネームに、さすがの私も震えが来た。
「――違います。我々が用があるのは男の方です」
小田の言葉に、私は写真の男を見る。長身で精悍、実直そうな男だった。
「森川隆――芹沢玲香の現場マネージャーです」
「マネージャー……ですか」
私は落胆の声を隠そうともせず言った。
「会社を辞めているんですよ、この男」

「……ほう」
「そして、現在行方がつかめません。失踪してるんです」
「何をやらかしたんですか？」
「わかりません――」
私は写真をテーブルに置く。
「……まさかどこかの事務所にでも軟禁されているなんておっしゃるんじゃないでしょうね？」
小田は私の問いに答えず、「この男、探してみてもらえないでしょうか？」と言った。
「……芸能関係専門の私が、ですか？」
「……ええ。根津さんならば腕も確かですし、この業界にお詳しいですから。なにより芸翔がこの男を探しているということを悟られたくありません。私が動けばセレブが妨害を仕掛けてくるかも知れません」
私は躊躇する。気が乗らなかった。
リスクが高い。監禁されている可能性が高い以上、藪を突いて蛇を出しかねない。なにより楽しみがない。捜し出すのはむさくるしい男だ。芹沢玲香ならともかく、さほど面白い仕事とは思えない。
確かに芸能関係の調査において人探しの依頼は意外に多い。芸能人の恩人探しや一線を去った芸能人の行方など制作会社の依頼を受けて動くことはある。
だがこの依頼は過去の仕事とは明らかに質が違うことを、私は嗅ぎ取っていた。
「……芹沢潰しにでも使うおつもりですか？」
「上の考えは我々にも分かりませんから……」
小田は言葉を濁す。小田も理由を聞かされていないのだろう。
ますます、気が進まなかった。だが、断わる理由もなかった。次の仕事の予定は入っていない。ならば、報酬で自らのやる気を奮い起こすしかない。
「――依頼料は規定の二倍いただきます……調査対象が芸能人では

ないので、ね。ただしインセンティブということで――。もし捜し出せねば、規定金額で結構です。調査期間は最低三週間は欲しい。ただし、危険とわかったら即座に調査を打ち切る。調査経費は別途で。情報提供料などによりコストはいつもよりかかりますよ。よろしいですね……？」

「結構です」

私の要求に小田は即座に了承する。

「伊沢に関してですが、今日までの調査結果を報告書にまとめて私まで提出していいただけますか。引継ぎと、上への報告しなければなりませんので……」

小田の言葉に私は頷いた。

この程度の内容で尻込みするようなら仕事にならない。脅迫、恫喝などは日常茶飯事だ。

芸能人専門の探偵の宿命――私は自分をそう納得させた

引継ぎと事前調査

私は五反田にある自宅で、芸翔に提出するための報告書を作成していた。

探偵業を営んではいるが、わざわざ事務所を構えるようなことはしていない。依頼人を家に呼ぶことなどまず無い。

寝室兼リビングの壁ぎわに置いてあるスチールラックには、ラップトップ型のパソコンとプリンターの他に、プロ使用の盗聴発見器が置いてある。

書棚には携帯型の無線器や広域帯受信機の他に、市販されている盗聴器が数個、浮気現場などの証拠を押さえるための中古の一眼レフカメラとビデオカメラはもちろん、ＣＣＤカメラやファイバースコープといった盗撮用カメラ、米軍払い下げの双眼型赤外線暗視ゴーグルといった調査器材が部屋の至る所にある。カーテンは締め切ったままで、部屋の中央にある小さなテーブルには撮影道具を改造・自作するためにピンバイスや精密ドライバーなどの工具が菓子の空き箱に入っている。

調査メモや証拠記録を確認しながら、私は記憶を掘り起こし、パソコンのキーを打ち込んでいく。調査対象と調査状況の様子が頭の中で蘇っていく。

伊沢達也――若手実力派と称される男性タレントだ。

芸翔から依頼された内容は身辺調査および交遊関係。出来ることならば、伊沢にとってマイナスとなるようなネタを掴んでほしい――そういう内容だった。

依頼理由は尋ねなかった。

おそらく、伊沢が芸翔のタレントに手を出したのか、もしくは伊沢と似たようなタイプの人間をデビューさせるため、ライバルに対して戦略を得るための調査だと踏んでいた。同じ芸風、もしくはキャラクターの人間を敵視し、対策を講じるのは芸能事務所ならば当

然の対応である。
伊沢に費やした調査期間は三週間程度である。その程度の期間で決定的なネタを掴めるほど芸能人の調査は甘くない。生活リズムが不定期で、休日も少ない。
決定的なネタはまだ掴んではいなかったが、調査は順調に進んでいた。
伊沢の地元は千葉で、評判はあまり良くなく、元同級生の付き合いもまだ続いている。悪友と言ったほうが正しいだろう。
ルックスも良く、若さゆえ体力が有り余っているためか女に不自由しない人生を送っている。事実、下半身に人格は無い。
モデル、アイドルの卵など喰った女は枚挙にいとまがない。伊沢がお気にいりのデリヘル嬢の存在まで掴んでいた。
もっと世間が驚くようなビックネームと付き合っているのかもしれない。事実、調査の過程で何人か有名芸能人の名が上がっている。残念ながら私の調査期間中、ビックネームとの接触は無かった。
パーティに出席するという情報は、私が懇意にしている業界関係者からだった。そもそも芸翔の仕事を受けたのはギャラ以外の何物でもない。
私の顧客である広告代理店から芸翔が私の評判を聞き付けたことが全ての始まりだった。知り合いの紹介とあっては断るわけにも行かなかった。
セレブも芸翔もどちらも好かない。昔から権力側に座する連中は虫が好かない。
その矢先の突然の調査の打切りと、別の依頼への変更――不可解極まりなかった。
報告書の作成が終わりプリントアウトすると、私は次の作業に移った。小田から預かった森川の写真をパソコンに取り込み、写真を携帯電話用の画像データに編集加工する。携帯電話に画像データを入力後、森川の名前や特徴、分かっている個人情報などとともに『情報を募る。有力情報には報酬を支払う』という内容のメールに、

先程加工した森川の画像を添付すると、メーリングリストで一斉に送信した。
私の人脈から情報を募るためである。送信して五分も経たないうちに携帯の着信ランプが瞬き、振動する。
「はい」と私は携帯に出た。
――賀川っすけど。
賀川はカメ小だ。カメ小すなわちカメラ小僧である。
特に賀川はタレントのパンチラ写真やアイドルの登校写真などを盗撮しては、雑誌に投稿し金を稼ぐことを生業にしたその筋では有名な男だ。投稿写真だけで月５０万は稼ぎだす。
タレントの住所確認の際などは、この男から情報を貰うことが多い。アイドルの追っ掛けと出待ちが生き甲斐のような男だ。――つまり私と同類ということだ。
――メール見ましたよ。
と、賀川は言った。
「森川隆……芹沢玲香の現場マネージャーだ。知ってるな？」
私は賀川に尋ねる。
――……知ってるなんてもんじゃないですよ。我々の商売敵ですから。
賀川の言葉に、私は吹き出した。
――以前、俺の知り合いのカメ小がドラマの制作発表で芹沢のパンチラ写真を撮ったんですけど、こいつに追っ掛けられて、フィルムは奪われるわ、胸ぐら捕まれるわでエラい眼にあったって、ぼやいてましたよ。
「……この男な、会社を辞めて現在失踪中らしい」
――マジですか？
「なにか心当たりはないか……？」
賀川は少しを間を置いて
――いや、無いですねえ。なんでですか？
と、答えた。

「この男について捜索調査の依頼を受けた。内容はメールの通りだ。書類から攻めても無駄だろうからな。何かネタはないか？」
――伊沢達也の動きを探っていたんじゃ無かったんですか……？
「依頼人の気が変わってな。いちいち詮索していたら仕事にならんさ」
――大変ですね。
「芹沢との関係はどうだったんだ？」
――プライベートで芹沢の御供をしているところをたびたび目撃されていますね。
「……付き合っていたのか？」
タレントとマネージャーの交際は珍しくない。一緒に居る時間も長く、休日も不規則。まともな出会いが少ないという実情もある。
「――単なる荷物運びや運転手程度の存在でしょう。森川は公私共に献身的に芹沢に尽くしていたようです。芹沢に取ってみれば都合のいい男だったんでしょうね」
「でも、森川本人は本気だった……とでも？」
私の言葉に、賀川は唸る。
――まあ芹沢の逢引きのカモフラージュにも一役買っていますしねえ。何せ、ほら芹沢は恋多き女らしいですから。
「ヤリマンってことだろう……？」
賀川の笑いが、電話の向こうから聞こえる。
美人への淫乱願望――男の定番の猥談である。
「実際、芹沢は尻が軽いのか？」
私は尋ねた。
――……俺が知っているだけでも3人います。飽きっぽい性分なんでしょうねえ……。裏は取ってませんけど……。俺、芹沢には興味が全く無いんで……。
アイドル専門の賀川なら尚更だろう。私もあまり興味が無い。仕事上、ゴシップはなるべく頭に入れているが、カバーし切れるものではない。それだけ芸能界は展開が速い世界ということだ。

「男の名前は解るか？」
――……調べるつもりですか？
私は笑うと、「……仕事だからな」と言う。
――最近、噂になったのは……桧垣恭吾ですね、確か。ドラマで共演して親密交際が噂されてましたけど。まあガセに近いですね。
局の話題作りだろうと、私はすぐに分かった。ＴＶ局のドラマ編成は時々こういうあざとい真似をする。
――……そう言えば。
「なんだ？」
――桧垣って別の女でも噂になってましたよね。
「誰だ」
――小川瑞貴です。

顔が何となく思い浮かぶ。私の好みの顔をした女性タレントだ。
――半年ぐらい前のドラマで三人とも共演してたでしょ……？
「……最近のドラマはあまり見ない。出来が非道いからな」と答えると賀川は笑う。
――駄目ですよ。そういう連中で飯食ってんでしょ？
賀川の言葉に今度は私が笑った。バラエティー番組制作会社が作ったコントを一時間に引き伸ばしたような内容を奥目も無く見れるほど私は若くはない。
――その芹沢と小川ですけど、二人とも仲が悪くて現場の空気最悪だったらしいですよ。
「あまり有力な情報とはいえんな」
私はがっかりした。
――いや、ここからが本題なんですが、小川瑞貴って今仕事干されてるらしいんですよ。芹沢を怒らしたのが原因かどうかは知りませんけど……。
「……そう言われれば、最近顔を見ないな――」
賀川に指摘され、私はそのことに初めて気が付いた。確かに小川

瑞貴はここ数ヶ月メディアには登場していない。もっとも、この業界はすぐに新しい人材が補充され、台頭している。気に留めているほうが無理な話だ。

――どうです？　興味湧いたでしょ？

「――ああ」

確かに私の中で微かに火が点っていた。

「小川の住所分かるか……？」

――ちょっと待ってください。

受話器越しにガサゴソという音が聞こえると、「すぐに分かると思います。知り合いに確認が取れ次第、折り返します」と返答があった。

芸能人の住所確認は、芸能人の調査でもっとも労を有する。下手をすると数ヶ月を費やすこともある。そんな時に賀川が役に立つ。もっとも、賀川も私にターゲットの住所を確認してくることはよくある。持ちつ持たれつということだ。

――で、伊沢の方ですけどなんかネタ掴めました……？

賀川が楽しそうに尋ねてくる。この手の情報交換が一番面白い。趣味の合う人間と話をすることほど楽しいことはない。

「下らないものばかりだ。もっと時間と手間を掛ければ、別だがな」

――タレントとは付き合ってないんですか？

「賀川ちゃんが好きそうなマイナーな連中ばかりだ。ムカつくから聞かない方がいい」

舌打ちする賀川に、私は笑った。

「芹沢、森川とともに小川のネタが入ったら私に教えてほしい」

賀川は「了解しました」というと電話を切った。

もう少し聞き込みが必要らしい。別の情報筋に当たろうと電話帳をスクロールする。

指の動きが心なしか鈍かった。

芸能系フリーライターの知り合い

隣の部屋から馬鹿騒ぎする声が聞こえる。仕事帰りのサラリーマンやＯＬらしい。店員に苦情を言って、注意してもらおうかどうか悩んでいた。

今日、情報交換の場に選んだのは、新橋にある焼肉店だった。安さだけが売りの店で、普段はとても足を運ぶ気にはなれない。女を連れてくるなど論外だ。

一足先についた私は注文を済ましていた。運ばれた食材には手は付けず、目の前の七輪は熱を放っている。

ここに来る途中で購入したスポーツ新聞を読みながら、ある男を待っていた。

右手に巻いたロレックス・サブマリーナを見る。

コンロと肉はすでに運ばれ、テーブルに並んでいるが、飲み物はまだ頼んでいなかった。

いつでも焼けるよう、コンロは温まっているというのに、すでに約束の時間を１５分過ぎている。時間にルーズなのが、今から遭う男の唯一の欠点だった。

今日の飯は私が奢る約束になっている。情報収集が目的なので格好もラフだ。

私は基本スーツでいることが多い。芸能人は高級店で飯を食うことが多いし、高級住宅街に住居を構えているのがほとんどの為か、普段からフォーマルで決めている。咄嗟の潜入や尾行、張り込みにも対応できる。

スポーツ新聞の芸能欄に芸能ジャーナリズムはもはや存在しない。そこに掲載されているのは、宣伝という芸能事務所のなりふり構わないタレントの売込合戦だ。

新人アイドルの売出しやドラマ制作発表の記者会見、企業と馴合イベント、どこの事務所も所属タレントの知名度の引き上げに滑稽

なくらい躍起になっている。
だが、確実に新聞の売り上げを上げるようなスクープネタは一切無い。
わざわざ金を払って読む価値もない媒体ではあるが、裏読みすれば自ずとと記事の扱いの大きさで事務所の戦略や力関係を推し量ることができる。
そんな中、紙面では無意味なほど大きく割かれている記事がある。とある女性タレントのＣＭ出演決定記事であった。
藤崎理奈――少年さと少女さが混在した硬質な美しさを持ち、女性性をあまり感じさせない。その中性さは清潔感に満ち、ファンに媚びない突き放したようなクールさが漂う。
元々は地方の大地主の孫娘で何不自由のない生活を送っていたが、大手事務所にスカウトされ、芸能界入り。その希有の存在感はすぐに花開き、事務所の営業力もさることながら、大手企業はこぞって彼女をＣＭに起用する。
携帯電話会社のＣＭが世間で話題になり、一気に大ブレイク。
ＣＭの契約本数を徐々に増える一方で、ドラマの出演依頼も殺到したが、安っぽいドラマには一切出ず、あえて露出を押さえて映画を中心に芸能活動を展開する。実際、彼女の生活はほとんど明らかにされていない。
事務所のイメージ戦略が効を奏し、最近では若手実力派女優という称号まで恣にしている。最近では主演映画で新人賞を獲得した。もっとも、新人賞に関しては審査員や制作サイドに事務所から多額の金が動いたという生臭い噂もある。著作権ビジネスでさらに儲けたいのかわからないが、音楽活動まで手を広げている。
タレントのランクは遥かに高いことは言うまでもない。ドラマに出演し続けなければすぐに忘れられるような連中とは存在感からして違う。
そして、藤崎が所属している事務所が『セレブ』という点も見逃してはならない。

この業界に身を置くものならば、誰でも骨の髄まで心得ている。
芸能プロダクション『セレブ』――老舗ではなくむしろ新興だが、その影響力は大きく、多数の有名タレントを抱えている大手事務所である。マネージメント業務以外にも、さまざまな事業を展開し、資本規模もはっきりしない。
情報操作が当たり前の芸能プロにおいて、ここほど露骨な事務所は存在しない。
芸能メディアを支配するといっても過言ではないセレブのトップに君臨するのが物部守雄である。
独自の美学により、あくまで裏方に撤し、表舞台には一切登場しない。ただテレビに出たいだけの成金社長とは格が違う、日本ショウビス界の帝王――。
私はセレブから仕事の依頼を受けたことがない。
情報操作が当たり前のセレブにとって、事実など無用なトラブルを招くだけのものだ。
セレブにかかれば実力もないタレント性も乏しいタレントであろうと、子飼いの記者や雑誌に提灯記事を書かせ、人気操作を巧みに行なうことで人気を釣り上げ、スターダムにまでのしあげる手腕は見事といわざる終えない。
藤崎玲奈がここまで人気を得たのは、セレブのお陰だと断言できる。
テレビ局においてはドラマ編成に大きな影響力を持つのは言うまでもないが、ワイドショーにおいてはＣＭ記者会見や密着取材などタレントの宣伝となるようなプラスのネタのみで、スクープなどのマイナスのネタは徹底的に封じ込める。その強引なやり方はあまりにも目に余る。
活字マスコミですらセレブに批判するところは少ない。
セレブは芸能記者に対して接待攻勢は当たり前で、芸能記者の冠婚葬祭まで干渉し、雁字搦めにする。それだけならよくある話だが、金品を受け取ることを潔しとしない記者に対しては一転して強圧的

な態度を取る。場合によっては暴力に訴えることもあると聞く。
テレビ雑誌などの特集記事などにおいては、記事の大きさまでに口を挟み、扱い次第によっては取材を拒否することは日常茶飯事だ。
ゆえにセレブによって泣きを見たライターや編集者たちは多い。
この品性の欠如とも言える強引さが、物部を物部と足らしめている。
芸能記事を扱う編集部には、セレブのタレントのスクープ記事がいくつも死蔵されて居るはずだ。
とくに出版不況が続く業界において、よほどのスクープでもないかぎり、写真週刊誌はバカ売れはしない。だが、グラビアアイドルやヌードなどのグラビアページは売り上げを確実に左右する。もしグラビアアイドルの所属事務所に物部の圧力がかかれば、事務所はタレントを引っ込めざる終えない。物部と正面きって喧嘩をする事務所はいない。そうなれば雑誌の死活問題になるのは目に見えている。
セレブは、各芸能事務所にも巧妙なやり方で食い込んでいる。
優秀なマネージャーが独立していくのは芸能界の常だが、そういったものたちに資金援助を申し込んだり、経営が行き詰まっている芸能事務所に無償で資本援助を行うことで傘下に置いてきた。独立プロでも、セレブに頭の上がらない芸能プロは多い。
もちろん物部自身、一流のタレントを見抜く目をもつ。それが無くては、芸能界でここまで幅を利かせることなど不可能であっただろう。ゆえに物部はタレントの引抜きにも金を惜しまない。これだと思ったタレントには何千万もの金を即金で用意し、強引なやり方で自分のものにしてきた。４
私が座る席に肩からカバンを下げたジャケット姿の男が現れた。年齢は三〇才前後、耳にはピアスを通している。短く刈られた髪は茶色に染められている。
「――遅いぞ」
と、私の抗議の言葉に、「根津さんがタイトすぎるんですよ」と、

悪怯れる様子もなく、宮島は言った。
宮島はフリーの記者である。ライター業も平行して著作物も多く、芸能系と裏ネタ系に強い。自身のブログや芸能ニュースサイトなどにも寄稿している。
賀川同様、ときどき互いに情報交換を行なうため、一緒に飲んだりする。この業界で私が最も信用のおける男だ。
席に座ると、宮島はビールを注文した。
宮島とは私が情報屋時代からの付き合いだ。
芸能人を追うことはこの道何十年のプロ探偵ですら至難の業である。私がこの仕事を始る前からプロに勝ちる術は人脈しかないと痛感していた。
開業当時、私はアイドルの握手会やイベントに顔を出し、ファンたちに営業を勤しんだ。仕事の主は芸能人の住所調査である。現住所はもちろんだが、実家、男関係まで調べ上げる。これで当座の糊口をしのいだ。
糊口とは言ったが、これが結構なシノギになる。ファンというのはこういうことに金を惜しまない。
仕事を得ると共に、私は人脈拡張の一貫として私は情報収集を行なった。情報収集というのは芸能人の目撃情報などを入手し、ファンはもちろん芸能記者に売りつけるのである。
こうして私はアマとプロ、両方の人脈を形成していった。事実、一時期は情報屋として腕を鳴らしていた。
宮島と付き合いだしたのはある記事がきっかけだった。
発端は裏物系のゴシップ雑誌だった。猟奇殺人や異常犯罪物を扱うようなイエロージャーナリズム誌だ。セレブの影響化がない雑誌など限られている。
事件はすでに風化し、記事としての価値などない。
本名が記載されることはなく、Sとだけ記されていた。だが、見るべき人間が見ればすぐにわかるだろう。私もすぐにそれが誰だか分かった。

彩木優――その記事を書いたのが宮島である。私は宮島に接触し、彩木の情報を求めた。自分の事を明かし、色々と情報交換の行なうちに今の関係になった。

宮島は私の真向いに座ると呼び鈴で店員を呼び出し、ビールを注文した。私も同じものを頼む。

「セレブの記念パーティーはどうでした？」

「……ああ。確かだった。さすがは宮島ちゃんの情報だ」

セレブ記念パーティーの情報は、宮島からもたらされたものだった。宮島の情報は、常に信用度が高い。さすがはマスコミ関係者だ。

「……寸でのところで見つかって逃げるハメになった。私も腕が落ちたものだ」

宮島分のビールがジョッキで運ばれてきた。私と宮島は乾杯すると、ビールを口にする。

苦い――この味はいくつになっても好きになれない。元々アルコールは強い方ではない。

「メール読みました。芹沢玲香のマネージャー……ですか」

肉を引っ繰り返しながら、宮島は言った。

「同業者から噂は聞いてましたけど、セレブが圧力掛けて記事にできなかったんですよ」

「そうだったのか」

宮島はビールを再び煽る。

「先日の芸翔所属タレントのスクープネタだが……」

「仕掛けたのはセレブで間違いないでしょう。」

宮島は断言すると、肉を箸で上げた。

「ここの所、狙い撃ちだな」

「そりゃそうでしょう」

宮島は肉を口に含んだ。熱かったのか、はふはふしながら、やっとのことで肉を飲み込んだ。私も焼けた肉を頬張る。

「セレブが関わっているドラマが視聴率が一桁台を割るというあまりの低視聴率で、放送スケジュール十一回の予定が八回に短縮、事

実上の打切りになりましたからね……」
焼けた肉を掴みながら、宮島は言った。
「……原因は、はっきりしています。脚本の出来の悪さもさることながら、このドラマの主演女優はセレブ系列の事務所所属の若手女優です。ただでさえ、演者ありきで企画が立ち上がっている昨今のドラマ事情に加えて、数字が取れないは周知の事実にもかかわらず、セレブの絡みで半年に一度ブッキングしなければならないというテレビ局にとって頭痛の種というわけです。スポンサーも大激怒らしいですよ」
私も肉を焼く為に箸で掴み、網に乗せる。私が選んだのは、内臓だった。
「もっとも、今期クールは事務所とのしがらみで作ったとしか思えないドラマや番組があまりにも多すぎで……。民法テレビ局の方はどの局も大幅な番組改編を余儀なくされ、来期の改編期に向けて演者の選定、およびブッキングに奔走しているみたいです。1年前から決まっているといわれているタレントのスケジュールの見直し、旬なタレントの投入、接待や実弾攻勢が早くも始まってます」
いつのまに頼んだのか、宮島はレバ刺しを食べていた。
「それにに対し、芸翔所属の女優が主演のドラマは二十パーセントを突破しました。……セレブが焦るわけです」
「明暗がはっきりしたな。セレブの嫌がらせはもっとエスカレートする畏れがある……か」
「芹沢玲香も主演ドラマがまずまずの結果を出したから、しばらくは安泰ですね」
「芹沢玲香か……」
私は肉を咀嚼する。内蔵独特の味と歯応が口の中で踊る。
脂っこいものを食いながら、生臭い話をしている。私は可笑しくなった。
「そういえば芹沢玲香がセレブの創立パーティーに出入りしていたな」

「……へえ、そうですか」
宮島は肉をタレに漬けると頬張る。三人前の肉がそろそろ無くなる。人の奢りだと遠慮がない。宮島の悪い癖だ。
「確かに噂では、物部はこの芹沢苓香のことが欲しくてたまらないらしいですからね」
宮島は箸を置いた。
「とあるパーティで出会いそれ以来、芹沢の事務所に何度も打診しているそうですよ」
「……移籍はともかく、セレブと組んだところで芹沢側に何のメリットがある？」
私は宮島に疑問をぶつけた。
「色々あるんじゃないんですか？　そういえばさっそく、清涼飲料水のＣＭが決まったとか決まらないとか……」
「芹沢玲香の事務所はアクティブスターだな……？」
宮島の問いに私は頷く。事前の下調べで確認していた。
「アクティブはセレブとの関係は良好そうだな。あそこの事務所はセレブ系の事務所だったか？」
私は尋ねた。内情まではさすがに確認できない。
「……いいえ。勢いがありますけど、新興のプロダクションですからプロモートに所々弱さが見えますね。マスコミ対策の一貫でしょう。でも、芹沢自身は何かとセレブに助けてもらっているみたいです」
「事務所は非セレブ系だが、本人自体はセレブ系というわけか。後ろ盾は磐石だな……」
私は感心した。
「――借りつくっといて、恩に着せる。セレブの常套手段ですからねえ。まあ芹沢自身何かと悪い噂がありますから。その辺で世話になっているんじゃないんですか」
芹沢の肖像権や営業権などのタレントとしての権利関係がセレブ側に委譲しているのだろうか。私はふとそんなことを思った。

「でも、性格は最悪で何人もの人間が泣きを見ているにもかかわらず、意外に業界内にファンは多いんですよ」
「……そうなのか？」
「モデル時代から、勘がいいというが、要求されたことには瞬時に答えるんです。女優経験は浅いのに、演技力には定評があります。物部も彼女のそういう部分に牽かれているんでしょうね」
能力に性格は関係ない。どこの業界でも同じだ。そういう傲慢さが、自信に繋がり、結果芹沢本人を増長させる。
「それに、セレブの人間を主役にそえた上で数字を取るためには、堅実な俳優のキャスティングに加え、お笑い芸人のような話題となるような演者をブッキングしなければならない。そうなると製作費のコストが莫大に掛かる。いかに制作会社を使い、完パケでも意味が無い。事実、この前のクールは二桁を割りました。だが、セレブと良好な関係を保つには起用せざるおえない……」
私は話を聞きながら、焦げかけた肉を皿に引き寄せる。
セレブはキー局に強い影響力を持つが、一時代を築けるようなスター性に満ちたタレントを獲得できないという深刻な事情がある。
情報操作にかまけて、タレントの発掘と育成を疎かにしていれば、当然のことだ。このネット時代、世間はそんなに馬鹿ではない。虚構の人気者など、所詮お呼びではないのだ。
「物部の私的感情を抜きにしても、芹沢玲香を欲しがるわけか……」
「手っ取りばやく、数字が欲しいんでしょう」
宮島は冷めた意見を言った。
「マネージャーに関しては何か掴んだんですか？」
「まだ何も掴んでいないから、宮島ちゃんと情報交換しているんじゃないか」
私の言葉に宮島は苦笑した。
「行方が掴めないという部分も気になる――」
「芹沢玲香のわがままに愛想がつきた、リフレッシュも兼ねてどこか旅に出てるとそんなところじゃないですか？」

「……それだけならいいがな」
「といいますと？」
「――依頼人の態度が少し気になってな。小心者の私としては自分の立ち位置が危うくなる前に確認しておきたいのさ」
「……またまた。それが解れば、報酬の引き上げ交渉もできると」
私は苦笑すると「そういうことだ」と答える。だが、半分は本音だった。
業界の力学や事務所の思惑、状況を把握しておかなければ、犯罪の片棒を担がされる羽目になる。それは避けたい。こういう臆病さが、自分の命を何度救ったか知れない。
「ちょっと情報を集めてみましょうか？」
「いいのか？　責任は追えんぞ」
「そんなヘマしませんよ」
渡りに船だ。もともと宮島を巻き込むことは計画だった。宮島の情報網が加われば、私の仕事は随分やりやすくなる。
「その代わり言うまでもない事ですが、なんかおいしいネタがあったら、こっちにも回してくださいよ」
「……もちろんだ」
持ちつ持たれず――賀川同様、それが我々の関係の本質だった。
「いちお、釘を差しておくが、とりあえずは今は仕事として私が動いている間は記事にしないで欲しい。報道協定というやつだ」
「……わかってますよ。根津さんの邪魔はしませんから。でも、もしこの男の消息がつかめたら独占インタビューなんかとらせていただけると有り難いかな、みたいな」
「記事にできるのか？　元業界関係者とか業界通じゃ記事として意味が無いぞ」
「……大丈夫ですよ。女性週刊誌は絶対に食い付くネタです。本人の証言さえ取れれば、どうとでもなります。それにですよ、もし、この男が殺されたりでもしていたら……」
宮島の顔が綻ぶ。

「笑いがとまらんな。記者としては――」
宮島はビールを飲み干すと、大きく息を吐いた。
記者としてはあまりに美味しすぎるネタ。タレント、芸能スキャンダル、殺人。主婦がよだれを垂らしそうな要素が渦巻いている。
浮き足立つ宮島に対しどこか私は冷ややかだった。宮島と私の温度差を意識していた。

女性タレント　小川瑞貴

高級ブランドの直営店が立ち並び、女どもを呼び寄せている。昼を少し回った時間にもかかわらず、ＯＬはもとより学校帰りの学生の姿も多い。

私は表参道にいた。携帯電話をかけるフリをしながら、街の一角を見ている。

目の前の女を追い始めてすでに3日が経過している。

小川瑞貴（本名　小川康子）――東京出身の若手女優だ。

だが、女優とは名ばかりで代表作などは無い。テレビドラマではあくまで脇の扱いで、まだ主演は張っていない。演技は悪くないが、新たな新人が出てくればすぐに霞んでしまうだろう。

ＣＭ契約本数は現在一本程度。

高校時代にモデル事務所に入りモデルとなる。モデルといえば聞こえはいいが、コンパニオンか撮影会をこなすような程度の存在だったが、数々の事務所を点々とし、事務所の移籍と共に芸名を何度も変え、現在の名前に落ち着くと、短大生時代に企業のキャンギャルに選出、その後タレントに転向した。男性誌でグラビアが話題になりブレイク、そしてテレビに進出する。

今、事務所の方も必死になって女優として世間に認知させようとしているが如何せん、事務所は大手ではないため、チョイ役しか回ってこないのが現状だった。

メールを送った知り合いの芸能マネージャーや広告代理店勤務の営業マンなどの業界関係者からは宮島と賀川から得た以上の情報は得られなかった。

森川の現住所だった千葉の自宅へ足を運んでみたが、新聞が幾重にも突きささったドアとダイレクトメールが貯まったメールボックスが、主人の不在を告げていた。戸籍のほうも洗ってはみたが、住民票の変更手続きはない。実家に戻っている形跡もない。

出鼻から森川へ繋がる糸は断たれた。後は関係者と思われる人間に片っ端から聞き込みを掛けるだけだ。
だが、この依頼は森川が勤めていたアクティブスター関係者に直接当たる訳にはいかない。このことが森川を捜し出す事の難しさを物語っている。
私は自身の情報網である業界関係者数人にあたり、森川に関しての噂を集めた。
聞こえてくるのは好意的なものばかりだった。
仕事に対しての熱意や情熱、そしてタレントに対する献身的な行動はマネージャーとしては多大な評価を得ていた。もちろん営業力も勝れ、ディレクターやプロデューサー、出版関係者と深い信頼関係を築いている。
一方で芹沢の悪評が際立ってくる。
遅刻魔で、態度は悪く、自己主張が強い――気紛で気分屋な所があり、楽屋から何度もスタッフを叱責する声が聞こえてきたという証言もある。
真偽は定かではないが、高校時代から、高級マンションに一人暮らしを行い、金蔓の男を何人も従えていたという噂もある。
そんな生活を続けていたから、性格は傲慢になるのも無理は無い。
だが、森川を追う手がかりになるような情報ではない。
芹沢は女王様扱いされることを好み、気に入らない人間は徹底的に虐め抜くらしい。事実、一緒に仕事をしたモデルや女性タレントの何人かが被害に遭っている。
言わば、小川瑞貴はその被害者の一人とも言える。直接話を聞きたかった私は小川の現住所の割り出しに入った。
小川を選んだのは特に意味はない。強いて言えば私の趣味、だ。
賀川からの情報から、現住所を知ると、小川を張り込み、行動確認を行いながら、接触のタイミングを計っていた。
小川と芹沢が出演したドラマに関してはネット上に資料があった。ご丁寧に各回の視聴率まで載っている。

仕事と恋、そして自分探しという手垢に塗れたようなテーマを、バブル期を彷彿させるような華やかさで糊塗した、二十代から三十代の女性、いわゆるF層ねらいの露骨なまでに狙ったあざといドラマだった。今まで繰り返し繰り返し、再生産された安手の内容もので主役は芹沢玲香、話題性だけはある役者やタレントが集められている。

そんな中で小川は三番手、四番手程度の存在だ。だが、小川はドラマの話題作りと男性層を取り込むために投入された存在だった。グラビアで男性の圧倒的支持の元、勝ち獲たポジションだった。

健康美に満ちた均整のとれたスタイルと、屈託のない笑顔は世の男どもを虜にした。事実、小川はあらゆるグラビア雑誌を席巻する。

小川はドラマが始まる前から注目されていた。キャストの中ではかなり異質の存在ゆえに、すぐにバッシングの対象になるもの時間が掛からなかった。

また、芹沢自身はそのことに対して面白くなかったようだ。それはそうだろう。

女性誌のトップ専属モデルとして、芸能界の花道を歩き、ステップアップを一足飛びで叶えている。

タレントとして質が違う者同志が一つの現場に会えば、衝突が起きない訳がない。

不仲は週刊誌を通し、たびたび伝えられた。

ドラマの視聴率低迷により、バッシングはさらに加速する。ドラマの出来の悪さが、いつのまにか小川のバッシングへと転化していた。

そして小川は最終回まで残り二話という段階で、突如降板を余儀なくされる。これにはさまざまな憶測が飛びかう中、数字が延びず、圧力をかけられたという見方が濃厚であった。

いつしか小川も仕事も干されていた。

芸能界においてタレントという商品は一度失った信用を取り戻すのは困難だ。特に小川のような事務所として力のないところは尚更

だった。
そんな状態がもう半年も続いている。
瑞貴は帽子を深々と被り、赤いセルフレームの眼鏡を掛けているという芸能人の典型的な休日スタイルで行動していた。
吉祥寺の自宅から近くのスポーツジムに通い、水泳などでスタイル維持に努めている。本日もジム帰りである。
私は携帯電話をスーツに仕舞うと小川の跡を追う。
瑞貴は通り添いのドラッグストアに入っていった。私も瑞貴に気付かれないよう店に入っていく。
瑞貴の視界に入らないよう立ち位置を気にしながら私は、瑞貴の行動を観察した。
瑞貴は買い物カゴを持ちながら、什器に陳列された商品を眺めている。やはりダイエットに関心が高いのか、美容品コーナーやダイエットコーナーによく立ち止まった。
私は瑞貴の背後に回るとカゴの中身を確認した。
大量のビタミン剤やダイエットサプリメントだった。
そのままレジに向かい買物を終えると、小川はドラッグストアを出る。
いつしか私は仕事抜きで彼女に興味を持ちはじめていた。
瑞貴は交友関係はあまり広いほうではないらしい。張り込みをして誰かと接触したことはない。友達付き合いが元々下手なのか、ドラマ降板の影響なのだろうか。仲良くすると、とばっちりを受けることを怖れ、仲間内から避けられているのかもしれない。
私は尾行ポジションを小川の背後直線に陣取ると、接触するため、小川との距離を一気に詰めた。
右側面から回り込むと、「……すみません」と声を掛ける。
突然のことに驚いたのか、小川は身体を大きく震わせ、動きを止める。
「小川瑞貴さんですね……？」
突然、名前を呼ばれた為か、瑞貴の眼が大きく見開かれる。恐怖

と驚きが入り交じった表情で私を見る。
間近で見ると美しい女だった。私は思わず息を飲む。
「……始めにお断わりしておきますが、私はマスコミの人間ではありません。ある人間を探していまして、ぜひ小川さんにお話をお聞きしたいと思いまして」
安心させるため、私はあらかじめ用意していた内容を言った。
「……だ、誰ですか？」瑞貴の声には怯えがあった。軽く笑いを取るつもりが、かえって警戒させてしまった。遊びが過ぎたことに私は後悔した。
「森川隆さんです――」
森川の名を聞いた途端、瑞貴の眉間にしわが寄る。
「……ここで立ち話もなんですから、どこか静かなところで……。人目に付くと何かと面倒でしょう。それこそマスコミの的になりますよ……？」
私の言葉に、瑞貴は無言のままだった。

ギブアンドテイク

私と瑞貴は近くの喫茶店に入った。結局、瑞貴は私に従った。
芸能人を調査して、いつも真っ先に驚かされるのはその頭身と細さである。
小川瑞貴も例外ではなかった。
座高は女性にしては高く、一目でスタイルが良いとわかる。
間近で見る彼女は、画面やレンズ越しで見るよりも遥かに美しかった。
さすがは芸能人だった。
顔のパーツ一つ一つとってもまったく欠点がなく、正しい配置で小さな顔に収まっている。
黒目がちの柔和な瞳は長い睫毛に彩られ、憂いに満ち、不安げな顔を浮かべている。どこか幼さと成熟さが同居した作りの美貌だった。
ボディは典型的なモデル体形だ。腰が高く、細くて、そしてしなやかだった。
芹沢礼香のような人工美に満ちた美しさではない。全く手を加えていないナチュラルさに満ちたものだった。
柑橘系の香水を使っているのか、瑞貴と体臭と交ざりあった甘い香りが私を激しく酔わせる。私の中で動悸が激しくなっていた。
「申し訳ありません。お話をうかがえたらと思いまして、後を尾けました。お許しください」
と、私は切り出し、瑞貴に謝罪すると、名刺を差し出す。
正規調査用のものだった。その他身分を偽った変装用のものも何枚か常備所持している。
名刺一枚で、人間は簡単に騙されてくれる。
「わたしは何も知りません。申し訳ありませんが……」
だが、瑞貴は席を立とうとしなかった。押しに弱いタイプなのだ

ろうか、先程から私の頼みを断らない。
「……何せ、何にも手がかりがなくて、こっちも困ってましてね。何でもかまわないんです」
私は言う。
少し瑞貴を解す必要があった。今の状態では聞ける話も聞けない。
「……森川さんの会社に行って、聞いたほうがよろしいんじゃないんですか？」
そっけない意見だった。
「ああいう所は、変な噂を立てられるのを嫌うんですよ。聞き込みしようとしたところで箝口令が叱れているに決まってる。まあ、まず外堀を埋めようと思いましてね。ご協力頂けませんか……？」
私はなるべく丁寧な言葉遣いを心がけた。慇懃無礼な態度では心を開いてはもらえない。
瑞貴は何も答えなかったが、ようやく安心したのか、軽く息を吐く。
私は瑞貴には悟られないようにＩＣレコーダーの録音スイッチを押す。ＩＣレコーダーにはマイクを接続している。後で聞き込みの内容を検証するためだ。
「……たしかに、森川さんとは面識があります」瑞貴は口を開いた。
「ドラマ収録の現場で何度かお話したこともありますから……」
「本当ですか……？」
私の問いに瑞貴は頷く。
「優秀なマネージャーだと思います。芹沢さんにはもったいないくらいの……」
「――のようですね。彼を悪く言う人間は誰もいない。口を揃えて言うのは芹沢さんばかりだ」
瑞貴の表情が綻んだ。
「仕事に対しては真面目な方でしたか……？」
「森川さんが……ですか？」
私は頷くと「はい」瑞貴は答えた。

「……芹沢さんの現場には必ず訪れていました。芹沢さんの仕事を確認するために。芹沢さんは何かとトラブルの多い方ですから……」
「そんな熱意にあふれた方が、突然会社を辞めた。小川さんは森川さんはなぜ失踪したと思いますか？」
「芹沢さんに愛想がつきた。そういうことなんじゃないでしょうか？」
再び眉間にしわを寄せながら瑞貴が答えた。芹沢のことになると、表情が険しくなる。
「芹沢さんとはどういう方ですか？」
私は臆せず尋ねる。
「――自分の利にならない人とは口も聞かない人ようなです。ＡＤなんか全く相手にしません。そういえば、お分りになりますか？」
「自己中心的な方だと？」
私のストレートな言い方が可笑しかったのか、瑞貴は肯定するように微笑する。
「……質問を変えましょう。芹沢さんの交友関係についてお聞きしたいのですが」
私の問いに、瑞貴の表情が一瞬変わるのを見逃さなかった。
「根津さんは芹沢さんに問題があると思ってらっしゃるんですか……？　森川さんの個人的な理由かも……恋人とうまく行かなくなったとか――」
「残念ながら、彼に恋人が居るという事実はありません」
否定する私に、瑞貴は窓の方を見ると「なぜ私の所に来たんですか……？」と訊いた。
瑞貴の質問に私は答えられなかった。
「……正直にお答えしていただいてかまいませんよ」
瑞貴が自嘲気味に笑いながら言う。そのどこか憔悴した様子が奇妙だった。
「調査を始めたばかりで、いきなり近辺関係者に聞き込みはできませんよ。他意はありません……。不愉快に思われたら謝ります」

私は頭を下げる。
瑞貴は再び外に視線を向けると、「誰かと付き合っている人はいるようですよ」と言った。
「へえ、どなたですか？」
「さあ……そこまでは。わたし、彼女とは友達じゃないので……」
私が芹沢の話をする度に、瑞貴は言葉の端々に芹沢への嫌悪感を滲ませていた。芹沢玲香の事は本当に嫌いらしい。
芹沢玲香と瑞貴の間に何があったのか、踏み込みたいのは山々だが、調査上関係ない情報だ。
「商売敵……ですか？」
私の言葉に、瑞貴は笑う。
「向こうはわたしを相手にもしてませんよ」
一筋縄ではいかない目の前の女に対し、私は徐々に楽しくなっていた。久しぶりに味わう男女の駆け引きだった。
「……森川さんでないことは確かです。彼とはないと思います」
瑞貴は断言すると「でも一度くらいなら関係はあるかも」と続けた。
「えっ？」
瑞貴の言葉に、私は自分の耳を疑った。
「……時々でしたが彼の芹沢さんを見る眼がマネージャー以上のものを感じたことはあります。酔った勢いとか、本人の気紛れとか。芹沢さんにとっては遊びでも、森川さんにとっては……」
「確証があるんですか？」
「いいえ」瑞貴は即座に否定した。「――すみません。少し言葉がすぎました。忘れてください」というと瑞貴は頭を下げた。
私は瑞貴の言葉が戯言は思えなかった。女はそういうことに敏感だ。女同士が感じる何かがあったのだろう。悪評を立てるために出た言葉だとは到底思えなかった。少なくとも、そんなことを何の良心の呵責もなく出来るほど瑞貴は器用ではないだろう。芹沢への感情的態度がそれを如実に表していた。

もう少し会話を続けていたかったが、これ以上話しても何も得られないようだ。
「――いろいろとありがとうございました」と席を立とうする私に、
「待ってください」と瑞貴は呼び止めた。
「一つお願いがあります。聞き込みに対する謝礼というわけではありませんが……」
突然の瑞貴の申し出に、私は身を堅くする。金銭でも要求してくるつもりだろうか。
「……なんでしょう？」
私は尋ねた。
「……もし、森川さんの居場所がわかったら、わたしにも教えていただけませんか？」
瑞貴の思わぬ頼みに私は返答に窮した。
瑞貴は何か決意を秘めたような表情をしていた。それはグラビアやテレビでは決して見せたことがない、小川瑞貴という仮面を脱いだ小川康子という人間性を覗かせていた。
私は席に再び着く。
「……困ったな。それは依頼人に対する裏切り行為ですからね……」
「無理でしょうか……？」
瑞貴は食い下がる。
すぐには回答できなかった。
「……では、こうしましょう。芹沢玲香や森川さんに関する情報が何か入ったら根津さんにお教えいたします。なんでしたら、私が直接動いて情報収集に協力しても構いません」
思いがけない提案に私は戸惑った。
「――ギブアンドテイクですか？」
私の言葉に瑞貴は頷く。
「……わたしのような人間を情報源に持っているのは根津さんにとっては損にはならないと思います。あなたの言う通り、森川さんの元同僚達は絶対に情報を漏らさないでしょうし――」

私は瑞貴の申し出に正直困惑していた。瑞貴は私の調査結果を週刊誌にリークでもするつもりだろうか。忠告しておくべきか迷った。

芸能界の大物たちですら、その掟は守る。そうしなければ圧力を掛けられ、仕事を失う。

現にご意見番と称する連中は絶対に大手のタレントを批判しない。槍玉に上げるのは弱小事務所の連中ばかりだ。自らの同胞には手厚く保護し、反逆者たちは徹底的に弾圧する。それがこの世界の体質だ。

だが、瑞貴の言う通り、業界関係者の情報はきわめて貴重なのも確かだ。瑞貴の提示した条件は手がかりの無い私にとってとても魅力的だった。少なくともネットの情報に振り回されるよりはましだろう。

瑞貴の次の一言が決定的だった。

「少なくとも貴方の仕事を邪魔するようなことはしません」

「……わかりました」

私は観念したように言った。

「ただし、口外無用が絶対条件です。業界の方ですからその理由はいわずとも分かるでしょうが、よろしいですね……？」

「約束します」

瑞貴は私のことを真っすぐに見ながら言った。

私は改めて瑞貴に美しさを再確認していた。油断しているとその美しさに吸い込まれそうになる。

事前に打ち合せしたかのように、私と瑞貴は携帯電話を同時に取り出していた。

アイドルへの聞き込み

私は車でビルを張り込みをしていた。

芹沢玲香が在席するアクティブスターは代官山に事務所を構える。オフィスが在席するビルは八階建ての雑居ビルで、そこの四階と五階を借り切っている。四階は事務所スペースで、五階はレッスン室になっている。アクティブは元々モデル派遣業を主体とし、芸能方面に事業を拡大したという経緯がある。レッスン室を確保しているのはその為だろう。

芸翔と比べるとチンケな事務所だが、住宅マンションの一室を事務所とするようなプロダクションと比べたら遥かにマシだった。それはこのプロダクションの勢いを物語っている。

ビルの入り口から人が出るたびに双眼鏡で顔をチェックする。膝には週刊誌のグラビアページが開かれている。

新人アイドル大集合と銘打ち、複数のアイドルが水着姿で掲載されている。

瑞貴からたいした情報を得ることができなかった私は方向転換し、芹沢玲香周辺関係者への調査へと切り替えた。

もちろん芸能事務所の社員に直接聞き込みをかけるわけではない。標的は所属タレント――しかも新人である。

業界の話題は次クールのドラマで持ちきりだった。すでに制作発表や広告代理店から情報が漏れ始めている。

夕方五時を回ると、事務所の入り口から女が出てきた。

デニムのジャケットに大きなトートバックを肩から下げ、サングラスを掛けた女だった。

私は双眼鏡で確認する。

顔の確認が出来た。

間違いなかった――大塚えりだ。

携帯を玩びながら、えりは駅の方向に向かっていく。

私は車を降り、えりを追尾した。
交差点で止まると、私はえりの背後に立つ。
斜め後から回りこむと私は、「すみません」とえりに声を掛けた。
えりは私を見る。
「大塚えりさんですよね？」
「……そうですが」
私はえりとの距離を一気に詰めると、彼女に畳んだ万札を握らせる。
「……芸能記者の方ですか？」
えりの問いに、私はとっさに「はい」と返事をした。
「……名刺はわけあってお渡しできませんが、ちょっとお聞きしたいことがありまして。お手間は取らせません」
警戒しているえり考える暇を与えないよう、私は矢継ぎ早に言葉を放つ。
「少ないですが、お礼もさせていただきます。今のとは別に――」
金を匂わせたとたん、えりの瞳が一瞬光ったのを、私は見逃さなかった。
私はえりと駐車しているところまでいったん戻り、車に乗ると代官山を離れた。
酒や食事をするにも中途半端な時間だった。
取り敢えず車を繁華街へ流し、パーキングエリアに停めると、私とえりはカラオケ店に入っていた。ビルが丸々カラオケ店の大型店舗だった。
受付で手続きを済ませ、私とえりはカラケルームに入った。ルームのソファーに座るえりに私を警戒するような素振りはないが、顔にはどこか疲労感が漂っていた。
「何か頼みますか？」
私はえりに尋ねる。
「……ジュース。甘いものが飲みたいな」
私は壁にある受話器を取るとフロントに二つオーダーした。アル

コールを勧めるようなことはしなかった。警戒されては元も子もない。
「……お疲れのようですね」
私の言葉にえりは顔をしかめながら頷いた。
「もう、毎日演技と発声の練習で……」
えりは堰を切ったように仕事の愚痴を漏らしはじめた。
「ドラマに出られるかもしれないんです……っていってもエキストラみたいなものですけど。少しでも現場に馴れさせる為にって。それに向けての準備。それにドラマに出たら泊も付くでしょ……？」
すぐにバーターだと理解した。最近、アクティブスターは特定のキー局との関係が深い。癒着といっても良い。
スタッフがすぐにジュースが運んできた。えりはジュースを一口中身を含むと、堰を切ったように、自分のことを話始めた。
私は彼女をほぐすために聞き役に努めた。新人といってもマネージャーが付くようなご身分ではない。当然、交通手段も電車だろう。
アクティブスターのタレントで聞き込みをするなら誰がいいか賀川に尋ねたところ、賀川は大塚えりの名を挙げた。握手会での屈託のない様子が気に入ったようだ。
たしかにどこか明け透けで緩い部分が時々覗く。事実、私への警戒心はすぐに揺るぎ、いつのまにか饒舌になっていた。
好奇心が旺盛なのか、私の仕事に対して興味を示し、質問攻めにあった。歳は一八で、シャネルのサングラスの下は猫を思わせる顔立ちの美少女だ。むしろ美人すぎて個性が無いといえるかもしれない。だが、話し方や仕草に愛敬があり、明るい娘だった。美人にありがちな気位の高さも無い。他人を簡単には信用しない私ですら出会って数分間の間しか経っていないのに好感を持った。
たわいもない会話が一段落し、えりはコップを手に取りストローでジュースを飲んだ。
私は、本題に入ろうとＩＣレコーダーを取出しのスイッチを入れようとした時、「……お願いがあるんですが」とえりが言った。

「なんでしょう？」
「もし、よかったらでいいんですけどぉ」
えりは甘ったるい声を出す。
「……あと二枚出してもらえませんか。今月正直厳しくて……」
えりは手を合わせながら懇願した。
私は苦笑すると二枚万札を出し、ナプキンにくるんでえりに渡す。実は最大五万までは出すつもりだった。
えりは金を受け取ると、満面の笑みを浮かべる。えりの喜ぶ様子が微笑ましかった。
新人の悲しさだ。ギャラは事務所にピンはねされて薄給に加えて仕事はハード。礼儀作法にも厳しい。もちろん仕事先やオーディション会場への交通費などは一切出ない。甘い夢を抱く娘は大概は夢を打ち砕れ去っていく。アイドルを辞める娘が後を絶たないも無理はない。むしろＡＶ業界の方がずっとギャラも扱いもいい。
「それでなんですが……」
私が切り出すとえりは微笑んだ。笑顔は可愛かった。さすが現役のアイドルだ。
「……森川さんのことでしょう？」
私は内心驚きながら「ええ」と認めると、えりの相好は崩れた。知っていることをしゃべりたくてしょうがないといた感じだった。渡りに船だ。
「……事務所の方でも大騒ぎでしたよ。なんか突然来なくなっちゃって」
えりは言った。
「彼に恋人のような存在は……？」
私の問いにえりは笑う。
「……いるわけないでしょう。現場のスケジュール調整とかで、森川さん散々振り回されていたから。ここだけの話ですけど、芹沢さんってやりにくいってマネージャーの間じゃ有名だったから……」
「……みなさん、そうおっしゃいますよ」

「わたしのマネージャーが言ってたんですけど、森川さん芹沢さんのことで上に呼び出されて怒られてたとかいう噂があるんですよ」
「……ほう」
私は声を上げる。
「何か、大きな仕事が決まるとかなんとかで、この大事な時期にもっとしっかり管理しておけとかなんとか、お小言食らったって・・・・・・。言う相手間違ってますよね」
えりはジュースを再び飲んだ。
「結局のところ、逃げ出したんじゃないかって、事務所の人達と散々盛りあがっちゃって。仕事先の人にも聞かれちゃって。体裁が悪いですよね――」
「大きな仕事とは……？」
「……なんか映画に出るみたいです。主演で。でも、いわゆる大予算の娯楽大作みたいなものじゃなくて、インディーズ色の強い作品性の高いものに出演するとかなんとか。海外の映画祭なんかも視野に入れているらしいですよ」
肩肘をつきながらえりから溜息が漏れた。えりのような新人にしてみれば夢のような仕事だろう。
「インディーズ色というのは、独立系の配給会社からですか？」
私の問いにえりは首を傾げる。独立系とはアメリカに本社をもたない日本独自の配給会社である。最近は日本大手映画会社のように映画制作を買って出る所も珍しくない。
「それとも大手映画会社ですか？」
「ちょっとわかんない……」
最近の映画制作は制作委員会という共同出資による制作が一般的だ。出版社や芹沢玲香のＣＭスポンサーが絡めば、アクティブのような中堅芸能事務所でもリスクを背負わず興行・配給に乗り出せる。
この辺は後で確認を取ったほうがよさそうだ。
私は「誰が撮るんですか？」と訊くと「それもわかんないなー」と、えりは眉を寄せた。

「芹沢さん頭いいですからね。結構仕事選んでますから。今の現状に満足していないっていうか、そういう認識がちゃんとできてるっていうんですか？　はっきりいって彼女のポジションって新しい人が出てきたら、すぐに変わっちゃうような所じゃないですか。その前に自分の位置を固めておきたいんじゃないんでしょうか」

新人の割には生意気なことを言う。だが、説得力はあった。

「選んでいる割りにはたわいもないドラマに出ていますね。ほら、小川瑞貴さんとかが出ていた……」

「ああ、あれ……」

えりは肩を竦める。

「なんかセレブの関係で出演えざる終えなかったみたいですね。芹沢さんは乗り気じゃなかったみたいですよ。なんかテレビドラマの仕事は今後減らしていくとか言う話もあるんですよ」

「へえ」私は声を漏らす。思いの外、セレブと芹沢の関係は濃密のようだ。映画制作もセレブが絡んでいるのかもしれない。ならば、制作費の説明がつく。

「最近のドラマって、原作ものばかりで企画も安易だから演者の方もメリットが無いんですよね」　えりの意見に私は頷く。確かにそうだ。

昨今のテレビドラマの質は落ちる一方だ。消耗品としての要素が強い昨今のタレントにとってはそれは自らの商品価値を害なうだけだろう。芹沢が危惧を抱いてもおかしくない。

「彼女とは仲がよろしいんですか？」

私は尋ねる。

「とんでもない」えりは首を振る。

「事務所ですれ違いざま挨拶がてら何回か話をしたことはありますよ。いちお先輩ですけど、雲の上の人なんで……」

「だからこそ噂にあがりやすい」私の言葉にえりは含みのあるような笑い方をした。きっと仲間内で芹沢の噂が、度々立ち上っているのだろう。

「交友関係についてお聞きしましょうか？」
私は話題を変える。
「わたしがインタビューされてるみたい」
えりは笑いながら言った。
「一時期、Ｊリーガーと付き合っていたという噂を聞きましたが、まだ続いているんですか？」
モデルとスポーツ選手。よくある話だ。モデルのスポーツ選手好きは業界では有名だ。
スポーツ選手は金回りもいいし、周囲の羨望を集める。モデルというより女の二大行動原理である見栄と物欲がそうさせるものなのかもしれない。
男はＪリーガーといっても花形選手ではなく、瑞貴もネームバリューは今ほど無かったため、マスコミで話題になる事無く自然消滅した。
「昔の話でしょ？　いまは新しい人と付き合っているじゃないんですか」
「新しい人？」
私は聞き返す。
「交友関係は広いみたいなんですよ。以前わたしの友達が六本木で見かけたらしいんですけど、友達と数人で飲み歩いていたって。お金持ってそうな人だったらしいですよ」
「今はやりのＩＴ関係とか？」
えりは笑う。
「事務所においての関係は良好なのですか？」
私は別の質問をした。
「さっきの話じゃないですけど事務所との方針はずれてきてるんじゃないでしょうか？バラエティ番組の出演の話があったんですよ。番宣で」
「へえ」
「でも、芹沢さん断ったんらしいんですよ、森川さんを通して……。

イメージあわないとかなんとか。どんな形でもテレビ出れていいのに……」
口を尖らせながら、えりは言った。
「森川さんはどんな人ですか？」
「仕事には厳しい人？　遅刻とか絶対許さないし、礼儀とかもうるさくて……。髪型とか色まで細かく指定してくるし、わたしは苦手……かな？」
私は芹沢と森川に軋轢のようなものがあったのか急に知りたくなった。
「芹沢さんもそうだったんですか？」
「芹沢に関しては森川さんも口が出せないところがあって。扱いはまったく違ってました。まさにマネージャーでしたね」
話は一通りついた。どれも、たいした情報ではない。
本題はこれからだった。
「……ところで」私は身を乗り出す。「森川さんに直接お話をききたいのですが、行方が掴めないんですよ」
「そうなんですか」
「彼の行き先なんか心当たりはありませんか？」
私の言葉にえりは考えをめぐらすように宙を見る。眉を寄せる仕草が可愛かった。
「そんなこと突然言われても……」
「……じゃあこうしましょう。同僚の方や親しい方にそれとなく探りを入れてもらえませんか？」
私は名刺ホルダーから名刺を一枚とるとえりに渡した。名刺を手に取ると、えりは私の顔をじっと見る。
「プライベートのこと、趣味、交友関係、どんなことでもかまいません。何か掴んだら教えていただけないでしょうか」
「……只で、ですか？」
彼女の眼は期待に満ちていた。私は苦笑する。
「もちろん有力な情報であれば報酬をお支払いします。今日のよう

に……ね」
「やった……！」
えりは猫のような瞳を細めて、顔をほころばせた。
急に目の前の女が欲しくなった。女と飯に食うにもいい頃合だった。
「これから家に帰るんですか？」私は尋ねていた。
「ええ、そうですけど……」
「じゃあ、これからどこか食事にいきませんか？　今のお礼も兼ねて。もちろん家まではちゃんとお送りしますよ」
えりは私の誘いを拒絶するどころか、可愛く眉を寄せると「どうしよっかな……」と微笑みながらつぶやいた。
賀川に対し多少なりの罪悪感を感じつつ、私の中で期待が高まっていた。

目が覚めるとまだ夜は明けていなかった。隣でえりが寝息をたてている。
シティホテルで私とえりはベットを供にしていた。
恵比寿の子洒落たイタ飯屋で食事をし、恵比寿ガーデンプレイスのシティホテルのバーに移動し、酒を飲みながら、会話を散々楽しんだ後、私の誘いにえりはあっさり落ちた。
えりの瑞々しい身体に触れ、若い女の身体を十分に堪能した。
ベットから身を起こし、シティホテルの窓から外の夜景を眺めながら、私はえりから得た情報を反芻していた。
やはり内部関係者の話は価値がある。今後もえりと関係を続け、情報を引きだすつもりだった。
薄暗い部屋の中で何かが光を放っていた。私の携帯の着信ランプだった。
携帯を開き、画面を見る。
宮島からだった。何度も私に電話を書けた履歴がある。私はメモ

リーから宮島のナンバーを呼び出すと、通話ボタンを押した。
――根津さんですか？
すぐに電話は繋がった。宮島の声はどこか切迫している。
「何か新しいネタでも掴んだか？」
――……ええ
宮島の様子がおかしいことが電話越しでも伝わってくる。
――藤崎の熱愛が報道されますよ。
「……何？」
宮島が一瞬何を言っているのか理解できなかった。
――……今度発売の『マッシブ』で掲載されます。
えりが寝返りを打つ。
「……ちょっと待て」
私はえりを起こさないようベットから起きると、服を素早く身につけ、カードキーを持って部屋を出た。
「相手は誰だ？」
――……藤崎と伊沢達也です。
「なんだと……！」
思わず我が耳を疑った。
「……セレブが仕掛けた話題作りか？」
――……いいや、そういうわけではないみたいです。まあ事務所から通達が下り、結局全紙掲載になるそうですけど……。
動悸が激しくなり、手が震えていた。
「セレブ側が仕掛けた物じゃないのか？」
私は尋ねた。
――違います。今回はセレブ側のリークじゃないことは確かみたいです。
「では、伊沢側のリークか？」
伊沢側の売名行為。咄嗟にそう思った事を口にしていた。
――いや、それも違うみたいで……。セレブに喧嘩を売るほど、馬鹿じゃないでしょう。それに伊沢の事務所の社長ですけどさっそ

く物部に呼び付けられたみたいですよ。
「物部に喧嘩を吹っかけるような真似はしないか……」
私はそういいながら伊沢に同情していた。軽い気持ちで手を出した代償は大きい。今回のことを機に伊沢は仕事を制限されるかもしれない。
「芸翔の線は？」
私は宮島が尋ねる。
――……根津さんの方がご存じなんじゃないんですか？
そういう説明は芸翔から受けていなかった。そう思ったと同時に宮島の真意を理解した。ネタを小出しすることで私から裏取りをしているのだ。食えない男だ。
「いや、私は知らない」
――……本当ですか？
食い下がる宮島が癇に触り、私は苛立ちながら「本当だ」と言った。
――……そうですか。てっきり芸翔の情報戦だと思ったんですけど……。
何かが私の周りで起こり始めている。足場が揺らいでいる。
頭に活を入れ、回転させようとする。思ったほど加速がかからない。
「根津さん？」と呼ばれ、「……ああ」と私は我に帰る。
「芹沢の方は何かつかんだか？」と聞くと宮島は黙った。
「……どうした？」私は尋ねる。
――それなんですが……。
言いにくそうに宮島は言った。
――森川の行方なんですけど、セレブの蓮沼が動いているみたいなんですよ。
「蓮沼……。どういうことだ？」
また思いがけない名前が挙がる。
――……さあ。なんでなんでしょうねえ。恐くて確認できないで

すよ。森川の奴、相当ヤバいネタでも抱えてるんじゃないでしょうかねえ……。
宮島が警戒している様子が、すぐに分かった。
――……ってな訳で悪いんですが、俺、手を引かせてもらいますわ……。
「そうなるか」
――……すいません。
申し訳なさそうに宮島は言う。
「もう圧力を掛けてきたのか」
私は念の為確認した。
――……いいえ。でも蓮沼に睨まれたら面倒臭いんで……。ちょっと以前蓮沼のことを嗅ぎ回った奴がいて……。そいつ圧力掛けられて、しばらくの間仕事干されちゃって。時期を見回せて、別の件で……。
「わかった」
わたしは舌打ちを飲み込みながら言った。「でも、なにか情報が入ったら報せてほしい。宮島ちゃんの名前は絶対に出さないよ」
――ホントすいません……。
宮島を攻める気にはならなかった。相手が悪すぎる。危ないと思ったらすぐに、ケツを巻く。この業界で生き残るための術だ。
「マッシブだが、どこでネタを仕入れたかその経緯を探ってみてもらえないか？」
――いいですよ。俺もちょっと気になるんで。
「ああ、そうだ」私は宮島に言い忘れていたことを思い出す。「ついでと言ってはなんだが、小川瑞貴に関しての情報も欲しい」と言った。
――なぜですか？
「個人的な興味だ。ファンなんだよ」
送話器の向こうで宮島は小さく笑うと、「わかりました。気をつけてください」というと電話を切った。

携帯を閉じ、部屋に戻ると、えりがベットから身を起こしていた。
「どうしたの？」
目を擦りながらえりは言った。
「なんでもない。仕事の話だ。起こして悪かった」
私が謝ると、服を脱ぎベットに戻る。
えりは微笑み、腕をからめながら体を寄せてくる。少々欝陶しかったが、私はえりにキスをすると唇の奥に舌を差し入れた。
思考活動に霞がかかる。甘えてくるえりの乳房を揉み拉だくと、えりは悪戯を犯した子供のような笑みを浮かべながら私の分身を握りしめた。だが弄ばれている私の分身は硬度を帯びず、撓垂れたままだった。

下世話な噂と新商品

掲載されている写真は男女一組のカップルを映したものだ。
写真の質感や解像度から携帯電話で撮影したものだろう。互いに戯れあい、キスまで交わしているものまである。
二人は、バラエティー番組の共演をきっかけに急速に接近。デートを繰り返すようになる、と記事にある。
知名度も注目度も高い二人が、よくもまあこれだけ無防備に痴態を晒すなど事務所の管理が甘い証拠だろう。
掲載された雑誌は月刊マッシブだった。
月刊マッシブ――その名に恥じず、イエロージャーナリズムを追求し、セックス、バイオレンス、政治・経済・芸能と権謀術数の世界を余す事無く伝えるいわゆる鬼畜系雑誌として名高い。特に芸能ネタに関しては、ショットアップ以上の業界騒然のネタを巻頭カラーでスクープ掲載する。業界のバーターには一切応じず、その危ないネタゆえに何人もの芸能人が引退に追い込まれている。
芸能事務所とは度々裁判沙汰になりながら、その報道方針は一切変えようとしない、今もっとも勢いのある雑誌である。もちろんセレブも例外では無い。
事実、この一触即発のネタに対し、マッシブ以外の各芸能マスコミは好意的な形で報道していた。
それだけセレブと藤崎はアンタッチャブルということだ。
私の中でここである疑問が一つ生じていた。
芸翔はこのネタを掴んでいた上で、私に調査させたのだろうか、ということだ。
もし、芸翔側が藤崎との交際をすでに掴んでいた上で私に依頼してきたならば話は変わってくる。
その真意は伊沢ではなく、藤崎との交際の証拠を取る為の調査ということ――すなわち芸翔の標的は、藤崎玲奈になる。

私自身、伊沢と藤崎の交際を掴むことはできなかった。調査中、伊沢が藤崎と接触することはなかったなど言い訳にもならない。
いや、伊沢の方は私に担当させ、藤崎は藤崎の方で、極秘裡に別働隊が動いていたのではないか……？
そう考えたほうが自然のような気がした。
もし、私が藤崎の身辺調査の依頼されたら、一にも二にも断っていただろう。セレブ直轄のタレントに手を出すほど私は馬鹿ではない。恐い噂は私の耳にも何度か届いているからだ。
なにかが食い違っている。
伊沢の身辺調査から森川の捜索に依頼がシフトしたのは、このネタが発覚することをに事前に掴んだためではないのか。
いや、掲載されるネタ自体が芸翔が仕掛けたものと考えるのはあまりにも穿った見方か――。
そもそもあのネタの出所は何処なのだろうか。
友人か。
業界関係者か。
それとも当事者本人か。
藤崎にメリットは全く無い。だが、伊沢側は別だ。伊沢に関しては億単位の宣伝費に匹敵するほどの効果がある。伊沢の知名度はこれで一気に上がるだろう。
だが、そんな真似をすれば伊沢側の事務所はセレブに睨まれる。最悪、伊沢はもとより事務所ごとセレブに潰される。
疑問と言いようの無い苛立ちが私の中で渦巻く。
この部分をきっちり糾しておかねば、今後の私に災難が及ぶような気がしてならなかった。伊沢のことで嗅ぎ回っていた私がセレブ側に知れれば、セレブは私を標的としてくる。
何より私自身収まりがつかない。
雑誌発売日の朝、私は早起きし自宅近くのコンビニに出向き、朝飯と共に雑誌とスポーツ紙数誌を買った。
各局の朝のニュースでは、ビックネーム同志の交際なのに、驚く

ほどあっさりと扱っている。ワイドショーではまったく扱わない局すらある。セレブの影響力が伺えた。
釈然としない私は釈明と説明を要求するため小田の携帯に電話をした。
電話は繋がらなかった。
このまま芸翔本社まで乗り込もうか考えていた。だが小田を問い詰めるには情報が不足している。
瑞貴に探りを入れるという考えが浮かんだ。
瑞貴は罷り鳴りにもセレブ系列のタレントである。何か情報が入っているかもしれない。
現在朝の九時を回っている。瑞貴も起きている頃だろう。私は携帯電話に登録した瑞貴のメールアドレスと携帯電話の番号を呼び出していた。
拒否されたらそれまでだ。私は通話ボタンを押した。すぐに電話が繋がる。
――はい。
瑞貴の声だった。寝起きの声ではない。瑞貴らしいと、私は思った。
「どうも。根津です」
――なんでしょうか？
瑞貴の声に特に不快感はない。芸能人相手に電話が簡単に繋がったことに、私は少々拍子抜けした。
「今日のニュースをご覧になりましたか？」
――藤崎玲奈と伊沢達也の、ですか？
私は「はい」と答えると「何かご存じないかと？」と尋ねた。
――根津さんに何の関係があるんですか……？
瑞貴の鋭い追求に私は言葉を窮した。
「ああ……いえ、ちょっと興味がありましてね」
私がそう答えると瑞貴は黙る。
――……根津さんは本当に芸能ライターとかじゃないんですか…

…？
「違いますよ。参ったな……」
瑞貴の疑り深さに私は苦笑した。
――本当に探偵さんで、森川さんの行方を探すのが目的なんですか？
「……どういう意味ですか？」
――たいした意味はありません。
互いに腹を探りあっている。他人を簡単に信用しない者同志の会話。えりのように簡単にはいかない。
――ただ、根津さんが本当に信用できるかどうか今のわたしには判断できませんから……。
もっともな意見だった。
「貴方を危険にさらすような真似はしないつもりです」
私は見え透いた言葉だとは十分に承知の上で言った。
一呼吸置くと、受話器の向こう側から、
――すみません。
と瑞貴の声が聞こえた。
――……わたし、簡単に人は信じないんです。気分を害されたら謝ります。
私は携帯から口を離し息を吐くと再び携帯を口元に寄せる。
「当然のことです。私達は会って数十分しか話をしていない。それで信じるというほうが無理な話だ」
――……そうですね。
「やはりお互いのことをもっと知る必要があるのでは？」
――はい？
「唾み合うのは互いにとって得策ではない。もう一度お会いしましょう。そしてお互いの持っている情報を公開しあう。ゆっくりお酒でも飲みながら、ね。いかがでしょう？」
私は瑞貴を誘っていた。不用意だとは思ったが、こうでもしなければ瑞貴の思惑を掴むことはできない。

私自身、瑞貴の真意を知りたかった。
少し間が空くと「わかりました」という返事が帰ってきた。予想とは反する答えだった。
――いつにしますか？
と尋ねる瑞貴に驚きつつも、私は今週の予定を思い出していた。気が変わらない、なるべく早いほうがいいだろう。
「では……週末などは？」
――はい。大丈夫です。わたし、今は暇ですから。
瑞貴の最後の言葉に微かな自虐が隠っていた。
「場所は私が決めてよろしいですか？」
――お任せします。
取り敢えず待ち合わせ場と時間を指定すると、私は電話を切った。
相手は芸能人だ。十分に目立つだろう。私と一緒に居るところを誰かに見られて、関係を探られるのも面倒だった。瑞貴にあらぬ噂が立つのは避けたい。
えりといい、瑞貴といい最近は女運がいいようだ。運が確実に向いている。こういうときは攻めの一手あるのみ、だ。

私は女を口説くときに使う麻布の和食ダイニングに週末の予約状況を尋ね、個室と時間の予約を入れると、直接小田に会うために車で、芸翔に向かった。
芸翔の事務所には昼前に到着した。
フロントの受付で小田を呼びだすように言うと小田は不在だった。
「アポの無い人間とは会うことはできない」と受付嬢の型通りの対応に腹が立った私は、伝言も頼まずにビルを出た。
小田が当てにならないならば、別の人間に聞きだすまでのことだ。車に帰ると私はある人物の電話番号のメモリーを呼び出し、電話を掛ける。
電話はすぐ繋がった。

「岡田さんですか。根津です」
――ああ、どうも……！
営業マン特有の必要以上に大げさな返事だった。この白々しい営業口調を聞くたびに苦笑してしまう。
「これからお会いできますか？」
――構いませんが……。
「いま、会社ですか？」
――はい。
「では今からそちらに向かわせていただきます。一時過ぎくらいには着くと思いますので」
私は電話を切ると、車を渋谷方面へ向けた。
岡田は中堅広告代理店の人間だ。大手広告代理店の下請けやテレビ局の編成や営業に深く食い込んでいるため、私に対し有益な情報をくれる宮島とともに重要な情報源である。
以前、岡田を通してスポンサードの依頼により起用候補のタレントの素行調査の仕事を受けた以来の付き合いで、関係が続いている。
調査内容は、秦野めぐみというタレントの男性関係だった。秦野はモデル出身の若手女優で、清涼飲料水のＣＭで一躍話題となったタレントである。
事の始まりは、とある制作会社の敏腕ＣＭディレクターが彼女の起用を熱望していた。
だが、広告主サイドはスキャンダルに敏感だった。私はスポンサーから秦野めぐみの調査を依頼された。
調査を開始してすぐ、私は秦野の男関係の事実を掴んだ。
学歴、会社とともに一流だが、イメージアップにはとても繋がらないような冴えない男であった。芸能人としてはあまりに現実的で、生々しかった。
それは秦野の思考回路は一般の女と何も変わらないということを露呈することになる。
秦野は清潔感を売り物とするタレントであった。タレントとして

汚れ仕事を一切することなく、エリートコースを順調に歩んでいたはずのタレントが手を出すような物件ではない。このことが発覚すれば秦野の俗物ぶりが露呈し、ファンが離れるのは必定だった。それは商品のイメージを害なうことにも繋がる。

結果、私の調査報告により起用の見送りが決定となった。

そして、この話には後日談がある。

とある女性週刊誌が、秦野の入籍をスッパ抜く――彼女は妊娠していたのだ。

通常は交際が発覚してもＣＭ契約中は独身で通すのがこの業界の掟である。しかし当の本人は反省の色がまったく無く、詫びを関係者へＦＡＸを送り付けるだけで済ませ、スポンサーへの謝罪も一切無かった。スポンサードは激怒し、見せしめとばかりに契約を打ち切る。初主演ドラマの大コケと相俟ってこの熱愛発覚により失速し、後進に席を譲る形となる。

噂では、この醜聞にも物部が絡んでいるとの情報を耳にした。その時はよくある噂だと、気に留めなかったが、何かと、私もセレブとは奇縁があるらしい。

芸翔の思惑をある程度把握しておく必要性を感じていた。だが、私は強請りの類いはしない。あくまでトラブルを避けるためだ。

所詮、芸翔もセレブと同じだ。信用に足る存在ではないことが今回のことで証明されたわけだ。

岡田の会社は渋谷区のマンションに事務所をもつ。かつて、大手広告代理店だった人間が独立して、立ち上げた会社らしく、小さい割に繁盛しているらしい。最近は未成年相手のマーケティングや商品開発にも手を染めている。

事務所で岡田を呼びだすと会社近くのファミレスまで移動した。

ファミレスは事務所から五分ほど歩いたところにある。岡田も昼飯や打ち合せでよく利用しているようだ。

岡田はすでに昼飯を済ませていた。私も今は食事を欲していなかったため、コーヒーを二人分注文した。もちろん私の奢りである。
岡田は、濃く整った顔で野性みにあふれ、精悍で肌は浅黒い。若いうちから男の色気を発散している。仕事と遊びを適度に熟しているように見える。プライベートはさぞかしモテるだろうが、噂では近々結婚を控えているらしい。営業職の為か、腰は低く、丁寧な言葉使いに好感が持てる男だった。
「お聞きしたかったのは、芸翔に関してです。というのも今、芸翔から仕事をうけていましてね。岡田さんでしたら何かご存じなのではと……」
私は注文を待たず、さっそく切り出した。
「芸翔の依頼は、どういったものなんですか？」
岡田の問いに一瞬、私は言葉を詰まらせた。
「芹沢玲香の現場マネージャーの行方です」
私は答えた。情報を聞き出すのに、こちらが教えないのは、ルール違反だった。
「……はいはい。なんか失踪しているらしいですよね」
岡田の食い付きの良さが可笑しかった。
「元々は伊沢達也の素行調査だったんですが、いったんその仕事は打ち切りになりまして……。今の依頼に変更させられまして、その矢先にこれだ……」
「……確かに変ですね」
コーヒーが運ばれてきた。岡田はミルクと砂糖を入れスプーンで掻き混ぜる。体格によらず甘党らしい。私はブラックで飲んだ。いいようもなく不味い。
「……根津さんに、裏工作でもさせようとしてたんでしょうかね」
「かもしれませんね」
私は岡田の考えに同意した。
私は基本的に裏工作の類いは行なわないことにしている。タレント同志の競争意識は熾烈極まりない。また事務所のほうも自分の所

のタレントを起用させるために、さまざまな手を使う。私が関わったことが選考者から漏れたと知れば、私の命はいくつあっても足らない。関わったとしても、その手前の下調べまでだ。
「芹沢玲香やこのマネージャーについて何かネタはありませんか？」
岡田は背広のポケットに片手をつっこみ煙草を取り出す。岡田が「いいですか」尋ねると、私は頷いた。岡田は煙草を口に加え百円ライターで火を点ける。
私は煙草は吸わない。吸い殻からＤＮＡを検出できる時代、探偵のやることではない。もっとも、それを他人に強要するつもりはない。
岡田は煙草の灰を灰皿に落としながら「芹沢で一つネタがあるんですよ」と言った。
「なんですか？」
「――まだ噂の域をでていないんですが、いよいよ次世代型スマートファンが発売するらしいんですよ」
新製品の情報――広告代理店らしいネタだった。
「……へえ」
私は適当に相槌を打つ。あまり興味のない話だった。
「日本の携帯電話市場は、もはや開発し尽くされて、付加価値を付けるくらいしか各社違いの差を見せられません……。一方で、日本においてはスマートフォン市場はまだまだ未開です。この新型携帯は、従来のスマートフォンを携帯並みにコンパクトにし、日本人に受けるような作りになっています。タッチパネル採用のスタイシッシュな作りに、各種ＰＣアプリケーションを搭載、大容量の記録容量に、さらに世界初の小型水素電池式の長時間バッテリーを搭載しているらしいんです」
「……キャリアはどこですか？」
岡田が答えたのは、携帯電話業界で万年二位に甘んじているキャリアだった。元国営の謀大手キャリアの首位の独占を奪うための切り札。通話会社も相当気合いが入っている事は、岡田の話からも伺

えた。
　もし、ＣＭキャラクターに起用されれば、芸能プロは莫大な金と話題性を掌握できるだろう。莫大な契約金という報酬。そして知名度が手に入る。一気にブレイクするだろう。事務所的にもきわめて旨味がある。だが、ＣＭは簡単にとれる仕事ではない。
　とくに携帯電話は常に話題性が高い。どこの事務所も垂涎の仕事といえる。
「業界の再編が求められている今、携帯電話の勢力図を変えるともっぱらの評判で、これがヒット間違いないって言われてるんですよ」
　岡田の話が核心に近付きつつあるのを感じた。私は座りを直す。
「それ故にＣＭキャラクターの選考が難航してましてねえ。フレッシュで手垢がついていない、インパクトをもつ新人を捜しています。一方で、安定感ということでその最有力候補としてあげられているのが――」
「……芹沢玲香」
　私は即座に答えると「ええ」と岡田も認める。
「じゃあ、本決まりでしょうね」
　私の言葉に岡田は首を振る。
「……分かりませんよ。それに今回のマネージャー失踪騒ぎでしょう。大きくなってないにしても業界内に彼女を起用するのを疑問視する声も多くて……。それでね、芹沢以外にもキャラクター候補に藤崎理奈や瀬川さやかも名を連ねていたそうです」
「……本当ですか？」
　私は思わず聞き直した。
「我々の間では芸翔じゃなくてアクティブが仕掛けたんじゃないかって、もっぱらの評判ですよ」
「芹沢玲香を起用させるためにアクティブが藤崎のスキャンダルを仕掛けた……？」
　岡田は頷く。
「でも、アクティブはセレブと昵懇……ですよね」

「そこです。でも莫大な契約金が動きますからねえ、多少の無茶もするでしょう。表向きは芸翔がやったという噂を流す事で、矛先を芸翔に向ける……。あそこも最近は勢いありますからそれくらいのことはやるんじゃないんですか」

俄には信じがたい。だが、確かに芸翔の報復工作と考えるより、ずっと現実的で説得力がある。金が絡むと人間大胆なことは平気でする。芸能界は特にそうだ。

「何せ、アクティブのマネージメントセクションのトップ、片岡さんはやり手だって言うじゃないですか」

私も聞いたことがあった。

片岡征也――アクティブスターのマネージメント事業部部長兼新人開発部統括。

若く、やり手でありながら、冷酷非情との噂の男だ。

特定キー局と親交が深く、自社タレントを起用させ売り出す一方、タレントはあくまで商品として扱い、話題性を煽って人気を釣り上げる仕事のやり方は、賛否両論。タレントの質を著しく下げた張本人と仕事の評価が高い割りには、評判が悪い。事実、何人ものタレントの卵が解雇勧告を受け、事務所を去っている。

「……にしてもなんで辞めたんですかね？　芹沢のマイナスになれどプラスにはならないのに。こんなことするような人じゃないんですけどね……」

岡田は困惑気味だった。

芹沢の話題が尽きたところで、私は小川瑞貴について尋ねてみたくなり、「岡田さんは小川瑞貴について何か知ってますか？」と訊いた。

「なんでですか？」

「最近顔を見ないのでね。他意はありませんよ」

私は誤魔化す。

「ああ」というと岡田は意味ありげに笑う。

「なんでしょう……？」私は尋ねた。

「共演者の一人で桧垣恭吾っていたでしょう……」
桧垣恭吾――男性ファッション誌の元専属モデルである。今の事務所に引き抜かれ、俳優に転身。俳優業の他に音楽活動も行なっている。だが、どちらも中途半端な実力しかない。
芝居に対しての取り組み方はこだわるタチらしい。その真摯な仕事への姿勢が魅力的なのか、様々な女性タレントと浮名を流している。仕事とは対照的に女にはかなりだらしないようだ。
若いときは喧嘩に明け暮れ、警察にも何度か世話になったこともある、ようは顔のいいゴロツキだ。今の事務所に入ったのはその時付き合っていた中堅女優の紹介であると、とかく女の噂がつきない。
桧垣の事務所はセレブ系ではないが、事務所的には特に問題が無い。
「実際、現場で小川に迫っていたらしいんですよ。それが芹沢は面白くなかったみたいで。芹沢と小川の仲も険悪で、現場の空気は最悪だったらしいです」
「そういえばそんな噂ありましたね。放映期間中……」
女性週刊誌にそんなネタが載っていたことを私は朧気に思い出した。
「……低視聴率を打開するための話題作りですよ。桧垣と小川の噂を局の関係者がマスコミに流した、そんなところでしょう。局が良くやる手ですよ。だが、それが芹沢の癇に触ったんでしょうね――」
岡田の話を聞いている内に、その辺の事情を桧垣恭吾に会って直接聞いてみたくなった。
「芹沢が自分の降板をちらつかせたんですよ。まさか主役が降りるわけに行きませんからねえ……。数字自体も一〇パを切る低視聴率でしたから……。芹沢を宥めるために局側としては、小川を切り捨てるより他無かったようで……」
岡田は煙草の灰を灰皿に落とす。
視聴率が一パーセント落ちるだけで何百万という損害になる。プロデューサーもさぞかし苦慮しただろう。

「事態を収めるために蓮沼さんまで出張ってくる始末で……。もともと小川さんをゴリ押ししたのは、蓮沼さんらしいですからねえ」
「……そうなんですか？」
岡田は一瞬まずいことを言ったという顔をすると「私が言ったなんて言わないでくださいよ」と肯定する。
「このドラマがブッキングされた際、マネージメントしていたのはセレブの幹部の蓮沼さんです。マネージメント担当している蓮沼さんはセレブ系のドラマ枠のキャスティングの代理人として、絶大な権力をもってますから」
セレブは某局の編成やプロデューサーたちを抱き込んでいる。金によって誑し込まれ、その結果、視聴率の低迷を招き、詰め腹を切らされ、左遷されている。
事務所との馴合はテレビマンにとって両刃の刃だ。
「スタッフの間ではしきりに噂になってましたよ。小川は蓮沼と寝て仕事を取った、と――」
また蓮沼だ。要所要所で蓮沼の名が挙がってくる。
まるで奴を中心に回っているようだ。
「マネージャーの行方はセレブの蓮沼も探しているらしいのです」
私は言う。
「……本当ですか？」
岡田が尋ねる。
「……まあ、本気にしないでください。よくある噂ですよ」
岡田は口が滑った事にバツが悪かったのか、煙草を忙しなく吸った。

デートと情報交換

私が座る前方の席で、冴えない中年と釣り合わない女が楽しそうに会話をしている。化粧の濃い、派手目の女だった。髪をおもいっきり盛っている所からも、同伴なのは明らかだった。これから寿司屋や高級料理店で、さぞかしたかられるのだろう。

目の前の男を笑うことはできない。私も似たようなものだ。

私はコーヒーをすすりながら、瑞貴が訪れるのを待っていた。

私が待ち合わせに指定したのは、六本木の喫茶店だった。水商売風の女が客と同伴するための待ち合わせによく利用している。週末の為か、夕方にもかかわらず、店は一般客で混んでいる。

予定時刻より早めに到着していた。来る前にシャワーを浴び、下着も新しいものを身につけていた。酒を飲むつもりなので、車では来ていない。

瑞貴を口説きたいという下心がまったく無いわけではないが、それ以上に私は森川に関する情報を得たかった。

すっぽかされる事はある程度、覚悟していた。

まかりなりにも瑞貴は芸能人だ。一般人の誘いに乗るなどプライドが許さないだろう。表面はすましていても、いずれも自意識と自尊心の固まりのような連中であることは、これまでの調査で経験済みだ。瑞貴も例外ではないだろう。

「――根津さん」

背後で名を呼ばれ私は振り返った。

瑞貴だった。私は席を立つ。

「お待たせいたしました」

瑞貴は微笑む。

「……こちらこそ、無理を言って申し訳ありません。何か飲みますか？」

「いいえ」

瑞貴は席には座らずに答えた。私は思わず、瑞貴を見つめていた。
私は改めて、瑞貴のスタイルの良さに感心していた。
瑞貴は襟のついた黒のワンピースを着ている。締まっていて丸みを帯びた美しいヒップラインが浮き出ている。長くて美しい脚がスリットから覗く。瑞貴の成熟さが際立ってよく似合っていた。手首にはカルティエの小さめの時計を巻いている。
「では、移動しましょうか」
「はい」
私は勘定を済ませ、瑞貴と共に店を出ると、路上でタクシーを拾った。瑞貴と共に車に乗り込むと、運転手に麻布方面に向かうよう指示した。
私は高揚していた。隣に瑞貴という極上の女がいるからだろう。
それなりに身形を整えて来てくれたことに、私への気遣いが伺えうれしかった。
えりのような若い女もいいが、瑞貴のような成熟した女と食事をするのも堪えられない。
今日の情報交換の場に選んだのは、西麻布にある和食ダイニングだった。飯が旨いというのもあるが、個室が在り、秘密の会談をするにはもってこいの場所だった。
タクシーの中で瑞貴と会話はしなかった。
店に着き、中に入ると入り口受け付けのスタッフに「ご予約の方は」と尋ねられた。私は自分の名を告げると、スタッフは確認の為に端末を操作する。
店内は薄暗く、ムーディーな音楽が流れている。
入り口近くに熱帯魚が泳ぐ大きな水槽がある。水槽の中にはライトが設置され、ゆらめく水に光が乱反射している。
数匹の熱帯魚が泳ぐ様を、瑞貴は興味深そうに見ていた。
確認が終わると、別のスタッフが私達二人を店内に導く。
予約したのは二人用の個室席だった。席は間接照明により淡い光で演出されている。

私と瑞貴は向かい合うように席に座ると、メニューを見ながら飲み物や食物を注文した。
私も瑞貴も中ジョッキのビールを頼んでいた。
スタッフが去ると、瑞貴から以前に臭いだ柑橘系の馥郁たる芳香が漂っている。私はその匂いを時々吸い込み、楽しんでいた。
ビールが運ばれてきた。
乾杯すると瑞貴はビールを一気に喉に流し込む。
「お好きなんですね」
私の言葉にに瑞貴は恥ずかしそうに俯く。
「お強いんですか？」
私の問いに瑞貴は微笑した。何処か寂しげな微笑だった。瑞貴はときどき翳りに満ちた表情を見せる。
「……この業界の女は嫌でも強くなる。みんな打ち上げ好きだし参加しないと顔を覚えてもらえないから。わたしの場合は……元々好きなほうなんでしょうね。お酒の味を覚えてすっかりハマってしまって」
間接照明の淡い光が、瑞貴の表情をより一層際立たせる。
芸能界で生き抜くために泥水を啜ってきたのだろう。年齢を誤魔化し、ダイエット薬で体をボロボロにしても体型を維持しようと勤め、必要とあらば整形手術も厭わない。
私は瑞貴が哀れになった。
「根津さんは？」
瑞貴が私に尋ねる。
「……付き合いで飲むくらいです。貴方みたいに強くないので」
本当だった。決して強いほうではない。それでも瑞貴に付き合うため、酒を口に入れる。酒で口を緩めるのは常套手段だ。
瑞貴は何かを握っている。私が信用できるかどうか、見極めようとしている。そんな確信があった。だから私の誘いにものったのだろう。
瑞貴は前菜を口に運ぶ。

箸の動き、唇の愛らしさ、そして咀嚼する様、その所作は洗練されていて、可愛らしい。自分がどう動いたら魅力が最大限に発揮されるかを知り尽くしているようだ。分かっていても思わず引き込まれる。さすがはタレントを職業にしているだけのことはある。

服から覗く、首筋や鎖骨は透けるような白い肌に覆われ、染み一つない。

私は我に返ると取り繕うように、

「正直驚きましたよ。まさか誘いに乗っていただけるなんて」と言った。

瑞貴は私の言葉に微笑む。

「あまり誘われないんですよ。こんな仕事をしているのにもてないんで」

瑞貴は言った。

「貴方を誘う男なんて、よっぽど自分に自信がある方だ」

「……そんな」

薄く笑いながら、瑞貴はサーモンのマリネを食べる。

私は鳥の腿肉のソテーを味わっていると、「調査の方はなにか進展がありました？」と瑞貴は尋ねてきた。

やはり調査の進捗状況が気になるらしい。あまりにストレートすぎて私は苦笑した。

「駄目ですね。お手上げです」私は答える。

「芸能人ならまあ探しようもあるんですが、業界関係者となると難しいですね。情報がまったく流れてこない。出てくるのは芹沢さんの話だけだ」

「……そうですか。予想は付いてましたけど」

瑞貴は落胆した様に言った。

「藤崎理奈と伊沢達也に関してどういった感想を持たれました？」

私は尋ねると、瑞貴は微笑する。

「わたしは単純に芸翔のリークだと思いましたけど」

「そう思いますか？」

「藤崎理奈を叩けるのは芸翔だけです」
瑞貴はきっぱりと言い放った。
「情報が漏れる経緯は主に三つ。一つは異性関係からのタレコミ、二つ目は売名行為、そして三つ目は――」
「……他の事務所からの妨害工作」
私の言葉に「その通りです」と瑞貴は頷いた。
「根津さんは本当に探偵なんですか？」
瑞貴は私に尋ねてきた。
「……なぜですか？」
「この業界のことに妙に詳しいから……。わたしからどんなスクープを引き出したいんですか？」
口元に笑みを浮かべながら瑞貴は踏み込んできた。
確かに桧垣恭吾のことや蓮沼など、聞きたいネタはたくさんある。だが、まだ話題に上げるには早い。もう少し瑞貴と食事を楽しみたかった。
「探偵ですよ。ただし――」
「ただし？」
「芸能人専門の……です。芸能事務所や広告代理店の依頼を受け、芸能人の素行調査をする。そこまで言えばご納得頂けますか……？」
瑞貴は箸の動きを止める。
「そう……そうなの」
瑞貴は私の職業に明らかに戸惑いを見せた。当然だ。芸能記者以上に私は危険な存在と言える。なんらストーカーと変わらないだろう。
瑞貴から笑みが消え、表情は硬くなっている。今までの仕草や態度が一変する。
どこか私の中に失望感が漂う。
「バラしてしまえば、元々私は伊沢達也の素行調査をしていたんですが、突如森川さんの捜索に依頼がシフトしましてね。気になったものですから」

言い訳がましく言う私に対し、瑞貴は手元を見てる。
会話が途切れ、重苦しい空気が漂う。
瑞貴は一旦酒を口に含むと箸を置き、座りを直す。
「依頼人はどなたなんですか？」
瑞貴が静かに尋ねてきた。どこか刺を含んだ口調だった。
「それはお答えできません。申し訳ありませんが……」
瑞貴も馬鹿ではない。ある程度想像は着いているだろう。だからと言って、すべてのカードを開示するつもりはない。
瑞貴がどういうカードを切ってくるのか、楽しみだった。
「森川さんの居場所を突き止めた後はどうなされるおつもりですか？」
瑞貴の問いに、私は答えを詰まらせた。
「……さあ、そこまでは。私の関知するところではありませんから」
「芹沢玲香に何かするんでしょうか……？」
瑞貴の疑問に芹沢への関心度の高さが伺えた。
「……おそらくは。事務所同志のバーターの材料にでも使うつもりなんでしょう」
「森川さんは、芹沢玲香に関して、取引の材料になりうるようなものを持っているということでしょうか？」
「……さあ、想像もつきません」
瑞貴の指摘は私を困惑させた。
考えもしなかった。だが、瑞貴の意見はもっともな事だった。藤崎理奈の件もある。
芸翔は私は別の話題に返るため、「小川さんのほうはどうですか。何か新しい情報は入りましたか？」と尋ねた。
瑞貴はコップを玩びながら、何か物思いに耽る。
コップをテーブルに置き私の方を向くと無言で私を見つめた。何かを私に伝えるかどうか悩んでいるようだった。結局、再び元に向き直る。
私は瑞貴の言葉を静かに待った。

「……根津さんは本当に森川さんを探しているんですか？」
瑞貴の質問の意味が分からず、私は「どういう意味でしょう？」と尋ねた。
「根津さんの目的は森川さんではなく、わたしじゃないんですかと聞いているんです」
「……何の為に？」
私の返しに瑞貴は気まずそうに俯く。
「……そうですね。どうかしてました」
自意識過剰などとは思わない。芸能記者や週刊誌のスクープチームに追っ掛けられたことなど一度や二度ではないはずだ。当然の反応といえよう。
一方で、瑞貴が私を芸能記者と思い込み、近付いてきたのは間違いない。当然情報を得る為だろう。何が目的なのか、知りたかった。
「……小川さんこそ何をお知りになりたいんですか？」
私は自分の疑問を口にしていた。瑞貴は答えなかった。
「小川さんが私を芸能記者だと思ったのは、その方が都合がいいということではありませんか？」
今度も瑞貴は答えはなかった。
「もう、腹の探り合いはよしませんか……？」
私の言葉に、瑞貴は視線すらあわそうとしない。
「――何を知りたいんですか？　そして貴方の目的は……？」
瑞貴はようやく私の方を向く。
「――根津さんと同じです」瑞貴は私を見る。
「自分を守るために情報が欲しい。それだけです――」
瑞貴は宝石のような黒瞳で見据える。本当に美しい瞳だった。
瑞貴の視線と美しさに耐えられなくなると、私は「そうですか」といいながら視線を外した。
それ以上聞かなかった。もちろん納得はしていない。だが、これ以上追求しても二人の空気は冷えるばかりだ。
一か八か今のこの空気を打破する質問が一つある――蓮沼だ。

だが、一歩間違えば、瑞貴の心をより一層閉ざしてしまうことになる。
まさかとは思うが、瑞貴と蓮沼が何か関係があるとは思えない。根も葉もない中傷の類だろう。だが、瑞貴も蓮沼のことを切り出せばいい気分はしないだろう。
危険な賭けだった。
私は覚悟を決め、遠回しに蓮沼の事を切りだすことにした。
「森川さんなんですが……」
「はい」
「セレブの蓮沼という男も探しているらしいんですよ」
「……蓮沼！」
瑞貴の表情に明確な変化が現われた。
「ご存じですか？」
「え……ええ」
瑞貴は動揺していた。手が動き、口元を覆う。口元に触れている指が震えていた。予想以上の結果だった。
「……業界では我々より有名人ですから」
瑞貴は苦笑いを浮かべた。
だが苦笑いでは誤魔化せないほど、嫌悪が滲んでいた。
「なぜ彼が捜していると思いますか？」
瑞貴は私の問いに、答えなかった。
半開きになっている桜色の下唇が微かに震えていた。必死になって思考を加速させようとしているが上手く行かない様子が眼に見えてわかる。
「……芹沢さんはセレブと仲が良いみたいだから」
瑞貴は搾り出すようにやっと答える。
「そうなんですか？」
私は訊いた。
「……根津さんは蓮沼に依頼されて彼を捜しているんじゃないんですか？」

「何の為に……？」
問い掛けながら、私は言葉遣いの綺麗な瑞貴が蓮沼のことをはっきりと呼び捨てしていたことに引っ掛かった。芹沢の時もそうだった。蓮沼に対する感情が見えた。
「何か弱みでも握られているとか……？」
瑞貴はあいまいに言う。
「芹沢さんが脅迫を受けているという噂でもあるんですか？」
「いいえ」
私は否定する。
「なぜ彼女はセレブと関係が深いのでしょうか？」
私の問いに瑞貴は瞬きを繰り返す。またしても回答に困っている。
蓮沼というカードを切ったことを私は後悔していた。今、切るべきではなかった。
これではただ瑞貴を追い詰めただけにすぎない。
これ以上、瑞貴を苛めるのも酷だった。私は話題を切り替えるために、「他に情報はありますか？」と訊いた。
「はい」
瑞貴は小さな声で言った。
私は「聞かせていただけますか」と言うと座りを直す。
「芹沢の誕生日が近いことは知っていますか？」
「……いいえ」
「去年とあるホテルのパーティー会場を借り切って盛大なパーティーをしたそうですよ」
あまり調査と関係の無い事柄のように思えたが、すぐに考えを改めた。
「――今年もやるかも知れませんね」
「……成程」
瑞貴の言いたい事がわかった。森川がその日に訪れる可能性があるということだ。芹沢の誕生日となれば、森川も駆け付かない訳には行かないだろう。

「……ですが、森川さんは現れますかね？」
私は半信半疑だった。
「わたしは、必ず来ると思います」
瑞貴は自信げだった。
「彼女がどういう人間か、そして森川さんとどれほど強いつながりを示すエピソードがあります」
「……お聞かせください」
「もともと彼女は、わたしと同じようなモデル事務所に在席していたらしいんですが……」
「はい」
「スクープされたんです。スポーツ選手と付き合っていることを――」
すぐに思い出せなかった。仕事柄、週刊誌は全紙すべてチェックしているが、すべて覚えているわけではない。
「芹沢玲香が前の芸名である『芹沢貴子』の時代の話です。名前は忘れましたが、当時飛ぶ鳥を落とす勢いの活躍しているJリーガーだったはずです。それをきっかけに今の事務所と契約を結びました」
「……ああ。そういえばそんな話ありましたね」
無名に近い時の芹沢玲香初めての醜聞。だが、その時のメインはスポーツ選手で、芹沢はおまけのようなものだ。
私は瑞貴が何を言いたいのかを悟った。
「……まさか」
「大手事務所に入るために、彼女自身が週刊誌にリークしたという噂があるんです。そして、今の事務所への移籍の手引きをしたのが……」
「森川……ですか」
瑞貴は頷く。
「話題性を煽って、アクティブに移籍……か」
「そもそも、あそこの事務所は基本的に一人のマネージャーがデビューからマンツーマンでマネージメントするシステムです。トップ

タレントを育てなければ、上にのしあがることはできない。互いに上昇指向が強いならば、それくらいのことはするでしょう」
信憑性はない。
だが、もし本当のことならば、芹沢玲香はかなり狡猾で策士だということになる。ということは森川の失踪も芹沢が咬んでいるのだろうか。
「わたしは森川さんと芹沢との繋がりは深いと考えています。芹沢玲香がなんらかの形で森川さんの失踪に絶対関わっているはずです」
いつのまにか、わたしと瑞貴のコップは空になっていた。互いの話に触発され、興奮したのか、すぐに喉が渇く。
「お代わりを頼みましょう」と店員を呼ぼうと呼び鈴を押そうとした時、瑞貴は「根津さん」と私の名を呼んだ。
「はい？」
「蓮沼の方ですが、わたしの方から探りを入れてみましょうか？」
瑞貴の思いがけない言葉に「えっ」と思わず私は聞き直した。瑞貴の提案に一瞬乗りそうになったが、思い止まる。
「彼と、お知り合いなんですか？」
「わたしの事務所はセレブ系列ですから。ご存じなんでしょう……？」
「ええ、まあ……」
今度はこっちが、どぎまぎした。私の様子に瑞貴は苦笑する。
「いや、しかし……」
魅惑の言葉だ。だが、それは一人のタレントを危険に曝すことになる。
職業上、良心や良識とは無縁の私だが、瑞貴の提案に簡単に賛同することはできなかった。美しい女となれば尚更だ。騎士道精神など到底持ち合わせてはいない私ですら躊躇った。まして相手は悪名高き男だ。情報と引き替えに、何を要求されるかわからない。
瑞貴を見ると、どこか淀んでいた瑞貴の眼に精気が灯っていた。黒目がちの瞳がより一層輝きを増している――凄味すらある。

「よろしいんですか？」
私は確認した。
「はい」
瑞貴ははっきりと返事をした。
もしセレブ側の動きがわかれば、調査は大きく前進する。しかし、そこまで危険を冒す必要があるのだろうか。
依頼人とはいえ小田、いや芸翔の不義理な態度には怒りすら覚える。他人を巻き込んでまで貫徹させる意味がこの仕事にあるのだろうか。
「……危険ですよ」
私は分かり切ったことを言った。
「大丈夫です」
落ち着いた声で瑞貴は言った。
「根津さんが蓮沼に近付いて情報を得るよりずっとリスクは少ないです。それに蓮沼から情報を引き出さなければ今後の調査は進展ないのでは？」
「……確かに」といいながら、瑞貴が何故ここまでしてくれるのか疑問で仕方がなかった。やはり瑞貴にも何か目的があるのだろう。
それとも私のことを蓮沼に言うつもりだろうか。私に味方したところで瑞貴にはメリットはないように思われる。私の情報を引き替えに、蓮沼へ擦り寄ろうとするという風に考えるのがずっと自然だ。
答えが出ない――。
「……それとも、私のこと信用できませんか？」
私を見透かしたように瑞貴に自らの思惑を指摘され、私は苦笑した。
その通りだった。
「根津さんのことは絶対に蓮沼には漏らしません。お約束します――」
瑞貴の言葉にタレントとしての矜持が見えたと同時に、私はあるアイディアが思い浮かんだ。

「……わかりました。では、蓮沼氏と食事の約束でも取り付けていただけませんか？」
「ええ。はい……？」
私の言葉に瑞貴は怪訝な顔をする。
「貴方を介し、色々聞いてみたいことがある」
「……わたしを介して、ですか？」
「テレビでよくあるでしょう。ＣＣＤなんかを仕込んで……」
「……ああ」
瑞貴は納得したように微笑した。
「私が仕掛人になるんですね。……おもしろいかも。わたしが一人でやるよりいいかもしれない。了解しました」
瑞貴に少し元気が戻ったようだった。
「……その代わり」
「なんでしょう」
「もし、蓮沼から何かネタを引き出せたら、わたしのお願いを一つきいていただけますか？」
瑞貴の言葉に私は戸惑う。
「お願い……ですか？」
「はい」
先程より瑞貴の態度が少し和らいでいた。
「……恐いな」
「大したことではありませんから」
金品でも要求するつもりなのだろうか。だが、もし瑞貴がプレゼントを要求するならば、報酬にそれ位のことはしてやってもいいかもしれない。
女に金をかけることは嫌いではない。美人ならば尚更だ。
「いいですよ。お約束します」
私は承諾した。
「絶対ですよ」
そういいながら瑞貴は私の手を握った。

「ええ」
頷く私を瑞貴はいつものように真っすぐ見ていた。
間近で見ると本当に美しい女だった。
瑞貴の美しさは自然美に満ちている。おそらく、手は一切加えられていない天然の造形だろう。
えりのような若さや個性さは無いが、細面の整った容貌。
人に見られるという行為を一身に受け続けてきた結果、放つオーラ。
そして甘く上質な柑橘系の香りが、彼女の印象を強くする。
こんな女が事務所の力学で不遇を強いられていることに、憤りすら覚えた。
互いの会話が止み、いつしか酒を静かに飲んでいた。
さして好きでもない酒を飲みながら、私の中では、目の前の女への興味が膨れ上がっていた。それは欲情にも似ていた。だが、えりに抱いたような肉欲ではない。
久しく忘れていた感覚、渇望、そして期待だった。
聞きたかった――なぜ仕事を干されたのか
岡田の話は本当なのか。
蓮沼と何があったのか――。
だがそれを聞けば、瑞貴を利用できなくなる。それ以上に無用に瑞貴を傷つけるような気がしてならなかった。
私は自分の興味を押さえ込むように、コップの残りの酒を一気に呷った。

アイドルの卵とのデート

ショーケースから取り出した指輪を店員から受け取ると、えりは薬指に通す。サイズはえりの為にあつらえたように、ちょうど良かった。

えりが指に填めているのはカルティエのラブリングである。えりの可愛い細い指にイエローゴールドの指輪はよく似合っていた。

「……可愛い」

えりは指輪を見ながら、微笑む。

私は「じゃあこれをください」と店員に言うと、女性店員は「ありがとうございます」と軽く会釈した。商品をえりから引き取ると、店員はレジへ誘導する。

「……いいの？」

えりが尋ねた。

「中古品だ。気を使う必要はないよ」

私の言葉に、えりは喜ぶ。

私は店員に「領収書をお願いします」と言った。

「畏まりました」

「宛名は上様で、品目は……情報提供代で」

私の言葉に店員は怪訝な顔をした。

買物を済ませると、私とえりはブランドリサイクルショップを出た。中古とは言え情報提供代としては破格な価格だが、先行投資と思えば安いものだ。えりの心を引き止めるためにも必要な出費だった。リサイクルショップを選んだのは、経費の節約もあるが、親近感を抱かせるためでもある。高いところに連れていけばいいというわけではない。

たわいもないプレゼントに、えりは上機嫌だった。聞けば前から欲しかったらしい。

私とえりはデート場所に新宿を選んでいた。もちろん私の目的は情報交換で、えりのバイトの休日に合わせて、デートの日取りを決めた。

えりもまた芸能界で夢見て、普段はアルバイトで生計を立ている身分だ。仕事柄そういう女を何人も見ている。自然と気も弛む。だが、えりに対して完全に心を許したわけではなかった。たわいもない会話をしながらえりを観察していたが、小細工を弄するような様子はない。そもそもそんなことができるほど器用でも、計算高い訳でもなさそうだ。

えりは、ベロアのジャケットにプリントのTシャツ、デニムのミニスカートを身につけている。

新宿を希望したのはえりだった。新宿はよく来るらしく、いろんな店を回るらしい。

庶民と金持ちの店が混在する街である新宿の雑居ぶりは、正直あまり好きになれない。やはり、六本木や銀座の方が洗練され、華やかで好きだった。

この後はえりに付き合い、服屋を何件か回る予定である。

互いに喉が渇いたので、私とえりは伊勢丹地下のカフェに入った。今話題のスウィーツが食べられるらしい。

注文を終え、席に座るとえりは、私がプレゼントした指輪をさっそく開け、指に填めた。

スウィーツが来るまでの間、私とえりは雑談に耽った。

えりは最近の仕事の内容や仕事に対しての不満、趣味や好みの男の話など、聞いてもいないことを自ら矢継ぎ早に出してくる。

このキャラを生かせば、世間で愛されるタレントになれるかもしれない。

出版社側にようやく顔を覚えてもらえるようにはなったが、まだまだ仕事はお得意様回りが主らしい。退屈はしないが、自分の話題ばかりの話にはいささか閉口する。表面上は笑顔と大げさな相槌で取り繕う。中年男の嗜みだ。

スウィーツが来た後も話はしばらく続いた。
えりの話が終わると私は、「森川の交友関係の方はどうだ？　同僚の方でプライベートも付き合いがあった人間は？」とようやく本題を切り出した。
私はいつのまにかえりに対して敬語を使うのを止めていた。それくらい二人の距離は近くなっていた。
えりは携帯電話を開くと、「これ」といいながら私の方に見せる。
「奥野仁さん。森川さん後の芹沢さんの臨時のマネージャーで、森川さんの後輩。……森川さんとはわりと仲は良かったみたい。よく一緒に飲みにいったりとかして」
えりの携帯電話の液晶画面は解像度が高く鮮明だった。本人確認がやりやすい。頼んでもいないのに奥野を撮影してくれたえりの気遣いがうれしかった。
えりはこういう部分には気が回る娘である。探偵の助手としての能力は高い。これならば実社会でも十分通用するだろう。
一人の男が映っていた。細身で黒ブチの眼鏡を掛けているスーツ姿の男だ。
セレブのパーティーに芹沢と同席した男だろう。気が弱そうで、腺病質、精力も弱そうだ。
森川が人の接する仕事に就きたいという理由でこの業界に就職したならば、この男はアイドルや芸能人が好きだという類の人間に間違いないだろう。
「逆に仲が悪かったは片岡さん」
「何？」
重要な情報だった。
「片岡さんとは芹沢さんとの仕事の方針でよく喧嘩してたって」
「奥野とはどういう男だ？」
私はえりに尋ねた。
「……ちょっとオタクっぽい。気が弱くて頼りない感じ？　はっきりかなり言って事務所の女の子に舐められてるよ」

「よくそんな男が入社できたな」
「女の子に手出さないからじゃない？」
えりの意見に、私は納得した。
「そいつの住所と電話番号分かるか？」
「事務所の娘に聞けば分かると思う」
「あとその画像、あとでメールで送ってくれ」
「両方で五千円ね」
「身体で返すよ」
「……キモい」
えりは顔をしかめ、私を罵った。もちろんちゃんと金は支払うつもりだ。
ふと、蓮沼のことが頭をよぎり、私は「蓮沼という男は聞いたことがあるか」とえりに尋ねた。
「誰それ？」
えりは聞き返す。
「芸能界の実力者さ」
「ふーん」
「仕事をくれる代わりに体を要求してくるそうだ」
「一回くらいならいいかも」
「……おいおい」
「冗談。……むかついた？」
「ああ」
私は苦笑いする。えりとの会話はすぐこのような戯れになる。えりに対しては特に嫉妬のようなものは湧かなかった。
だが、瑞貴ならば定かではない。
蓮沼が瑞貴を権力を使って抱いていたならば、私は蓮沼に殺意を抱くだろうか。不快感が、心を満たす。
「芹沢玲香の近況はどうだ？」
「……相変わらず絶好調って感じ。敵無しだね」
「マネージャーが失踪した影響は無し……か」

「うーん。でもね、回りの人間が言うには最近機嫌悪いって」
「何故だ？」
「神谷裕希っているでしょ？　ウチのタレントで」
神谷裕希――最近、ＣＭの契約数を飛躍的に増やしているアクティブの看板タレントの一人である。
神谷の持って生まれたアイドル性と神秘性は事務所の固いガードにより手厚く保護されている。性格も良くスタッフ受けもいいらしい。
特に今回の件で藤崎は致命的なダメージを受けた。神谷にとっては藤崎を抜き去るチャンスが到来したともいえる。
「……事務所としては、神谷裕希を推したいって感じなんだって」
「そうなのか？」
「芹沢さん、我侭だから持て余し気味なんだって……。神谷裕希の方がスタッフ受けもいいし、素直で可愛く、若くてしかも将来有望。それが芹沢さんは面白くないんだって話――」
芹沢周囲の人間関係が徐々に分かってきた。やはり内部の人間の情報は有益だ。
「実際、神谷は片岡統括マネージャーにめちゃめちゃ気に入られているの。ウチの事務所って、はっきり言っていかに片岡部長に好かれるかが仕事を左右するところがあるから……」
片岡の名前がまた出てきた。
片岡と芹沢には確執があるのは間違いない。そしてそれは森川とも、だろう。
「えりはどうなんだ？」
わたしは尋ねた。
「わたし？　わたしは微妙……かな」
えりは少し淋しそうな表情を見せた。スタッフの私的感情で自らの将来を左右されたらタレントもたまらないだろう。だが、よくある話なのだ。
「で、部長の奴、かなり神谷に入れ込んでいて、いい仕事は全て神

谷に回しているの。それが、芹沢さんは気に入らないみたい」
「神谷祐希と芹沢玲香は仲が悪いのか？」
「わたしと仲のいいメイクさんの話だと、カメラが映ってないところでは口聞かなかったって」
「目標ですとか、いいお姉さんだとかテレビの取材で言っていなかったか？」
「……ほら、それはお互いプロだから」
えりの言葉に私は苦笑する。テレビの映像を鵜呑みにするなど、私も一般人を笑えない。
やはり神谷の存在は、芹沢にとっては相当目障りなのは事実のようだ。
「まあ、あたし自身神谷祐希には相当ムカついてるもん。片岡さんに気に入られているからって調子乗ってるよね。本当」
「すぐ売れるってことは、すぐ飽きられて売れなくなるってことだ。焦ることはない」
「そうかなあ……」
単なる慰めではない。何がきっかけで売れるか分からない。それが芸能界だ。
えりにはその可能性を秘めた何かがある……と思う。
「芹沢が神谷祐希に嫌がらせをしたという話はないか？」
えりはあっ、と声を上げた。
「そういえば、最近ストーカー被害にあったとかっていう話はきいた」
「……本当か？」
えりは頷く。
「表沙汰にはなっていないけど。ほら最近体調不良とかで休んだでしょ？」
「……そういえばそんな話があったな」
芸能欄の隅に載っていた小さな記事を私は思い出していた。
「自宅へ帰る途中に襲われたって。事務所の方からファンの尾行と

かプレゼントとか気をつけるように、って注意受けたけど……」
えりの顔が曇る。
「……まさか」
私は無言だった。
「……森川さんやったって言うの？」
「可能性は有るな」
私の言葉にえりは言葉を失う。
森川は神谷を監視していたのだろうか。
何の目的で……？
「――もう、やめようこんな話」
私は「そうだな」と苦笑した。
「夕食だが、何が食べたい？」
「焼肉」
えりのリクエストに内心うんざりする。すぐ、こってり系の食事を要求する。若い証拠だ。えりの食いっぷりを見るのは楽しいが、それにつき合わされるのはＳＥＸよりある意味ハードだ。
「その代わり頼みがあるんだが……」
「奥野さんでしょう？」
図星だった。えりは私の意図をすぐに理解していた。
「えりは頭がいいから話が早いよ」
私の世辞にえりは気分をよくしたのか、表情が綻ぶ。事実、えりは勘のいい娘である。
「……その男に接触したい。ただ、接触しただけでは口は開かない。ある程度身辺を知っておきたい。親とか仕事、金、趣味、そして女性関係とか、な」
「……弱みを握って、そこから攻めるってこと？」
「分かってるじゃないか」
私は笑う。
「最近、キャバクラにハマっているらしいよ」
「……ほう」

「なんかお目当てのキャバ嬢から営業電話がよく掛かってきて、メールとかしきりに打ってるって……。これって、役に立つ？」
「ああ」
役に立つというものではない。攻めるべき方向が定まった。
「同じ事務所の娘に奥野さんが担当の娘が居るから聞いといてあげる。その代わり、今日は遠慮しないから」
「どうぞ」
えりは猫のような瞳を子供のように細めた。
「……さっきに話だが」
「何？　芹沢さんのこと？」
私は頷く。
「……そうだと思うか？」
私の問いに、えりは急に不安げな表情をすると、そのまま黙り込んだ。

六本木での張り込み

私は奥野の自宅アパートを張り込んでいた。

奥野の自宅は中野にある。安月給のサラリーマンにふさわしいアパートだった。二階建の壁の薄そうな作りで、申し訳なさそうに非常階段が備え付けられている。双眼鏡を使わとも人の出入りがよく見えるため、張り込みを行なうのにこれほどやりやすい建物はないともいえる。

奥野の自宅住所はえりを通してアクティブスターの社員名簿を入手することで割り出した。奥野のシフトに関しても同様に把握済みである。

今日森川は仕事は休みである。動きはない。

芸能事務所と聞こえはいいが、ハードな仕事のわりには薄給の為、人材の流動が激しい。慢性的な人不足であるのはどこの事務所も似たり寄ったりだ。就職情報誌を見れば、その事情が垣間見れる。休みは極端に無い。

逃亡中の森川が身を寄せる所はどこだろうかと考えた場合、真っ先に考えられるのはやはり奥野だということに結論が至り、私は奥野の自宅近辺を探ってみた。だが、森川と思われる男が出入りしている形跡や目撃情報はない。

しかし情報交換をしている可能性は捨てきれない。私は奥野の行動確認を実行に移した。

森川を確保するには奥野という情報協力者が必要不可欠だった。なんとしてでも奥野を私の側に引き込みたい。金で転ぶような男ならば芸翔に出させるつもりだった。

時間は午後二時を回ろうとしている。昼の生温い眠気が私をそろそろ蝕みつつある。

携帯電話の振動が、私を睡魔から救い上げた。宮島だった。

――……マッシブですけど、裏取れましたよ。知り合いにマッシブに寄稿しているライターがいましてね。今回のネタ、ライター仲間でもかなり話題になっていましたよ。

相変わらず回りくどい。それに腹を立てていてはこの男と付き合えない。

――で、ネタの出所なんですが、一般人からしいんですわ。

「ほう」と、私は声を上げる。

――……あそこは、業界人から一般人まで手広く、現金買取でネタ仕入れているんでしょう？　それです。

マッシブの紙面には毎号ネタ募集の告知が掲載されていることを、私は思い出した。ゴシック体でデカデカと賞金金額を表示している。

「ライターや記者ではないということか……」

バーターが無いということはそういうことだろう。

マッシブは他の雑誌とは違い、芸能事務所と関係が深い記者が関わっていない。当然、芸能事務所からの情報提供は無い為、自分達で掻き集めるしかない。ゆえに扱うネタに無用な圧力が掛からず、死蔵されることはない。記事も新鮮で過激になる。

だが馴れ合いが無いということは、互いの落としどころを話し合うこともなく、当然芸能事務所との関係は険悪となる。その後は裁判ざたになりかねない。

しかし本は売れる。マッシブはそういうやり方で、業界に一石を投じてきた。

――ネタは、匿名で送られてきたらしくて、電話でやり取りをした後、指定口座の方に振込みを希望してらしくて、ネタ提供者との直接的な接触は無いそうです。まあ……、マッシブ側もネタに困ってたらしくて、渡りに船ということで編集長判断で買取を決断したそうです。

私は編集長の裁量に感心した。今の時代、簡単に芸能事務所の圧力に屈する連中が多い中、中々の人物のようだ。一度会ってみたいものである。

――マッシブはいつもより増刷して、このネタで今回勝負を掛けたらしんですけど、おかげで売れ行きは好調らしいですよ。
「セレブの対応は？」
――さっそく藤崎のお着きの人間がクビになりました。事務所の方も犯人探しに血眼になってますね。
携帯電話の画像から言って藤崎理奈近辺の関係者に間違いない。友人、仕事仲間などをアクティブが買収したとなれば説明がつく。
私はあることを宮島に聞きたくなった。
「……桧垣恭吾について何か知らないか？」
――何ですか？
宮島は尋ねてきた。
「芹沢の共演時のドラマの事情を関係者から生で聞きたいのでな――」
調査にはまったく必要がない事柄だった。
個人的な興味だった。もちろん瑞貴についてだ。瑞貴との事情や、そして関係があったかどうか、知りたかった。
私情が入り込んでいる――悪い癖だ。
――女遊びが祟って、今仕事干されてるって話です。繁華街を飲み歩いてるって話ですけど……。
「また、蓮沼か？」
――……おそらくは。
「住所知ってるか？」
――ちょっと、分かんないっすねえ……。
宮島の言葉を待っていると、奥野の部屋のドアが開いた。
「悪い。動きがあった。また掛け直す」
私は電話を切ると、車のキーを回した。

六本木外苑東通りの飯倉方面に、灯に照らしだされた東京タワーの姿が浮かび上がっている。森川を尾行し続けすっかり日も暮れていた。六本木が眠りから醒め、遊びたい盛りの若さをもてあまし

た連中や外人たちで溢れかえようとしている。
常々思うことだが、六本木は仕事がやりづらい。
人の通りが多いうえにフランクな黒人の客引きは強引で目障りだし、暴力団の連中と思われるゾロ目のナンバーの高級車が我が物顔で駐車している。黒人はともかくヤクザに絡まれでもしたら面倒だ。
出版社のスクープ隊と思われる車両とバッティングすることもしばしばだ。隠しカメラを設置するポイントもない。
そんな悪条件の中、私はとあるビルを監視していた。車をビルの斜向かいの通りに停め、ビル入り口を出入りする人間を双眼鏡で確認するという実に古典かつ効率の悪いやり方だった。
外苑東通り添いの脇を入った奥にあるビルだ。ビルは居酒屋チェーン店やクラブのテナントが入っていて、他に高級キャバクラが存在する。業界関係者の間では、芸能人がよく利用する事で有名な店だ。
奥野には似付かわしくない場所だった。安月給のサラリーマンごときが妄りに出入りできるところではない。まさかスカウト目的ではないだろう。
尾行を開始してすぐに奥野は、銀座へ向かい、高級ブティックの直営店を数件回った後、寿司屋で早めの夕食をとった後、六本木へ移動していた。
奥野は銀座で一人の女と合流いた。
女は二十歳前後で一見お嬢様風だが、よく見ると化粧が濃く、身につけているものも高級品ばかりだった。
えりの言っていた奥野がハマっているキャバ嬢に間違いない。素人さを売りにするような六本木によくいるタイプのキャバ嬢だ。育ちは良く、おそらく昼は大学に通っていて、アルバイト感覚で夜の仕事に従事しているのだろう。奥野との行動も、同伴だろう。
私は張り込みを続けながら、キャバクラに潜入するかどうか迷っていた。
ただのキャバクラではない。高級キャバクラである。普通のキャ

バクラならともかく、高級キャバクラともなれば調査経費は莫大なものとなる。
依頼人に確認する必要がある。だが、先日の一件が電話することを躊躇わせていた。
携帯が震えた。
開くと、携帯の画面には「小田」という名が表示されている。
苛立ちや不信感を抑えながら私は「はい」と電話に出た。
――……根津さんですか。
小田の呼ぶ声に、私は何も答えない。
――……わざわざ出向いて頂きながら、このたびは申し訳ありませんでした……。
小田は、すまなそうに言った。長年の経験で身につけたであろう交渉術に私は苦笑する。そもそも小田に腹を立てても意味が無い。
「――伊沢さんの調査を進んでいますか？」
私は皮肉をこめて言うと、小田の誤魔化しともとれる笑い声が聞こえてきた。
――それですが、ご説明も兼ねて、せめてものお詫びに神山が根津さんをお食事に誘いたいと……。
「神山……社長の神山さんのことですか？」
――ええ。
我が耳を疑った。芸翔のトップが一調査屋を飯に誘うなどありえない。いや尋常でないと言うほうが正しい。
「……お断わりしてもよろしいですか。お偉いさんと飯を食うのは性に合わない」
――そこをなんとか……。
小田は食い下る。
神山の私の顔を覚えられるのは避けたい。今後、度々便利屋のように使われるのもイヤだった。今回のことで芸翔の仕事はしばらく受けないことに決めていた。
だが、神山の真意を知っておくことは今度の私の行動を決める上

において確認しなければならないことであるのも確かだった。
私の足元は薄氷の上にある。
依頼において成果を上げていないという負い目もあった。もっともそのことで攻められるようならば、この調査は即刻打ち切る。芸翔との付き合いもこれまでだ。
「――わかりました。返答に少々時間を頂きたい」
私は返事をわざと濁した。腹は決まっているのに、単に勿体付けたかっただけだ。
――そうですか……。
「……話は変わりますが、いま調査対象の関係者を張り込んでいましてね……」
――はい。
視線の先で、黒塗りの車が一台止まっていた。
「六本木の高級クラブなんです。場所が場所だけに経費が掛かると思われますが、潜入を認めて頂きたいのですが……」
――分かりました。私の方から言っておきます。
「よろしくお願いします」
「では」というと私は電話を切った。私はビルへ向かうため、車を移動させようとする。
ハンドルを握る手が硬直した。
視線の先の車の屋根から一人の男が見えた。
双眼鏡を取り確認する。
その中に見覚えのある男がいた。
蓮沼だった。

キャバクラ嬢の真実

耳の奥で発信音が鳴り続ける。だが、電話先の人間は一向に出ない。私は舌打ちして携帯電話を閉じると、助手席に放り投げた。

料亭や居酒屋が軒を連ねる赤坂は民放本社ビルを筆頭に、芸能事務所や制作会社が数多く存在する。六本木と同じように必然的に張り込む機会が多い土地でもある。路上駐車が多いため、比較的張り込みはやりやすい。目を向けた先は道路添いにある雑居ビルだ。看板が掲げられている。看板にはレッスンスタジオと表記されている。

源氏名はあき――本名・長谷川浩子が入っていったビルでもある。

私は奥野がハマっているキャバ嬢を追っていた。

長谷川浩子が在席する高級キャバクラに何度か通い、さややかな役得に有り付きながら、同僚に話を聞き、情報を集め、最後の確認として張り込みを敢行した。自宅は奥野とは別の客とのアフターを尾行して割り出した。

長谷川浩子はいわゆるタレントの卵だった。それは同僚にも公言していた。

昼はレッスン生、夜は水商売。生活費を稼ぐための、高収入のアルバイト。今も昔も芸能界を夢見る女がたどる道といってよい。よくある話だ。

ビルには長谷川浩子以外にも芸能界を目指すと思われる風貌の連中が出入りしている。

ここは要するにタレント養成所なのだろう。

だが、インターネットで確認しても、裏が取れなかった。

私にはある不安が形を成しつつあった。

クラブに通いながら長谷川への直接的な接触や聞き込みはしなかった。スカウト目的か、ただの客と飲み屋の女との疑似恋愛ならよい。

長谷部浩子の張り込みの結果の如何によっては、森川への攻め方も変わってくる。
疑念を払うために、何度も賀川に電話をしていた。だが、賀川は一行に電話に出る気配はない。ああ見えて忙しい男である。
助手席で携帯が振動した。すぐに取り上げ、携帯の画面を見る。賀川ではなかった。
瑞貴だった。
――小川です。
「……ああ。この前はありがとうございました」
――いいえ。
瑞貴の声に覇気がない。
――蓮沼の件ですけど中々難しくて……。忙しいようで。中々取り合ってもらえないんです。
「……そうですか」
瑞貴の律儀さが気になった。責任感が強い性格であるというのは、この前の情報交換でなんとなく理解できたが、放棄しようと思えばできることである。そこまで私も強要するつもりもない。
――そこで、お願いがあるんですが……。
「なんでしょう……？」
――森川さんのことを引き合いにしてもよろしいでしょうか……？
私は一瞬返事に詰まったが、「わかりました。構いませんよ」と答えた。それ位のカードが無くては蓮沼と接触するのは困難だと判断したからだ。
――ありがとうございます。これでなんとかなると思います。
瑞貴の言葉に、私は恐縮する思いだった。瑞貴と蓮沼はやはり何か、因縁があるのだろうか。
「あまり無理をなさらないでください。無理なようでしたら結構ですよ」
瑞貴から返答が無かった。
――あの……。

「どうしました？」
瑞貴は何か言いたげだった。電話越しでも伝わってきた。裏の取れていない噂か情報を私に伝えたいのかもしれない。
――……いいえ、何でもありません。根津さんも気を付けてください。
通話が終わる。
電話を閉じながら、瑞貴のことが気になっていた。
瑞貴に下手な動きをされ、私の存在を向こうに知られては元も子もない。
また、私との相互扶助関係より蓮沼に保護を求めるかもしれない。そうなれば私のことも筒抜けになる。私が危惧している部分はそこだった。
瑞貴の真意が読めない以上、信頼してはならない。だが、瑞貴を信じたかった。蓮沼にばれたらそれまでだ。
それ以上に瑞貴を、どこか人身御供にするようで気が引けた。
一方で蓮沼に関する情報は喉から手が出るほど欲しかった――今の私には。
瑞貴の危険と情報を天秤にかけている。自分の下衆ぶりに、自己嫌悪に陥りそうになる。
電話が震えた。今度は間違いなく賀川だった。
「……賀川ちゃん、待ってたよ」
私は本心を洩らしていた。
――……根津さん、すいません。今立て込んでまして……。
「いや、こっちこそすまない。大丈夫か？」
――はい、大丈夫ですよ。
「単刀直入に聞きたいことがある」
――なんすか。
私は今日張り込んでいたレッスンスタジオの住所を言った。
「ここの経営は誰が行なっているか知ってるか？」
――セレブです。

賀川は即答した。
やはり――反射的に目を閉じる。
「……間違いないのか？」
私は再び尋ねた。
――ええ、何度も張り込んでマイナーなアイドルの卵とかタレントの娘を隠し撮りしたことありますんで……。間違いありません。表だって公表されていませんけど……。
「――そうか」
脱力感に似たものが体を包む。
――どうかしたんですか？
「……いや」
賀川の言葉が遠くなっていく。私の頭の中を素通りしていく。
――根津さん、ところで大塚えりはどうでした？　可愛かったでしょう？
「……まあ、悪くない」
我ながら歯切れが悪かった。肉体関係だけでなく、デートもすでに数回している。
――……手、出してないでしょうね？
「まさか――」
えりのことを聞かれ、咄嗟にそう答えた。一緒に飯を食て、その日に身体の関係まで結んだなどと答えたら、どんな罵詈雑言や嫉妬を浴びせられるか分からない。賀川はそういう粘着質な部分がある。そして私もそうだ。
――小川瑞貴の方は……？
「こっちも接触に成功した」
――さっすが……。
賀川に瑞貴のことを聞かれ、桧垣恭吾について知りたくなった。今の依頼にはさして重要な人物ではない。だが、小川瑞貴の関係においては違う。
完全に個人的な理由だ。明らかに仕事を逸脱している。

「賀川ちゃんは桧垣恭吾に関して何かネタはあるか？」
――……よく分からないですねえ。なんでですか？
「小川と会って、芹沢の話を聞くことができた。どうも桧垣が絡んでいるらしい。本人にあって話をできたらいいんだが……」
――そう言われてもですねえ……。
香川は困ったような声を上げると、「ちょっと待ってください。もしかしたらなんとかなるかもしれない」と言った。
「本当か？」
「知り合いにモデル出身の俳優の追っ掛けやってる主婦が居るんですよ」
賀川は私や宮島とは違う独自のネットワークを持つ。カメラ小僧仲間やアイドルストーカー、そして追っ掛けという人種だ。
男性アイドルや若手演歌歌手、モデル系若手俳優などを対象にし、十代の娘から中年の主婦まで年齢層は多岐に渡る。彼女達は我々が思っている以上に執念深く、目的のタレントに対し、出待ちやタクシーで尾行するなど当たり前で、ロケ地やコンサート会場など全国を行脚する強者も居る。
彼女達は互いに情報交換し、仕事先やロケ地、そしてタレントの住所まで掴んでいる。
主婦パワーを脅威に感じているのか、タレント事務所の中にはタレントに悪さをしないようファン管理の一貫として、組織化しているところもある。タレントのスケジュールの情報を流す代わりに、厳しいルールを定め、組織内には序列まで存在する。
だが、たまにタレントの住所や情報を売り、小遣い稼ぎをしている連中もいる。
――ちょっと、確認して折り返ししますよ。
「よろしく頼む」
賀川との電話が切れると、仕事への意欲が一気に喪失した。
六本木で奥野を張り込んだ夜が、強烈に甦る。
奥野の右隣には長谷部浩子が居る。

ときどき甘えたり、奥野に凭れたりしている。そしてその左隣には蓮沼が居た。
蓮沼と奥野が酒を飲んでいる。蓮沼は上機嫌で、奥野はどこか緊張し、恐縮しながら、酒を飲んでいる。
長谷川浩子は奥野をハメるために、蓮沼が放った刺客と考えたほうが妥当のようだ。
蓮沼の包囲網は予想以上に進行している。
蓮沼のテリトリーに自ら迷いこんでいるような気になり、私は肌が粟立っていた。

軽薄な若手俳優

賀川経由で、桧垣の情報が入ってきたのは二日も後だった。
桧垣恭吾の自宅マンションの住所と入り浸っている行きつけの飲み屋に関しての情報だった。
ネタ元は、電話で言っていた俳優の追っ掛けをやっている主婦からだった。もっとも今は桧垣の追っ掛けはやってないらしく、桧垣の後輩の方に対象が移っているらしい。
奥野への接触は神山への報告を経てからのほうがいいと判断した。思った以上に調査は難航している。
奥野を揺さ振る材料はあるにもかかわらず、自宅周辺で、奥野の帰宅待ちも何度も空振りに終わっている。ここ数日は忙しいらしい。
神山に会う迄にある程度結果を出したかったのだが、ままならなかった。
桧垣の情報が入ってきたことにより、受けた仕事より瑞貴の事実確認の方に気持ちが一気に傾いていた。
私は飲み屋近くを、張り込んでいた。携帯電話を玩びながら、メールを打つふりをしている。なぜか、携帯電話を弄っていると不振人物には見えにくい。
店の入り口から、二人組の男女が出てきた。
男の方は驚くほど細身で、長身の男だった。黒いニット帽を被り、サングラスを掛けている。ジーパンは所々破れ、素肌を晒している。それが少しも見窄らしいように見えないのは、男の足が驚くほど長いからだ。
桧垣恭吾に間違いなかった。
仕事を干されていても、奴が夜毎飲み歩きができるのは、事務所の社長か、所属の看板女優に気に入られているという理由がある。
また、奴の所属事務所はセレブ直轄ではないため、謹慎程度で済んでいるのだろう。女性ファンが多いということも奴を後押しする。

遠目から見ても、すぐに分かる。
芸能人とはつくづく分かりやすい。
桧垣は、少し太めの肉付きの良い女と腕を組んで共に歩いていた。体付きに比例してガードが緩そうで、服装もどこか露出が多く、明け透けで、派手だ。
私は携帯を仕舞うと、男へ早足で近付いていく。桧垣の背後に着き、腕を組んでいない左から一気に前に回りこんだ。
「桧垣恭吾さん、ですね」
私は男を見上げた。目の前に立つと、桧垣の背の高さを一層意識する。男は私をどこか見下している。私はそんな被害妄想に駆られた。
「誰、あんた……？」
高圧的で、不遜な口の聞き方だった。事務所は礼儀を教えているだろうが、一般人にまでそれをしろとは教育していないようだ。
身体は引き締まっている。脂肪が削ぎ取られ、引き締まった筋肉に全身が包まれているようだった。
高い背丈が、奴の魅力をより一層際立たせる。
桧垣自身長身で目立つ存在なのに、それを隠そうとしない。自信の表れか、マスコミを何とも思っていないのか、それともただの馬鹿か――。
「……お聞きしたいことがあります」
私は名刺も出さず、話を切り出していた。
桧垣と自分とのスペックの違いに、同じ人間かと神を恨む気分だった。
肌は浅黒く、野性的ですらある。髪型は無造作で、蓬髪といってもいい。でもそれは悔しいくらいに決まっている。
顔のパーツはそれぞれ絶妙な位置で配置されている。
高い鼻梁に、鋭角的な輪郭二重目蓋の切れ長の目は、二重の瞳は力強い光を放っている。男から見ても嫉妬を覚えるくらい魅力的だ。この眼で見つめられたら、女はひとたまりもないだろう。

「……取材だったら勘弁ね、事務所通してね」
桧垣は型通りの回答をした。交渉とは相手が拒否したときから始まる。
桧垣が私の横を通り過ぎようとしたとき「私、セレブの蓮沼さんの被害の実態を調べてまして」と言った。
蓮沼の名に桧垣の眼の色が変わった。
「ある女性がセクハラで訴えると申しましてね、彼女の弁護士の依頼で調査を……」
「蓮沼……！？」
桧垣は大きく反応していた。私の出任せに、桧垣は明らかに態度が変化した。
桧垣に怒りとも不快ともつかぬ表情が浮かぶと、苛立たしげに頭を掻いた。
感情を顕にする桧垣を見て、私は桧垣の頭のレベルがどの程度の物かすぐに読めた。
単純そのものだ。
私に何の疑いも抱かず、与えられた情報を鵜呑みにし、感情の赴くがまま行動する。自分で考えるという行為が欠落している。
この手の人間は話を聞きだしやすい。高水準の外見とは裏腹に、内面の底の浅さが透けて見える――たいした男ではない。
「……ちょっと、先行ってて」
女に指示を出すと、私の方を向く。
「……あいつのお陰で、俺、今仕事できないんですよ」
怒りを露にしながら、桧垣は言った。
「どうしてですか？」
私の問いに桧垣は苛立たしげに舌打ちする。
「小川瑞貴に手を出したって、因縁付けられちゃって……」
「手を出したんですか？」
私は冗談のように聞いた。だが、それは私が一番聞きたいことであった。

「……飯食いにいっただけですよ。まあ、変な気が無かったって言えば嘘になるかな」
桧垣は事無げに言った。
桧垣のある種の軽さに、私は自らの中に沸き起こる不快さを圧し殺す。だが、桧垣の態度から瑞貴とは深い関係ではないらしいことは、はっきりとわかった。
「……俺も後悔してるんですよ」
桧垣は舌打ちしながら言った。
「芹沢玲香に嫌われてたから、彼女――」
「……何故ですか？」
「……知らないですよ。よくあるでしょ。女同士の……何て言うの？　相容れない、生理的なもの？　理由はないけど、嫌いだったんじゃないんですか？　彼女……芹沢玲香は意外に女優志向だし……。話題性だけで投入された彼女を不愉快なのはわかりますけど、瑞貴ちゃんにすれば関係ない話ですよ。まあ、瑞貴ちゃんって男には好かれるけど、同性に嫌われるタイプだし」
瑞貴をちゃん付けで呼ぶ、桧垣の気やすさが、許せなかった。
一方で、桧垣の分析は聞き捨てならないものがあった。そういう感情的なものが二人の間に大きく横たわり、激しい流れを生み出している。
また色男はえてして女のそういう機微に敏感である。ゆえに女の心を掴みやすい。
「……女の喧嘩って怖いよね。その癖陰険だし。男みたいに表立ってやらないけど、どんなに隠しても伝わってくるでしょ？　お互いプライド高いから、口聞かないし、コミュニケーション取らないし。現場の空気最悪でさあ……」
桧垣の言葉遣いが気になっていた。明らかに私のほうが年上であるにもかかわらず、敬語の使い方が雑だった。だが、耐えねばならない。馬鹿に礼儀を説いて何になる。
「まあ、端で見てて可哀相だったから、元気付けるって言うの？

いろいろ世話を焼いてやったというか、まあその程度の関係ですよ」
私は桧垣に合わせるため笑ってみせた。
要するに、この男は弱みに付け込んで瑞貴をものにしようとしたのだろう。手が早いという噂は真実らしい。
「……でも、やるんじゃなかったなあ……。蓮沼のヤロー、勝手に勘違いしやがって。向こうさん、タレントに手出されたとかで、何か怒らせちゃったみたいで……。うちにクレーム着けてきちゃって。何様のつもりなんだか……。俺、ほんと手も握ってないんだから。意外に彼女、堅くてさあ……」
私は大げさに頷きながら話を聞いていた。
桧垣は理解していない。
蓮沼の恐さを。
そして、事務所の力学を――。
この調子では、桧垣の芸能生命も長くはないだろう。
「芹沢にも頭きてんのよね……俺。蓮沼とは仲がいいみたいだから。たぶんチクったのあの女でしょ？」
「……芹沢さんですか？」
私が確認の為に聞くと、桧垣は頷いた。
「実際、このドラマでいろんな人間がひどい目に遭ってるんですよ。……数字が悪いのは瑞貴ちゃんのせいにされちゃうし、視聴率悪くてドラマのプロデューサーとかも子会社に飛ばされたらしいですよ。まあ、どこの事務所にもいい顔するから。セレブから賄賂もらってたらしいから、同情の余地ないですけど……」
数字はもとより、リベートの方が会社的には問題だったのだろう。個人的な繋がりが強くなれば、いやでもセレブのタレントを使わざる終えない。現場から外すことで、局側がセレブに牽制をかけたというのが、当たっているような気がした。
「蓮沼さんと芹沢さんは仲が良いんですか？」
私は質問を放った。
「……ええ、よさげでしたよ。どのマネージャーさんもペコペコし

ちゃって。芹沢のマネージャーとも飯食う約束とかしてたなあ」
思わぬところで、思わぬ情報が飛び込んできた。
蓮沼と森川は懇意――どういうことだ……？
「蓮沼さんはよく現場に来ていたんですか？」
「陣中見舞いとか言って、呼ばれてもないのに現場に顔出しに来てさあ……うっとしいつうんだか。……要は、女の子の物色でしょ。ディレクターも蓮沼には弱いからそれで、撮影は中断するでしょ。で、収録は押すし、もう最悪でしたよ。出演するほうの身にもなれって話。で、数字が悪いと全部現場のせいにするんだからさあ。たまんねーよなあ……」
「小川さんが蓮沼さんの推薦でドラマに出演されたんですよね……？」
私は質問した後で後悔した。少々踏み込みすぎた内容だった。だが、桧垣は疑問を抱く様子はまったくなかった。
「……まあ、たしかに馴々しかったな。身体べたべた触ってたし、呼び捨てだったし。瑞貴ちゃんも笑ってたけど、明らかにセクハラだったな。でもしょうがないよね。瑞貴ちゃんの事務所はセレブの系列で、蓮沼はセレブの人間。しかも幹部だもん。逆らえないよね」
「そう言えば芹沢さんのマネージャーの方も会社を退社されてるんですよ」
私は別の話題を振った。
「芹沢って、あの森川とかいう奴？」
「はい」
「蓮沼さんも森川さんを探しているらしいんですよ」
「……へえ、そうなんだ」
「何か理由があるんでしょうか？」
「ちょっとわかんねーなあ……」
桧垣は首を傾げた。
「でも、芹沢とマネージャー、別段仲悪いようには見えなかったけどなあ」

「現場ではどんな感じでした？」
「……それ関係あるの？」
「……ありませんね。すみません」
少し踏み込みすぎたようだ。
桧垣が「もういい？」と言うと「有難うございました。お手間を取らせました」と私は質問を打ち切った。
「あいつを絶対訴えてよ。……俺は何もできないけど」
証言台に立つつもりはないらしい。自己保身の術だけは心得ているようだった。
身を翻すと、桧垣は女が待っている方向へ駆け足で去っていった。
桧垣の姿が見えなくなると、私は不快さで口が粘ついたため、道路に唾を吐いた。

もう一人の芸能界の大物

タクシーが目的地に近付くにつれ、私の気持ちは沈んでいった。
私は今、神楽坂に向かっている。神山が指定した場所だった。
女との待ち合わせでもないのに、仕事同様スーツ姿だった。
芸能界の大物に会うという事に加え、調査でもいい結果を出せていないというのも私を憂鬱にさせている原因だった。
今のところ、私は完全に後手に回っている。こちらの行く先々で蓮沼が現われる。
蓮沼は奥野からどんなネタを捻り出しているのか。いや、森川に対し罠を張っているという言い方の方が正しいだろう。
調査をしていく一方で、蓮沼の奥野に対する行為は少々大袈裟すぎる気がした。
たかだか、森川一人を引き込むために、わざわざここまでする必要があるのだろうか。
単に蓮沼が周到なだけなのだろうか。それとも別の目的があるのか。そこまでして、森川を抑えたい理由が、蓮沼にあるのだろうか。
全てが不可解だった。
もし、会食の席で、神山に吊し上げを食らうようならば私は仕事を断るつもりであった。
だが、果たして辞められるだろうか。
プロとしての意地もある。個人的な興味もある。私自身この調査を最後まで続けてみたかった。
そして瑞貴のこともある。今調査がストップすれば、私に利用価値が無くなり、瑞貴も私との繋がりを絶つだろう。それが一番避けたかった。
私は苦笑した。自らで自らの首を絞めている。
神山はともかく、瑞貴との関係は今後とも継続していきたい。その為にはもう少し親密になる必要がある。この前ような雰囲気では

距離をつめることもままならない。
真意を聞き出すにはあと数回、会う必要がある。そのためには今のこの調査を続行させる必要がある。つまりはクライアントの接待は必要不可欠だった。
タクシーは住宅街の中へ入っていた。場所が場所だけに、富裕層が住むような高級マンションや大きな家が立ち並ぶ。
一画でタクシーが停止した。私は金を払い領収書をもらうと、タクシーを降りた。
木造の塀に囲まれた店構えである。
創作懐石を食べさせる店で、有名料理店で修業を積んだ職人が腕を振るう店らしい。おそらく神山が普段から、業界関係者との商談や打ち合せに利用しているのだろう。
入り口で私を迎えた仲居に自らの名を告げると、奥に通された。
店は、廊下の床や壁、生けている花や花器、美術品に至までたっぷりと金を掛けている。
私のような地を這いつくばるような庶民が決して出入りできるような店では無かった。
この国を動かすような連中が密談を行なうために利用するような店なのだろう。
渡り廊下から石庭が見える。
「――こちらでございます」
仲居が膝を折り、障子を開けると、私を中へ促す。
部屋には一人の男が待っていた。
歳は５０に手が届くくらいのはずだが、３０代でも十分通る。
金持ち特有の脂肪の塊ではなく、一八〇前後の長身で、スリムな肉体に高級そうなダブルのスーツを着こなしている。おそらくスポーツかジムで身体を鍛えることは欠かしていないだろう。
顔の肌は黒光り、全身から精気が漲っている。髪に白いものは一切混じってなく、黒々とし、後に撫で付けている。柔和な形になっている眼窩の奥は鋭い。

全体的に落ち着いた大物の雰囲気を身体から発している。
男は立ち上がると、手を差し出す。
「お初にお目にかかります。神山です。お噂はかねがね――」
声も驚くほど若かった。低音でありながら、よく通る。
私は気圧されたのか、神山の手を握る。面積が広く長い指だった。
腕には白色の光を放つケースの時計を見た瞬間、私は思わず目を見張った。
「……パテックフィリップですか？」
私は思わず口にしていた。
「よくご存じですね。ワールドタイムです」
神山は自慢げに言う。
ホワイトゴールドのケースが輝いている。
物の価値も分からず流行りもののフランクミュラーや金ムクのロレックスを巻くような趣味の悪い男ではないらしい。
「時計がお好きなんですか？」
「ええ。まあ……」
神山の問いに、私は曖昧に頷く。探偵稼業の悲しい習性だった。身につけている装飾品から、行きつけの店を割り出すことが良くあるため、自然とブランド品には詳しかった。
「……時計もタレントも同じですな。金と手間が掛かる」
時計を見ながら言う神山の言葉は重かった。
「だからこそ愛着が湧く」と私が言うと、「その通りです」と神山は同意した。
「小田から話は聞いていると思いますが、根津さんにはご足労いただき感謝の極みです」
神山は頭を下げる。どうやらこの男馬鹿ではないらしい。社会的地位がありながら礼儀を弁えている。
だが、多少演技じみていることも否めなかった。
「お座りください」と神山に促されるままに私は席に着く。正直、神山の視線を受けとめるのは私にとってかなりの負担だった。

「瀬川さんは災難でしたね」
私は言った。
「……いえいえ、いい薬ですよ。この業界の女は男を見る目が無くてね。まあ、狭い世界で出会いも少ないですから仕方がないんです。私も多少大目に見ていますが」
いやにあっさりした言い方だった。神山はもう瀬川に関心が無いのかもしれない。確かに恋愛に狂った女タレントを制御するのは、面倒で労力がいる。
「瀬川さんと相手側の男の今後は……？」
「別れさせました」
神山は事無げに言った。
「スポンサーの契約の手前もありますからね。違約金を相手側にちらつかせたらあっさり引き下がりました。瀬川も納得積みです」
神山に凄まれたら、そうなるだろう。
自社タレントへの対応と神山の決断の速さに、私は恐くなった。まったく他人事ではない。
「調査の方はどうでしょう？」
神山が尋ねてきた。
「お恥ずかしい話ですが、はっきり言って芳しい成果は上げていません。今関係者と接触しようとして色々探りを入れて入れますが……」
「……調査はまだ始まったばかりでしょう。期待していますよ」
神山の一言に身震いする。
私の愚にもつかない曖昧な答えに嫌味を言うどころか、応援した。尻の穴がこそばゆくなった。
やはり何か思惑があるのだろうか。今日は、いやに疑心暗鬼になっている自分に苦笑することはなかった。それだけ目の前の男は油断ならない。無意識的に堅くなっている自分がいた。
障子が開き、料理が運ばれてきた。
寿司の盛り合わせ、天麩羅や揚げ物、刺身の盛り合わせ、お吸い

物などがテーブルに並んでいく。
高級食材をふんだんに使い、生み出されたものだということは、容易に想像が付く。
口のなかに入れると板前の仕事の凄さがよりいっそう理解できた。
私は箸で料理を口に運びながら、次に何を尋ねるか考えていた。
ここで一発、私の方から打って出たほうが、いいのかも知れない。
「神山さん、一つお聞きしたいのですが？」
私は切り出す。
「なんでしょう」
「藤崎のネタを仕掛けたのは貴方なんですか？」
「いきなり核心を突いてきますね」
神山は苦笑する。
「――我々も驚いているんですよ、実は」
「つまりあなた方ではないと……？」
「ええ」
「では、伊沢達也と藤崎理奈の関係はご存じだったんですか？」
私の問いに神山から笑みが消えた。
「そもそも、何故伊沢達也の調査した理由は……？　そして芹沢玲香の元マネージャーの捜索に切り替わったのか、その訳をぜひお聞かせ願いたい」
私の問いに、神山はただ黙って視線を送るだけだった。
「そして、私が森川を捜しだした後、彼をどうなさるおつもりですか？」
神山はお銚子を取ると、「確かに伊沢達也は藤崎と付き合っているという情報は事前に入手していました」と答えた。
神山の言葉に私は顔が強ばることを意識せずにいられなかった。
「――ですが、あくまで信憑性に乏しい情報でした。だからあなたに依頼したのです」
私は神山の言葉に箸を止めた。
「……逆にお聞きしますが、仮に伊沢が藤崎と付き合っているとい

うことを伝えていたら、あなたは動いて頂けましたか？」
私は神山の問いに言葉に窮した。
「我々、芸翔はここ数か月何度もタレントのスクープ攻勢に曝されていました。セレブであるのは明白です。我々としても手を打ちたかった。だからこそ根津さんに伊沢達也の調査をしたのです。ご理解頂きたい」
納得できなかった。
そして芸翔はいや、神山はやはり何かを掴んでいるという予感がした。今度は藤崎に狙いを絞るのだろうか。また何かしかけるつもりなのか。
確信が無くて、いまいち踏み込めない。神山の機嫌を損ねかねない。
「互いに話し合ったうえでシェアの分け合ったほうが懸命なのでは？」
私の意見を神山は鼻で笑った。
「私はともかく、物部がそんな生温い提案を呑むと思いますか？」
「呑まないでしょうね」
私の答えに神山は再び笑う。
「物部は私が同じ土俵にいるという認識すらできていない。しかももはや私に追い詰められて土表ぎわだというのに、だ……歳は取りたくないものです」
物部をここまでこき下ろすなど、さすがは芸能界を物部と二分する男である。考え方や仕事のスタンスがまったく違う。
「物部に私の存在を認めさせるには、乱暴だが情報戦をこちらから仕掛けるより無い。ときに根津さん――」
突然名を呼ばれた私は「はい？」と聞く。
「いま、現在セレブで使いものになるタレントは何人かだと思いますか？」
「……さあ。何人ですか？」
関心の無い話だった。芸翔であろうが、セレブであろうが芸の無

い連中が跳梁している事に代わりはない。作り上げられたタレントには興味はない。
神山は座りを直すと「藤崎玲奈だけです」と乗り出すように言った。
「……事実上、一人なんですよ。後は事務所の営業力とゴリ押し、マネーパワーによるものだ。だから向こうは情報戦を仕掛けるより他ない。それしか無いんです」
「……著作権ビジネスをお忘れですか。物部は多大な原盤権を持っている――」
セレブのもう一つも側面であり、根幹でもある原盤権の掌握――所属するアーティストのみならず、さまざまな有名歌手や作曲家からスキャンダルや契約を楯に、弱みに付け込むこと楽曲の原盤権で奪い取った。
原盤権は莫大な金を生む。セレブの屋台骨が揺らぐなど到底思えない。
「知的所有権ビジネスか……」
神山は鼻で笑った。
「――物部の生命線である著作権ビジネスも、違法コピーの横行により尻窄みになるのは必定です。アメリカのメジャーレーベルですら潰れるくらいの時代ですからね……。いかに法を整備しようと無駄なことだ。次の潮流が音楽配信となりつつある音楽業界においてあがりは薄くなる一方だ。昔のような莫大な利益はもはや望めない――」
私は神山の冷静で見事な現状分析に正直舌を巻く思いだった。あまりにも正鵠を射ている。
芸能プロの幹部は現状分析というものができない。過去のやり方に固執し、周到するのが芸能プロの伝統だ。特に最近はタレントを育成するという考えは希薄で、宣伝費にやたらと金を賭ける。
音楽配信の流れはもはや時代の流れといってよい。その潮流はいかに芸能界の帝王といえども留めることはできない。再編は求めら

れ、すでに始まっている。業界人ですら、想像もつかないくらいの速さで、だ。
スマートフォンが主流になりつつある今、さらに加速するだろう。
神山は中々先見性がある。芸翔のトップは伊達ではない。
「それに好き好んで、過去のソフトにわざわざ金を払う馬鹿がどこにいます……？　リメイクなどの小手先で大衆を欺くのは限界がある――」
そう言うと神山は酒を煽る。
「特に今は韓国勢の台頭もめざましい……と」
私も知ったようなことを言うと、神山は渋い顔になる。
「……ええ。にもかかわらず、今だにセレブは雑誌や放送による情報操作やイメージ戦略より大衆をだませる思っている。実に前時代的だ。このＩＴ社会に於いて時代遅れも甚だしい。ネットの掲示板をご覧なさい。大衆は我々が思っているよりずっと聡明だ」
「――そうですね」
私は同意した。
「そんな、時代錯誤な芸能プロとシェアを分け合う理由がどこにあります？　この際、物部には己れの力の衰えを十二分に理解してもらう必要があります」
神山の宣戦布告そのものだった。
「藤崎理奈に関しては、私はアクティブが仕掛けたものだと考えています」
「それはないでしょう。アクティブは、セレブと懇意だ。仕事上の仲間といってもいい。その関係を壊してまで、こんなことをするはずが無い」
「――先日、アクティブスターの社長に酒の席に誘われましてね」
私は料理を吹きだしそうになった。
「……アクティブ側は今後セレブと一緒にやっていくことはジリ貧を意味すると考えている。ゆえに我々芸翔と関係を深めたがっている」

「……本当ですか」
「乗り換え時というのもありますでしょう。何事も――」
神山の言葉に、私は肝が冷える思いだった。
「私としても芹沢玲香のみならず前々からアクティブのタレントの層の厚さには個人的に注目していました」
「……マネージャーを抑えたところで何ができるって言うんですか？　彼はなにか芹沢玲香の弱みでも握っているんですか？」
「その通りです――」
神山は認めた。
「――件の男は、芹沢玲香に関して決定的なネタを所持しているようなのです」
「なんですか、それは……？」
自らの好奇心を抑えられず、私は思わず尋ねていた。
「芹沢玲香の芸能生命を奪いかねないものとでもいっておきましょう――」
神山は言い切った。
特ダネと称し、芸能事務所に近付いてくるこの手の業界関係者は跋扈する。そんな連中をいちいち相手にするほど芸能事務所は暇ではない。
決定的な何かを神山は掴んでいるのだろうか。
「……今回の話を偶然聞き付けましてね。私の方からアクティブに事態の収拾を持ち掛けました。アクティブと私の間では、全て私に任せてくれるとのことで話は着いています」
私は自分が巻き込まれている事態の大きさに、身震いする思いだった。
「アクティブとしては広告主との契約の関係上、芹沢を守ってほしい、と。そのネタを森川が所持していた場合、もしこれが社会に流出すれば、芹沢玲香のタレント生命はもちろんですが、アクティブが大打撃を喰らうのは必至です。その損害は億単位に達するでしょう」

私は全身の肌が粟立った。恐怖によるものなのか、興奮によるものなのか、自分でもわからなかった。頭をフル回転させても、答えを弾き出すことができない。

「……神山さんは森川氏をどうするおつもりですか？」

私は神山に尋ねずにはいられなかった。

「ネタを奪って、アクティブから芹沢玲香でも引きぬくつもりですか？」

私は疑問を神山にぶつけていた。

「私としてはアクティブと良好な関係を築くためにアクティブを支援したい。互いが発展するためにも、障害は取り除いておきたいということです。ただそれだけですよ。アクティブのやり方がどうであれね……」

芸翔が後ろ盾になることにより、アクティブは強固なものとなる。互いの利害は一致する。

「セレブも森川のネタを入手することで、芹沢玲香を引き抜きたい……？」

「そういうことでしょう」

神山は頷く。

「……はっきり言って、自信がありませんね。セレブはすでに各方面に圧力を掛け始めています」

私は本音と事実を言った。

「私が貴方を全力で護るとおっしゃっても？」

神山が言った。白々しい言葉だった。

「……頼もしいですね。本当のことならば」

神山の口元に笑みが浮かぶ。ぞっとするような笑みであった。

「調査の方はそのまま続行してください。もしセレブがなにかしてくるようならすぐに私にご相談してください。すぐに手を打ちます」

「確認しておきたいのですが、私の仕事は捜索対象者を捜し当てることでよろしいのですね。彼が所持するネタを回収するのではなく……」

「はい。潜伏場所を見つけしだい、後はこちらで森川と直接話を付けます」
神山自身半信半疑なのだろうか。いや、少なくとも神山は確信を得ている。
「いずれにしろこちらは後手に回っている。セレブの幹部の一人が森川氏の関係者に接触しています」
「誰ですか？」
「現在調査中です」
私はあえて蓮沼の名を伏せた。
「今、調査対象の関係者の口を割らす為に関係者の周辺を洗っています」
「ほう」
「アクティブスターの社員なのですが、ただ接触しただけでは口をおそらく口を割らないと思いますので、少々乱暴な手を使おうと思っていまして……。接触してもかまいませんか？　もちろん神山さんの名は絶対に出しません」
「――かまいません。しかしながら、なるべく芹沢玲香本人には悟られないように事をすすめて頂きたい。本人はまだ、このことを知らないので――」
「心得ました」
私の言葉に神山は微笑む。再び悪寒が走る。
「……やはり、根津さんと会って正解でした。写真や聞き伝えでは人柄というのはわからない。本人と直接会うのが一番だ。今日の食事は実に有意義なのもとなりました」
上機嫌な神山とは対照的に、営業用スマイルを必死に繕う私の中に不快さと不可解さが渦巻いていた。

恫喝調査

私は奥野の自宅付近で帰宅するのを待っていた。
時計はすでに午前二時を回っている。
まるで取材対象に夜打ちをかける記者の気分だった。
事実、奥野を揺さ振るネタは十分にある。
神山との会食の次の日、私の口座には金が振込まれていた。
伊沢達也の調査費用と報酬、そして特別ボーナスだった。私が請求した金額より遥かに上回っている。
金で雁字搦めにしようとするのは神山もお得意のようだ。法外な報酬に喜ぶどころか、身が竦む思いだった。これで、私ももう後には引けないようだ。さらに、ありがたくないことに神山と携帯番号まで交感した。
権力側に座する神山に対し、私は嫌悪感に近いものを抱き始めていた。
私は神山との会食を思い出していた。
森川が所持する芹沢玲香のネタというのはなんなのか。

写真か、映像か。
出自か。
親兄弟に関することか。
過去についてか。
それとも私生活に関する弱みか――。

上げれば、キリが無い。
なぜそんなものを森川が持っているのか。
芸能事務所とのなればそんなものが持ち込まれるのは日常茶飯事だ。いちいち相手にするものだろうか。

それとも神山は、何か確信にいたるようなものを得たのか。
疑問は尽きない。
森川を捜しだせということは、神山的には金で算段を付ける腹なのだろう。
仮にもし、私が手に入れた場合どうするか。
神山に素直に渡すか。
それとも――。
いずれにしても入手困難は必至だ。
前方から一人の男が歩いてきた。鞄を下げ、疲れ切った様子がはっきりと分かる。
奥野だった。私の目の前を通り過ぎると、私は背後から近付き、相手のパーソナルスペースに一気に踏み込む。
まるでナンパそのものだ。
私は左横から回り込むと「アクティブスターの奥野さんですか？」と声を掛ける。
突然名を呼ばれ、奥野は身体をびくつかせると、脚を止めた。
えりの言う通り、確かに気が弱そうだ。
「根津と申します。訳あって森川さんを探しています」
私は名と目的を告げる。
森川という言葉に奥野の表情は一変する。面倒事を避けるようにきびすを帰すと早足で歩き始めた。　分かりやすくて助かる。
後を追いながら私は「同僚の方に聞いたところ、奥野さんは森川さんと親しかったそうで居所とかご存じありませんか？」と尋ねた。
「――知りません」
にべもない奥野の答えが返ってきた。
「……すみません。急いでますので」というと奥野は、私から逃げようとした。
「ちょっと待ってくださいよ」
私は引き止めようと奥野の肩を掴むと懐から用意していた写真を差出し、奥野に見せる。

「……セレブの蓮沼さんとのお付き合いは、会社公認なんですかね？」
私の言葉に奥野の顔がさぁっと青くなる。
さらに私は畳み掛けるように次の言葉を放つ。
「休日はあきちゃんとデート、いや同伴ですか……。羨ましいかぎりだ」
「な、な、何の話です？」
「六本木の高級キャバクラに勤めるキャストの娘ですよ。ずいぶんオイシイ思いをしているみたいじゃないですか……？」
私の言葉に、奥野の唇は震えていた。奥野を完全に掌握したようだ。
「……費用はセレブ持ち、ですか？　他にもセレブからアゴアシ付きの接待を受けていますね。そんなこと会社にばれたら、馘ですな」
震える奥野に、私の中で暗い喜びが鎌首を擡げる。
「……大丈夫ですよ。森川さんについて教えていただければ、会社に密告するような真似はしませんから。貴方の恋愛を邪魔するつもりもありません。どこか落ち着ける場所でお話を聞けませんか？」
逃げられないよう奥野の肩を抱き、私は無理やり目的地へ歩かせようとした。
奥野の身体は弛緩し、抵抗しなかった。

私と奥野は奥野自宅近くにあるファミレスに入った。
向かい合って席に着くと、私はコーヒーを二つ注文した。
目の前の奥野は蒼い顔をして震えている。私と視線を一向に合わせようとしない。少し安心させる必要がある。
「……落ち着いてください。別にあなたを強請ろうだなんて思っちゃいない。私の質問に答えていただければ、悪いようにはしませんよ」
本心だった。

「単刀直入にお聞きしますが、森川さんの居場所わかりますか？」
私は訊いた。
奥野は黙り込んだまま、私と眼を合わそうとしない。
私はデジタルカメラのデータが記録されたＳＤカードを取出し、奥野の眼の前に突き出した。奥野は顔を上げた。
「お答えしていただければＳＤカードごとお渡ししますよ」
奥野は再び俯いた。黙りを決め込めば、逃れられるとでも思っているのだろうが。浅はかな男である。
「あきちゃんは、蓮沼さんの紹介ですか？」
かまわず私は奥野に問う。奥野は依然答えない。
店員が注文したコーヒーを運んできた。
「そもそも何故、森川さんは会社を辞めたんですか？」
何度目かの返答の拒否に、さすがの私も苛立った。
「奥野さん……！」
私は高圧的に呼ぶと、奥野は身体をびくつかせた。手を差し出し、コーヒーを飲むことを促すと奥野はカップを手に取り、を口に含む。
奥野が語りだすのを私は辛抱強く待っていた。奥野の持つカップが小刻みに震えている。脅かしすぎたことに私は少し後悔した。
「……森川さんは芹沢のマネージメントで上司との意見が合わなくなっていた」
ようやく奥野は、口を開いた。緊張の為か、声は小さく震えている。
「……片岡部長さんとですね？」
私が尋ねると、奥野はハッとした表情になる。
「そんなことまで……！」
奥野は驚きを隠さなかった。
「意見というのは、芹沢玲香の仕事の方向性ですか？」
「……それもあります」
奥野はいったん言葉を切ると「……芹沢は監視されていたんです。会社の方で」と言った。

「監視……？」
私は思わず聞き返していた。
「片岡さんにに命令されて……ですか？」
「……おそらくは」
「何の為に……？」
「会社としては芹沢がセレブに引き抜かれることを危惧していた」
「――物部守雄が芹沢を欲しがっていたから？」
私の問いに奥野は頷く。
「物部さんは会社の枠を超えて、芹沢のスキャンダルを何度か救っています。それだけ物部さんは芹沢を見込んでいた。もちろん将来的に自分の所に引きぬくために……。その為の先行投資でしょう。といっても、ウチの事務所は物部さんに良くして頂いていますし、年頃の娘も多いので、その……」
「スキャンダルはセレブの力で圧力を掛けてもみ消してもらっている、と？」
私の問いに、奥野はひどく疲れた顔を見せた。
私は同情した。商品達の予期せぬ行動で、森川や奥野、そして周りの人間がその処理に奔走している様が容易に想像できた。
「芹沢さんの権利関係がセレブに委譲しているんですか？」
私は質問を続ける。
芹沢クラスのタレントともなれば、肖像権や営業権など権利関係が複雑に入り組んでいる。昨今のタレントは権利関係を切り売りすることで、タレント業務が成り立っているといっても過言ではない。
「……いいえ。でも、業務提携はその一貫かと」
「監視というのは、具体的には……？」
「交友関係やプライベートなどを定期的に調べていたようです。興信所やリサーチ会社を使って……。森川さん自身も休日返上で積極的に芹沢と接触し、彼女を管理しようとした……」
興味深い情報だった。
「調査会社というのは？」

私はさらに踏み込む。
「……わかりません。でも森川さんが隠し撮りの相談を持ち掛けようとしていました」
「隠し撮り……？　何処ですか？」
私の問いに奥野は一瞬いいあぐねる。
「……ウチが企画製作している番組を作る際に提携している会社です」
奥野の言葉に、私は喉の奥で息を飲んだ。
番組製作会社ならば、隠し撮りもお手の物だろう。盗撮専門のＡＶ制作会社などよりよっぽど、腕は確かなはずだ。言うまでもなく、バラエティは隠し撮り企画が今だに花盛りだ。子飼いの会社ともなれば口も固いし、そこから素材が漏れることもない。
森川が芹沢の決定的なネタを握っているという話が俄然真実みを帯びてきた。
となれば、森川のネタというのは盗撮映像と見て間違いないようだ。
「森川さんと芹沢さんは恋愛関係にあったんですか？」
奥野は首を振る。
「……芹沢は現在付き合っている男が他にいます。森川さんの行動は個人的感情に基づくものでしょうね」
「付き合っている男というのは？」
「青年実業家らしいですが……。詳しくはちょっと……」
本当に知らないようだ。
「以前、酒の席で森川さんが漏らしたことがあります……今、愛している女性が居ると」
奥野がぼそりと言った。
「……とても、辛そうでした。芹沢の名前は直接言うことはありま

せんでしたが、彼女に間違いないでしょう。すぐにわかりました」
「森川さんは芹沢さんを愛していた……？」
私の言葉に、奥野は頷いた。
「……少なくともマネージメント以上の感情はあったと思います」
奥野の声は始めの頃とは違って明瞭になってきていた。腹を括ったのか、諦めたのか当初の緊張も解れてきている。
「それに片岡が芹沢より今関心があるのは……」
「――神谷祐希」
私の言葉を裏付けるように、奥野は頷いた。
「何かと扱いづらい芹沢より、将来有望で素直な神谷の方に力が入るのは仕方がないと思います。でも芹沢は数字を持っているので……」
「アクティブスターは彼の行方を追っているんですか？」
「――いいえ。会社側としては森川さんには何の未練もないようです。一方で、芹沢に対してガードは以前より厳しくなっています」
「片岡さんの指示で？」
私の言葉に奥野は頷く。
「芹沢は神谷を意識しているようです。危機感を覚えているのか、何かに付けて探りを入れてきます」
私はアクティブと芸翔の関係を尋ねようとしたが、思い止まった。その質問をすることは私の依頼人が芸翔であるということをバラすようなものだ。いくら相手がこの気の弱い男でもすぐに分かるだろう。今は得策ではない。
「芹沢さんには森川さんの失踪した理由をどのように伝えているのですか？」
「会社は一身上の都合により辞めたと……」
「本人の様子は？」
「……別に、これといって変化はありません」
影響ないらしい……冷たい女である。
「彼女は自分が監視されていたことを知っている……？」

「……それはないと思います。こう言い方はどうかと思いますが、芹沢は森川さんを舐め切ってますから」
奥野はきっぱり言い切った。
芹沢自身飼い犬に手を噛まれるなどまったく想定していないのだろう。芹沢の性格の一旦が伺えた。それが、事態をより一層複雑にしている。
「失踪直後の彼を教えて頂けますか？」
私は別の質問を放った。
「……当時、芹沢玲香に音楽デビューの話がありました」
「音楽デビュー……？」
私は思わず笑ってしまった。
釣られるように奥野も笑う。
「芹沢主演のドラマで、もちろん主題歌はうちの新人アーティストですが、ドラマで挿入歌を別名義で……。といってもすぐ分かるようなアーティスト名なんですけど……。よくある話題作りです。CMの絡みもあって、スポンサーの方から要請がありまして、結局こちらが飲みました」
「……そんなことで今時の視聴者を騙せるんですか？」
私の辛辣な言葉に、奥野も苦笑いする。
「……片岡部長はそもそもタレントを育てるという考えが希薄な人です。タレントをそれこそマネキンか何かの商品としか思っていない」
奥野は不満げに言う。
奥野自身も片岡に対し、相当思うところがあるようだ。
「芹沢の歌はとても商品になるものではありません。本人もそれを拒否し、森川さんはその意向を片岡さんにお伝えしたのですが、意にそぐわないという事で森川さんは配置換えにより、芹沢の担当を外される予定だった……」
森川が焦るわけだ。
私には森川のさまざまな事情が見えてきた。

「神谷さんが暴漢に襲われたことについて、お聞きしてよろしいですか？」
奥野は驚いたように顔を上げた。
「どこでそれを……？」
「プロですから」
私は適当にはぐらかした。
「……森川さんが失踪後、神谷を脅迫する手紙が送られてきました」
「……脅迫？」
「正確には片岡部長に対してですが」
「どういう内容ですか？」
私は身を乗り出していた。
「芹沢を大事に扱わないと、神谷を壊すと――」
「……森川さんが、ですか？」
奥野は頷く。
「さすがの部長も今回ばかりは、あまり無茶なことはできなくなりました。何せ神谷は部長のお気にいりなので……」
「警察には届けないんですか？」
私の言葉に奥野はギョッとなった。
「……そんなことをしたら、神谷にあらぬ噂が立ちます！　……神谷だけじゃない。芹沢だってダメージを受ける。二人は我が社の売れっ子です。二人がダメージを受ければ我が社の損失は計り知れない……只でさえ、二人の仲に疑いを持つ連中はマスコミ業界人は多い。森川さんのことを引き合いにして、憶測を呼びます。そしてこぞとばかりに二人は格好のネタになる……！」
奥野の言うとおりだった。そのことを計算の上で森川が仕掛けたとすれば、森川は大した策士だ。
「芹沢の近況を確認する電話が掛かってきたことは何度かありました」
「本当ですか……？」
私は聞き返すと、奥野は頷く。

「でも蓮沼にマークされているといったら、それっきりで……」
「……もし、今度連絡があったら、私までお電話頂けませんか？」
私の言葉に奥野は青ざめる。
「悪いようにはしませんから。彼にあって直接お聞きしたいんですよ。いろいろとね」
「……そんなことしたら先輩に殺されます！　勘弁してください！」
奥野は怯える。
「潜伏場所に心当たりは？」
「本当に知らないんです……！」
奥野は必死で私に訴える。
「会社や蓮沼さんに散々問い詰められていますが、むしろこっちが知りたいくらいで……」
奥野は完全に弱り切ったような顔を見せた。
奥野も片岡や蓮沼など周囲から相当の突き上げを食らっているようだ。今回の一番の被害者は、目の前の男かもしれない。
「蓮沼さんも、森川さんを探しているんですか？」
私の問いに、奥野は一瞬迷ったように押し黙ると、「はい」と小さな声で返事をした。
「何の目的で……？」
「……わかりません」
奥野の様子から嘘は言っていないようだ。考えてみれば利用しようとしている男に対し、蓮沼が自分の思惑を洩らすはずがない。
「蓮沼と森川の関係は？」
私は尋ねる。
「芹沢のことで何かと相談を受けたと蓮沼は言っていました。契約を盾に片岡部長は移籍できないようにしている。だから、移籍が上手く行くよう協力を求められた、と……」
「芹沢をセレブに移籍させるつもりだったんですか？」
「おそらくは……」
そして何かトラブルがあったんだろう。それが片岡の耳に入るこ

ととなり、森川は失踪せざる終えなかった――のだろうか……？
なぜか釈然としないものが残る。すぐには思いつかなかった。
頭を整理しようとする私に「あのう」と奥野は声を掛けてきた。
ＳＤカードを見ながら「私の知ってることはすべて言いましたので……」と奥野は恐る恐る言ってきた。
「もう一つお願いがあるんですが……」
私はＳＤカードを弄びながら言った。
「ま、まだ何か……」
「……芹沢さんの携帯電話を調べさせていただけませんか？　彼女からなんとか持ち出して」
「いや、しかし……」
「データを引き抜くだけです。ほんの少しの間ですよ。お願いしますよ。奥野さん」
奥野は顔を強張らせ、何も答えなかった。
「バレたらテレビの企画か何かと誤魔化せばいい――」
私は席を立つと奥野の後に回りこむ。奥野の肩に手を置くと「可愛い娘じゃないですか」と言った。奥野は身を竦める。
「……言い訳するつもりはありません。蓮沼さんに紹介されて、いろいろ相談にのっているうちに、その……。迫ってきたのは向こうなんです。僕は……」
言い訳にもならないことを言う。
奥野の様子が可笑しかった。
「据え膳食わぬは男の恥……いいじゃありませんか」
奥野はすっかり俯いてしまった。
私は自分の名刺をテーブルに置く。
「お気持ちが固まりましたらご連絡ください。これはその時に――」
私はＳＤカードをこれ見よがしに奥野にかざすと、ポケットに入れ、席を立った。

携帯電話ハッキング

私は化粧品の新商品発表記者会見の会場である数寄屋橋にあるホテルに訪れていた。

会場は慌ただしかった。

会場フロアはステージが組み上げられ、会場スタッフが音響や映像器材のチェックを行い、司会者がリハーサルをしている。

入り口近くには、報道関係者が群がっている。

今日取材に訪れているメディア関係者は２００社を越える。

エントランスでは、首から許可証を下げた関係者達が撮影器材をチェックしたり、煙草を吸いながら雑談に耽っている。

また、一般からも観客が三百人招待され、会場入りを待っている。

記者会見は午後四時を予定している。

記者会見にはＣＭのイメージキャラクターを努める芹沢玲香が出席する予定だった。

記者会見の特別プログラムとして、芹沢玲香のトークショーと、さらにＣＭで使用されるタイアップソングをアーティスト本人が生歌で披露する予定となっている。

ゲストと聞こえはいいが、ようは営業だ。広告代理店の連中が考えそうな安い企画だった。パブリシティの為のネタと話題づくりにすぎない。芹沢ほどのランクのタレントが、今だにこんな仕事をさせられている。仕事の内容から察するに、アクティブスターの方針はおそらく芹沢をＣＭやドラマで使えるだけ使いたいという腹だろう。要は消耗品と同じだ。だが世間が飽きたら仕事は無くなる。

今日この場を指定してきたのは奥野だ。

たしかに芹沢が仕事をしている方がデータを持ち出しやすいだろう。

私はエントランスで記者たちに混じり、奥野が来るのを待っていた。手には調査道具が入ったルイヴィトンのアタッシュケースを携

えている。
すでに芹沢は会場入りし、リハーサルを行なっているらしい。
私の横を、大きなダンボールが乗った台車が通り過ぎる。ダンボールにはサンプル品と印されていた。おそらく招待客に渡すプレゼントだ。口コミによる宣伝も行なう腹なのだろう。
私は会見が始まるのを待ちながら、森川のことを考えていた。
森川は瑞貴の言うとおり恋愛感情を抱いていたのだろうか。マネージャーがタレントに手を出すなど御法度もいいところだ。
タレントは商品である。それ以上でもそれ以下でもない。タレントに手を出せば業界での仕事はできなくなる。それを承知で森川は掟を破った。
だが、森川の気持ちが分からないわけではなかった。芸能人という圧倒的に美しい存在を間近に見続けていたら、そこらを歩いているような一般人に興味をなくすのは当然の道理だろう。
芸能人という磁場に引き寄せられた男の悲劇――他人事ではなかった。
芹沢玲香近辺の張り込みはプランとしてあった。
芹沢玲香は目黒区の分譲高級マンションに住んでいる。
私は、芹沢宅への侵入まで考えていた。盗撮の為の盗聴器や隠しカメラの有無を確認したかったからである。もしその類のものがあれば、盗撮器材の線から森川を追うことができるかもしれない。森川のネタというのが盗撮映像であるという確証にもなる。
だが、すぐにその案は打ち消した。
仮に盗撮を慣行したとして、盗撮者が撮影器材をそのままにしておくだろうか。
放置しておけば、第三者に流出する恐れがある。そう考えると、撤去されていると考えるほうが妥当だ。森川も自らが得たものの価値を下げるような真似はしないだろう。
何より私自身が家宅侵入という法を犯すことになる。神山の為にそこまでする必要はない。個人的には芸能人の部屋に興味が無いわ

けではないが、携帯電話の情報を徹底的に洗ったほうが現実的だ。それでも十分にリスクは踏んでいる。
しかし張り込み案を完全に捨てたわけではない。芹沢が恋しくなって、森川が顔を見にくることがある可能性は高い。耐えきれなくなり奴が姿を現す時、奴を捕まえるチャンスでもある。
私には確信がある。なぜならば私も芸能人という磁場に引き寄せられた男の一人だからだ。私自身、今心を引き寄せられている女性がいる。
小川瑞貴は私との食事で、私との距離を決して詰めることはなかった。
自分という存在を崩すことはなかった。私は不覚にもその部分に激しく牽かれていた。
それは神秘性と言い変えることもできる。自分という存在をやたら一般人と変わらないということをアピールしようとする最近の女性タレントとは一画を期す。
もし仕事が無ければ確実に瑞貴をストーキングしているだろう。それ位瑞貴に対しての興味が高まっていた。
森川が所持している記録をもし手に入れたらどうするべきか、という事に考えが移っていた。
換金は難しいだろう。
どこへ持ち込んでも二束三文で買い叩かれるのがオチだ。さすがの私も裏ビデオ業者のような人脈は無い。
芸能事務所に持ち込んだら最後、警察に突き出されるかもしれない。
複製した上で、一本は神山へ提出し、もう一本は手元に置くだろう。
瑞貴への手土産にしてもいい。
だが流出した場合、真っ先に疑いは私に向く。どう考えても、私にとっては爆弾以外の何物でもないようだ。
いずれにしろ、芹沢玲香の携帯電話のデータが大きな進展を齎ら

すことは間違いない。
一方で迷っていた。
芹沢に接触するべきか、否かを――。
神山には釘を差されている。
聞き込みにおいて、最重要関係者に直接聞き込みをするなどご法度である。迂闊に森川のことを尋ねれば芹沢に悟られる可能性がある。
しかし、聞き込みにより相手が重要な事を漏らすかもしれない。
奥野を通して芹沢に接触できるこのチャンスを不意にするのは、得策でないように思えてならない。
「……また遅刻かよ、あの女」
記者たちの会話が聞こえてきた。私は聞き耳を立てた。
「……体調が悪くて遅れたとかスタッフが説明してたけど、絶対遅刻だって……」
芹沢玲香のことらしい。
たしかに業界の間では、芹沢は遅刻魔で有名である。たわいもない悪評だと思っていたが、それはどうやら真実らしい。
「……で、化粧に時間が掛かってるんだろ。何様のつもりかね」
「しょうがねえだろ、天下の玲香様なんだから。誰も文句言えねえよ。セレブだって後ろ盾なんだろ。今日だってセレブの……」
私は苦笑した。芹沢の遅刻の理由の一旦に思えた。芹沢自身この仕事に乗り気ではないようだ。
さえないスーツ姿の男が私に近づいてきた。
奥野だった。体調が悪そうな様子だった。浮かない顔をして、全身からひどく疲労感を漂わせている。まるで病人のようだ。
私はアタッシュケースを手に取る。
「……お待ちしておりましたよ」
私は森川に声をかけた。
「……一緒に来てください」と言う奥野の後を、私は着いていった。

会場内入り口近くと通ると、物々しい雰囲気だった。イヤフォンを装着した会場スタッフ関係者が何人も忙しそうに行き来している。

人の流れに逆らうように、私と奥野は奥へ進む。

「芹沢さんは……？」

私は奥野に尋ねた。

「……もう舞台裏に移動しています」

奥野は言葉少なげだった。私とはあまり会話をしたくない様子だった。

前方に火災報知機があるT字路に達すると、左側に行く手を阻むように「関係者以外立入禁止」という紙が張った立て札があった。つまり楽屋がある方向ということだ。構う事無く、私と奥野は左に折れた。

左奥はいくつも子部屋が連なる所だった。

部屋の扉にはそれぞれ紙が貼られていて、通路の一番奥の扉に、『芹沢玲香様』という紙が貼った部屋があった。

奥野は楽屋の目の前に立ち止まると、カードキーを取り出した。カードリーダーのタッチ部にカードキーを当てようとした時、楽屋のドアが開いた。

一人の女が立っていた。

突然のことに、私は一瞬誰なのか認識できなかった。

白いワンピースを着た長身の女だった。

女は奥野と私を見ると、眉を寄せ険しい表情になる。

「……奥野さん。どこ行ってたの？　みんな探してるわよ」

芹沢玲香だった。

芹沢の声は尖っていた。聞いているだけで、身体が強ばりそうな、険のある物言いだった。

思わぬニヤミスだった。

芹沢にこんな形で出くわすなど、まったく予想していなかった。

私は表には出さないようにしていたが、内心驚き、慌てていた。
「……芹沢さんこそ、どうしたんですか？」
しどろもどろで奥野は言う。
ビクビクされると、怪しまれる。私は横で見ていて冷や冷やした。
「……忘れ物を取りに戻っただけよ」
芹沢の言葉使いから、二人の力関係は如実だった。
すでに芹沢は奥野のことをアゴで使っているようだった。
奥野自身小心者で、気が弱い。
気が強い女ほどそれを見抜き、男をすぐ自分の下に位置付けようとする。芹沢の性分なのだろう。
奥野を見る芹沢の眼は冷たかった。見つめ返すだけで、凍り付き身を引き千切られるような視線だった。現に奥野は芹沢と目を会わせようとはしない。
芹沢玲香を間直で見ることになるとは思いもよらなかった。
美しい――そして、瑞貴とは比べものにならないくらい強いオーラを放っている。人々に注目と称賛を毎日のように浴びた結果だろうか。今もっとも勢いのある女性タレントだけのことはある。
ワンピースは象牙色で、清純さを演出するような装いだった。髪は大人の女の可愛いらしさを引き出すようセットされている。高そうなジュエリーを身につけ、着飾っている。
メイクやスタイリストなど何人もの手が加わり、作り出されたものだろう。時間を掛け作り上げただけのことはある。
他を魅了する美貌に異論は無い。
だが、私はすぐにその美に潜む不自然さに気が付いた。
あまりに完璧すぎた。芹沢のフェイスには欠点というものが無い。
とくに切れ長の瞳は化粧で強調されてはいるが、それを差し引いても、不自然すぎるほど、鋭角的でくっきりしている。メスを入れた事は明白だった。
与えられたものに満足せず、飽くなき美の追求。人工美の極致だった。

それは芹沢玲香の貪欲さを如実に表していた。
いつしか、芹沢は無言で私を見つめていた。敵意のある視線であった。
私は思わず怯みそうになる。女一人に対して、だ。

私を値踏みしている……反射的にそう思った。
被害妄想かもしれない。だが、その視線は初対面の人間に対し、あまりに不躾であった。
私は芹沢玲香の人間性を瞬時に見た気がした。
「……ああ、ご紹介遅れました。私、奥野さんと以前お仕事を一緒にさせていただいた前田と申します」
感情的な反応を抑えこみ、私は別の人間を演じていた。
演技力と会話力こそ探偵術の基本中の基本だ。
豪胆ではないが、場数は踏んでいる。突発的な出来事に対する危機対処能力は低いほうではない。
私が演じたキャラは、岡田をベースにしたものだった。
動悸を意志で抑えつつ、次に紡ぐ言葉を必死に検索し、用意する。
芹沢の言葉次第だった。
芹沢からの返答は無かった。
興味がないのか、関心がないのか、腕を組みながら露骨に迷惑そうな顔をしている。
自分にとって利にならない人間には相手にしないらしい。
そう判断されたのだ。
屈辱だった。
そして、芹沢の周囲の悪評をこの身で実感していた。この短時間の間に私の芹沢に対する感情は最悪のものと化していた。
瑞貴の憎しみが、実感を伴って理解できた。
事実、目の前の女に殺意に似たものを覚えつつあった。
「今日、偶然に奥野さんとお会いして、仕事でご相談したいことがありまして。芹沢さんにもご挨拶しようと……」

私の並べたその場限り嘘の言葉に、芹沢は相変わらず答えない。
「……あまり、人に聞かれたくない話なので楽屋をお借りしてもよろしいですか？」
ささやかな抵抗だった。
私を見る芹沢の眼が、汚物を眺めるようなものに変化していた。
視線には私から奥野に移る。だが、断ることもなかった。
「忙しんだからさあ……。あまりイライラさせないでよね」
そう言い放つと、芹沢はステージの方へ向かって行った。
芹沢の一言は奥野を萎縮させるのに十分だった。奥野は落ち着きを失い、意気消沈している。
傍で見ていて、奥野が気の毒だった。仕事とはいえ、男の自尊心をここまで傷つける必要があるのだろうか。まして奥野は仕事仲間である。
勤め人とは給料の為にこうも蔑まければならないのか。
「大変ですね」と私は奥野に同情の意を示した。
「……ええ」
奥野は歪んだ笑みで答えると、ドアを開けた。誰も入ってこないよう、ドアをロックした。

芹沢一人で使うには十二分に広い楽屋だった。
複数の人間が使用できる、壁一面鏡張りのドレッサーの上は化粧道具が散乱していた。
楽屋中央にはテーブルと椅子がある。
テーブルにはスタッフの差し入れなのか、五〇〇ミリリットルサイズのミネラルウォーターのペットボトルや弁当、軽食用のお菓子、アルミの灰皿、そして芹沢の私物と思われるバックが形を崩して置かれてある。今流行のバレンシアガのエディターズバックだった。
灰皿を見たとたん、私は芹沢が楽屋に戻った理由がわかった。
灰皿には押しつぶされた煙草が数本、灰と共に捨てられていた。

吸殻の吸い口には口紅が付着している。手を翳すと、微かに熱を放っていた。
「……芹沢さんは煙草をお吸いになるんですか？」
私の問いに奥野は返答に詰まっていた。その反応で十分だった。
一般人ならともかく、タレントが喫煙者などマイナスイメージの何物でもない。
私は持参したアタッシュケースをテーブルに置くと、奥野は「見張っていてください」と指示を出した。
奥野がドアの前に立つと、私はアタッシュケースの止め金を外し、開く。
バックから取り出したのは手袋だった。
手術用のラテックスゴム製である。指紋を残さない為のものだ。
手袋を填めながら、私はすでに軽い興奮状態にあった。
芹沢玲香のバックに近付き、中を見た。財布や化粧道具などの私物が入っているのが見える。
私は手をつっこみ、バックの中身をテーブルの上に出していく。奥野が反射的に私を止めようとしたが、諦めたのか、すぐに固まった。
目的の品である携帯電話があった。真っ白なボディの携帯電話だった。ストラップはブランド物のストラップが付けられている。
さすがに電話を仕事中持ち歩くような非常識な真似はしないらしい。
私は携帯電話を開く。すぐに液晶モニターが点灯し、待ち受け画面を映し出す。携帯電話はロックはされていなかった。この辺の脇の甘さが、今回の事態を招いた要因に思えた。
「……早くしてください」
奥野が私を急かす。
「すぐに済みますよ」
苛立たしげに言うと、私はアタッシュケースからノートパソコンとデータ通信用ケーブルを取出した。パソコンを開き、電源を入れ

る。
パソコンが立ち上げると、ケーブルを芹沢玲香の携帯電話とパソコンに繋ぎ、パソコン側のソフトをクリックする。
携帯電話編集ソフトだ。電話番号、メール、着信履歴など携帯電話内に存在するデータを根こそぎコピーできる。編集ソフト以外にも私のモバイルには調査用のソフトウェアが各種インストールされている。
私は全てのデータのバックアップを選ぶと、実行をクリックする。暗証番号を解読する必要も無かった。
タスクバーが展開し、芹沢の携帯電話のメールや画像、電話番号などのデータを次から次とコピーしていく。
私は近くのパイプ椅子を引き寄せ座わると、作業が終わるのを待った。
芹沢との先程のやりとりを思い出し、私は苦笑すると、「さっきは驚きましたね」と奥野に声をかけた。
「……ええ」と、奥野も苦笑いを浮かべる。
「悪いことはできませんね」
私の皮肉に、奥野は困ったように笑った。
「芹沢さんは寝起きは悪い方なんですか……？」
私は奥野に尋ねた。
「ああ、ええ……」
奥野はあっさり認めた。
「……彼女は朝は弱くて、ほんと起こすのが大変なんですよ」
奥野が疲れ切っている理由がなんとなく分かった。
「連れてくるのが大変でした。下手をすれば、仕事をすっぽかすとこでした。本当森川さんには頭が下がりますよ……」
奥野は聞いてもいないことを自分から言った。よほど私に同情してもらいたいらしい。
人は得てして、仕事の不満を誰かに聞いてほしいものである。
パソコンを見ると画面には作業終了を告げるウインドウが表示さ

れていた。
作業が終わると、私はパソコンをシャットダウンし、アタッシュケースに入れた。
奥野の顔は安堵の色を見せていた。
「奥野さん、ありがとうございました」
手袋を外し、パソコンとケーブルをアタッシュケースに終いながら、私は言った。スーツのポケットに手をつっこみ、SDカードを手に取ると、「お約束の物です」と奥野に放り投げた。
奥野は不様なくらいに、SDカードに飛び付いた。
「……ご存じですか。キャバ嬢の彼女ですが、セレブ系列のタレント養成所に通う娘ですよ」
私は奥野に言った。
「えっ！？」
「気をつけた方がいい」
奥野は私の言葉が理解できていないようだった。
「サービスで、彼女が養成所に通う画像も入れておきました。ご確認ください」
奥野は何かを言いたそうだったが、それを聞く事無く、私は楽屋を後にした。

会場を出ると、私は車を停めてある地下駐車上に向かった。
コピーした芹沢のデータを徹底的に洗う為、まっすぐ部屋へ帰るつもりだった。これで調査が一気に進展するという期待が、私の中で高まっていた。
空振りかもしれない。過剰な期待は決まって後で大きな失意を招く。だが、私は興奮を抑えられなかった。
また、仕事とはまったく関係ないが、芸能人の秘密に迫れるという個人的な楽しみもあった。彼らの私生活を垣間見ることは、何度体験しても、飽くことはない。
アタッシュケースを地面に置き、車の鍵を取り出そうとした時、

「すみません」と背後から声を掛けられた。
振り向くと、二人の男が立っていた。
身長はどちらも一八〇センチ前後の長身で、ダークスーツを着ている。肩幅が広くて、冗談が通じないような剣呑な雰囲気を放っていた。
嫌な予感がよぎった。
二人の男はがっちりと私の肩と腕を掴んだ。キーケースが地面に落ちる。
「騒ぐなよ」と男が私の耳元で囁くと、腹部に衝撃が来た。
右の男が私に拳を捻り込んでいた。呼吸が停まった。胃が痙攣する。足が震えた。
呼吸が滞り、息が上手く吸えなかった。
武器を何も装備していないことを悔いた。私は膝を屈すると、今度は左から膝蹴りが襲ってきた。再び胃にダメージを喰らうと、私の記憶が蘇った。
セレブの創立パーティーの際、私がシュアファイアで目を灼いた男に間違いなかった。
その時の恨みを晴らすことができたからなのか、男には笑みが浮かんでいた。
ブレーキ音を上げ、車が私の真横に急停車する。
ミニヴァンだった。
横付けされたミニヴァン後部座席右側のスライドドアが開くと、男達は私を無理やり立たせ、ドアの奥に押し込んだ。
車の中に入ったとたん、首筋に冷たく堅いものを押し当てられると、全身に電流が走った。
スタンガンだと理解する間もなく、私は意識を失った。

拉致暴行

目を開いても何も見えなかった。
目隠しをされ、手足も動かない。粘着テープのようなもので拘束されて、椅子に座らされている。
口にもテープを貼られているようだ。
何処なのだろうか。
体に力が入らない。混濁する意識が私の思考の働きを奪っていた。
突然、目隠しを取られた。口のガムテープも剥がされる。
淡い光が、私の眼を苛む。
徐々に眼が光に慣れるにつれ、自分の状況を理解していった。そして恐怖心が膨れ上がっていく。
私のいる所は、はさほど広くない部屋で、薄暗い照明が灯っている。打ちっぱなしの壁に、目の前にはダークスーツに身を包んだ男が数人いた。
体温が低そうな、感情のコントロールが完全にでき、数々の修羅場を潜っている。そんな空気を醸し出している。やくざのようなチンピラではない。完全に統制がとれている。身体の良さから、格闘技経験があるのかもしれない。
そんな中で一人の中年の男が居た。
闇金の追込み屋、暴力団関係、はたまた総会屋というような裏社会の側にいる人間の雰囲気を漂わせている。
「――曽根崎だ」
曽根崎と名乗った男は、私の目の前に名刺を突き出した。
名刺を見ると、私は一気に全身が冷えた。
名刺には役職のようなものは入っていない。だが、会社名ははっきりと入っている。
『セレブ』と。
曽根崎は名刺を引っ込める。

「名前は……？」
曽根崎は尋ねる。
「……根津と申します」
私は咄嗟のことで敬語で答えていた。混乱しそうになる自分を必死に抑えながら、冷静でいるよう努めた。
「……お前、森川隆の居場所を探しているな？」
曽根崎が尋ねてきた。
「……誰ですか。それは？」
私が惚けると、曽根崎は笑った。だが目の奥は笑っていない。
曽根崎は懐から煙草を取り出すと火を付ける。暗い部屋の中で煙草の火が赤く浮かび上がった。
「……隠さなくていい。奥野から話は聞いている。おそらく依頼人は」
曽根崎は一旦、言葉を切った。
私を焦らすように、曽根崎は次の言葉を中々言わない。
「……芸翔の神山だな？」
「違います」
私は否定した。依頼人の名を吐いたなどと業界中に知れ渡れば、今後の私の信用問題に関わる。
曽根崎はスーツのポケットから携帯電話を出すと、名刺と同じく私の前に突き付ける。
心臓が跳ね上がった。
私の携帯だった。
曽根崎は私の携帯を操作すると、再び画面を見せる。画面には神山という名前とともに神山の電話番号とメールアドレスが表示されている。
「……何なら、ここで神山本人に電話してみるか？」
「どうぞ御自由に」
私は憎まれ口を叩いた。
「――あくまでしらを切るか」

曽根崎が尋ねてきた。
口調はゆっくりと、問い詰めるように言う。
相当尋問慣れしているように見えた。表情から何も読み取ることはできない。
怯えを悟られれば、曽根崎は一気に襲いかかってくるだろう。
緊張で胃液が逆流しそうになる中、私は曽根崎の次の言葉を待っていた。
曽根崎は無言で私を見ている。私の粗を探すような様子だ。
矛盾と齟齬を曝せば、そこを容赦なく突いてくる。恐喝と恫喝を商売とする連中の手だ。
曽根崎は煙草を取り出し、火を点ける。
煙草を吸い、煙を吐き出すと、「お前が今受けている仕事の調査結果だが、我々が芸翔が提示する金額の二倍で買い取ると言ったらどうする？」と尋ねてきた。
「美味しいですね」
私は適当に答えた。曽根崎の提案を本気にしなかった。というより、検証する余裕は今の私には無かった。
私の答えに曽根崎の表情が変化する。
空気が張り詰める。
まるで収めていた刃を鞘から抜いたような印象だった。私の言葉が曽根崎の神経を刺激したようだ。
曽根崎は本性を徐々に現わしつつある。私を品定めするかの如く、私を睨めつける。
本能が危険を敏感に感じ取ると、私は逃走経路の確認を無意識に行なっていた。
すべて無駄な行為だった。
「――少しは、真面目に答えろ」
そう言うと、曽根崎はじっと私を見据える。
曽根崎の視線はまるで刃だった。
刃は喉元に突き付けられた。

いつでも首を落せる。私は、そんな錯覚に襲われた。
精神と心理戦の鍔迫り合いだった。
「いい話ですが、お断わりします」
私は答えた。
「……依頼人に義理立てるほど、生き方にこだわっているわけではないだろう」
曽根崎の今の言葉は聞き捨てならなかった。
冗談ではなかった。
私を世間の消費者という名の馬鹿どもと一緒にされては困る。衣服、仕事、思想、趣味、あらゆるものにこだわりがあり、こだわっている。
だからこそ探偵業も芸能関係に限定しているのだ。
曽根崎の言葉は私を大いに刺激した。目の前の男への態度も硬化する。恐怖に慣れはじめたのか余裕が生まれてきた。
「私の方からも聞いてよろしいでしょうか？」
今度は私から仕掛ける。
「何だ？」
「何故、セレブは森川という男を捜しているんですか？」
「……そんなことを聞いてどうする？」
「個人的な興味ですよ。芸能界は魑魅魍魎が跳梁跋扈している」
曽根崎は眼を細め、不快さを顕にする。
「上の指示で動いているだけだ。事情は知らん」
「使いっぱしりですか」
私は、しまったと思った。
曽根崎の眉間に皺が寄った。
斬られる――そう思った瞬間、曽根崎は吸っていた煙草を私の手の甲に押しつけた。
肉が焼ける音と共に私は絶叫していた。
痛みから逃げるように椅子から転げ落ちる。
まるでバラエティー番組で繰り広げられるような三流芸人の安い

リアクションだった。
男たちから笑い声が聞こえる。屈辱的だった。
「――適当に痛み付けてやれ。適当に、な」
曽根崎の冷たい声が響く。
私の背筋が一気に冷えた。
男達の動きは速かった。
下腹部に衝撃が訪れた。全身が痺れた。
次に別の男の足の爪先が腹にめり込む。重い蹴だった。
声が出ない。
私は蹲る。まるで赤子のように手足を竦めていた。
腹を踏み付けられた。
胃の中の物がすべて逆流しそうになる。息ができない。
玩ぶように、次々と蹴が飛び、靴底が私を踏み付ける。
リンチが続く中、私は涙を流していた。恐怖と痛みで、子供のように泣きじゃくっていた。許しを請いたかった。
リンチが止んだ。
しばらく咳き込む。
私の髪を掴み、持ち上げると曽根崎は顔を近付けた。
「今日はこれくらいにしておいてやる。だが……」
曽根崎は私を床に叩きつけた。
「次は無いぞ」
そう言うと曽根崎は私の髪から手を離し、身を翻し去った。曽根崎が離れていく姿が霞んで見えた。
助かったという安堵で私で全身の緊張が解ける。
いや、見逃してもらったという言い方の方が正しいだろう。失禁や脱糞をしなかっただけがせめても救いだった。
身体が弛緩している中、再び目隠しされた。
強い力が腕を引っ張る。
もはや私には抵抗する気力すらない。されるがままだった。
首筋に小さな痛みを覚える。何か薬物を注射されている。

酩酊する意識は渦を巻き、私を一気に闇の中に引きずり込んだ。

救出

頭が痛かった。ひどく深酒したときのような状態だった。
重い瞼を意志でこじ開けると、座っているのは助手席だった。私の車の中だった。窓の外を見ると、昨日私が拉致された地下駐車所内だった。
何を注射されたのか、分からない――肉体的なダメージもさることながら、精神面を完膚無きまでに打ちのめされていた。
なんとか車は運転できる。口の中が切れているのか、ジクジク痛む。体のあちこちも熱を帯び、疼いている。
脅しや恐喝を受けたことは二度三度ではないが、ここまで暴力を行使され、ねじ伏せられるなど私の人生ではなかった。
車の時計を見ると、午後二時を回っている。
時間が経つと供に屈辱感が募る。血が逆流するほど悔しかった。
運転席を見るとアタッシュケースとノートパソコン、携帯電話が置かれていた。私はモニターを起こし、パソコンの電源を入れた。
編集ソフトを立ち上げると芹沢玲香の携帯電話の全データは消去されていた。
いや、消去されたというよりデータを奪われたと考えるのが妥当だ。
精神的にも肉体的にも疲れ切っているのに、痛みと悔しさが眠りに入ることを妨げる。そして、こんな眼にあった原因をつくった奥野を恨んだ。
逆恨みだとはわかっている。だが、納得がいかなかった。なぜ自分がこんな目に遭うのか、意味が分からなかった。
崩れそうな精神をやっとの思いで支えながら、今何をするべきなのか、何をしなければならないのかを私は必死に考えた。思考の鈍さがもどかしかった。

自分の間抜けさと運の無さを呪っていた。
奥野を攻めすぎたのも、原因の一つだ。
ここから移動しなければならないが、その前に確認作業を行なわなくてはならない。
慎重と臆病に勝るプロの仕事は無し、だ。
二度とミスは許されない。
臆病に、用心深く、静かに、そして執念深く、だ。
負傷した体を引きずりながら私は車から出ると、車の後部へ移動した。
バンパーの裏を手で探ると四角い金属物のような感触に突き当たった。接着が強力で外すのにてこずりながら、やっとの思いで取り外し、金属物を確認する。
ＧＰＳ発信機だった。強力磁石により車体に接着し、電波を発進するタイプだ。
怒りと不愉快さがないまぜになる。
こんなものを付けられては、私の行動が筒抜けだ。私をわざと泳がせ、依頼主を割り出すつもりだろう。舐めた真似をする。私は発信機を地面に叩きつけた。
車体番号から私の個人情報も抜かれていると考えるのが、妥当だろう。敵は予想以上に厄介だと実感する。
トランクやグローブボックス、後部座席など盗聴器の存在を一通りチェックしながら、私は次の行動はどうするか、頭を巡らした。
自宅部屋には戻らないほうが良いと判断した。
しばらくは身を隠した方がいいかもしれない。
運転席に座りながら私は、神山の保護を求めるか逡巡した。依頼人に保護を求めることはともかくとして、報告の義務はあるかもしれない。
瑞貴のことが頭を過る。とたんに不安になった。瑞貴と私の関係がセレブ側に漏れているだろう。携帯電話には幸い『小川』という名で登録されている。だが、曽根崎は私の関係者に片っ端から聞き

込みを掛けるかもしれない。
仮に神山に相談したとして、私はともかく瑞貴まで保護の対象としてくれるかどうか怪しい。いずれにしろ瑞貴に警告を促す必要がある。
私はともかく、瑞貴は守らねばならない。
周りの足場がどんどん崩れていく感覚に襲われながら、私は瑞貴に電話をした。
いや、会話することで誰かに縋りたかったというのが本音だろう。
携帯を取り出し、瑞貴に発信する。
――はい。
瑞貴はすぐに電話に出た。
「曽根崎という男が私の前に現われました。セレブの人間です」
返答がない。しばらく無言が続く。聞こえているのだろうか。
「御存じですか……？」
――いいえ。
瑞貴の反応が悪かった。
――……でも顔を見れば多分わかると思います。
瑞貴の声に精彩を欠いていた。
前回にも増して、元気が無い。どこかささくれだっていて、気力というものが無く、倦怠感が漂っている。蓮沼に何かされたのだろうか。
腹部が痛む。気力が萎えそうになる。
「仕事でヘマをしました。向こうに私達の関係が伝わった可能性が高い」
痛みに耐えながら、言い訳にもならないことを私は言った。
――……大丈夫ですか？　息が荒いようですけど……？
瑞貴の問いに、私は言葉を詰まらせた。
――……何かあったんですか？
「……なんでもありません」
自分の心と身体の状態を見透かされた気がした。私は急に恥ずか

しくなった。
――そちらに向かいましょうか……？
瑞貴の言葉に縋りそうになる。
「……相手は手段は選ばない連中です。私とあなたの関係とのバレれば、貴方に害が及ぶ。今の私には貴方を守る自信が無い」
――……何かあったんですね？
瑞貴の察しの良さに、私は観念した。
――直ぐにそこに行きます。
「待ってください……！」
私は瑞貴を制止した。
ここに直接来てもらう訳には行かなかった。
我々の関係を知ってくださいと敵に教えるようなものだ。
「……分かりました。どこかで落ち合いましょう。でも、こちらの安全を確認した上でもう一度電話します」
――必ず電話くださいね。
と言うと、電話が切れた。
瑞貴の対応が嬉しかった。言葉では強がっていながら、安堵している自分が居ることに苦笑した。瑞貴の善意を無にしてはならない。
私は痛みに耐えながら、車を移動させるためにキーを回した。

私は車の後部座席で横になっていた。痛みが確実に私を苛む。眠りに入ることを一行に許さない。
胎児のように手足を縮めながら、瑞貴の訪れを待っていた。
何度もUターンを行い尾行確認をしながら、移動し、どこで出会うのが最適かを考えた結果、私が指定した場所は新宿サブナードにある地下駐車場だった。
叩きつけた発信機は別の車両に取り付けた。多少の時間稼ぎにはなるだろう。
瑞貴が来てくれることが今の私の最後の希望だった。時間の歩み

は緩慢だった。体の痛みが時間と共に増していく。
頭上の上でガラスをコツコツと叩く音が聞こえた。私はドアノブに手を掛け、ドアを開ける。
手に力が入らない。
瑞貴だった。
「どうしたんですか……！？」
私を見るなり、瑞貴は驚きの声を上げた。
「すみません」
私は咄嗟的に謝っていた。
「セレブにやられました……」
私の言葉に、瑞貴の表情が曇る。
瑞貴はレザーのアウターにレザーのスカートを着ていていた。
スタイルのいい瑞貴には、よく似合っていた。
「病院に行った方が……」
「……大丈夫です」
荒い息をしながら、私は拒否した。息をするたびに、脇腹が痛む。
もしかしらアバラをやられているかもしれない。
瑞貴はいったん車から出ると運転席を開ける。席に座ると、瑞貴は「……ともかく、わたしの部屋に行きましょう」と言った。
「……それは駄目だ」
私は即座に拒否した。
「だからって、貴方の部屋にはいけないでしょう……？」
反論できない。代案も浮かばない。
「……わかりました。甘えさせてもらいます」
私は観念した。
瑞貴はバックミラー越しに私を見ると、車を動かした。

瑞貴の運転は危なっかしかった。決して上手いとはいえない運転技術だが、私に不安はなかった。

瑞貴と会えたことの方が、むしろ私の心に安堵感をもたらしていた。
私は後部座席で尾行車両を確認しながら、何度も角を曲がり尾行確認をさせた。
人目を避けるために夜まで待った。瑞貴宅に着くまで私は眠ることはなかった。
瑞貴の自宅は吉祥寺にある。
車をマンション近くのパーキングエリアに止める。車から出ると瑞貴に支えながら、私は瑞貴のマンションに入っていった。
幸い瑞貴の部屋に着くまで、マンション住民と誰とも会うことはなかった。
瑞貴が鍵を開け、部屋の扉を開けると香りが飛び込んできた。瑞貴の匂いだった。玄関で靴を捨てるように脱ぎ、中に入る。
瑞貴が壁にあるスイッチを入れると、部屋に灯が点った。
通された部屋は寝室だった。ベットまで運ばれると私は瑞貴からずり落ちるようにベットに傾れ込んだ。
限界だった。
ベットからは瑞貴の体臭が仄かに漂う。身体は痛みで苛まれているのに、私の心は徐々に落ち着いていった。
瑞貴は一旦寝室を出て、再び救急箱を持って部屋に戻ってくると、私の傍らに膝を折った。
「上着を脱げますか？」
瑞貴の言葉に、私は服を脱ぐ。
身体を捩る度に、痛みが走る。
服を脱ぐのも苦痛だった。不様なまでに、身悶えながらジャケットの袖から手を抜き、瑞貴に手伝ってもらい、やっとのことで上半身裸になる。
青痣だらけの腹部に、瑞貴は大きく目を見開いた。
瑞貴に優しくされている内に私の中で惨めさが募る。心が折れそうだった。

「抱き締めてもらえませんか」
私は瑞貴に大それた事を口にしていた。
瑞貴はまったく迷う事無く私を抱きしめた。華奢で細い腕が絡み、見た目よりもずっとふくよかな胸が私の顔に押しつけられ、甘い匂いが私を包む。
優しさが欲しかった。女の肉の柔らかさが実感として欲しかった。
金で買ったものではなく、無償のものを――。
私の要求に応えてくれた瑞貴に心の底から感謝していた。
「……落ち着きました？」
私を抱きながら、瑞貴が尋ねる。まるで母親のような優しさに満ちていた。
「ええ」
私は瑞貴の腕の中で頷くと、瑞貴は私から離れた。救急箱を開け湿布を取り出す。まるで私の負傷箇所が分かるのか適切に湿布を貼っていく。
湿布を貼り終えると、瑞貴はテープで湿布を固定し、包帯を私に巻いていく。
「……ご用意がいいんですね」
私は瑞貴の治療を褒めていた。
「意外に生傷が絶えない仕事だから……。病気になっても病院に簡単には行けませんし……」
湿布の匂いに頭が刺激されたのか、私は瑞貴との電話を思い出していた。
「……この前何を言おうとしたんですか？」
私の問いに瑞貴の腕が止まる。
瑞貴は私を見る。
今日出会って初めて彼女の目を見たような気がした。
瑞貴は無言だった。今にも泣きだしそうな哀しい眼をしていた。
「事務所――」
瑞貴が呟いた。

危うく聞き逃すほど、低い声だった。
「はい？」
「ついに契約の更新を打ち切られました――」
頭を不意に殴られたような思いだった。
「……クビです」
突然のことに言葉もなかった。
「なんと言ってよいやら……」
私の言葉に瑞貴は苦笑する。
「……こうなることは、予想してました。前々から仄めかされてました。会社を守るために私を切ったんです。……仕方の無いことです」
瑞貴をよく見ると頬の当りの肌がひどく荒れている。
ここ数日の瑞貴の精神状態を物語っていた。
「申し訳ありませんでした。お役に立てなくて……」
「なんで根津さんが謝るんですか……？」
瑞貴は笑いながら言った。その通りだった。
何もしてやれない癖に傲慢だった。
「……フリーの身です。根津さんと同じですね」
瑞貴の痛々しい冗談に、私は笑うしかなかった。
かける言葉が無いとはこのことだった。
何を言えばいいのかわからない。女を楽しませるのは、決して不得意ではないが、こういう場面は苦手だった。怪我など言い訳にもならない。
言葉を探していると、「少し眠ったほうがいいですね」と瑞貴は私を宥めるように言った。
「……眠るまでここに居てもらえませんか」
私はまたも甘ったれた頼み事をした。
瑞貴は微笑すると、私の手を握る。
私は何か言おうとしたが、諦め、眼を閉じた。

安心によるものか、眠りはすぐに訪れた。

復讐への誓い

目が覚めると身体の痛みはより酷くなっていた。
やっとのことで身体を起こす。ギシギシの身体を引きずりながら、私は瑞貴の姿を求めていた。
寝室を出てリビングに入ると、瑞貴がテレビを食い入るように見ていた。
「……ああ、起きたんですか？」
私に気が付くと瑞貴は、立ち上がり近付く。
壁の時計を見ると、まだ朝の7時を回った位だった。
「まだ、寝ていたほうが……」
瑞貴が心配そうに言う。
「いえ、大丈夫です」
痛みで二度寝は無理らしい。私は瑞貴の向かいへ回り、ダイニングテーブルの椅子にやっとのことで腰を下ろした。まるで老人のようだ。
瑞貴は、Tシャツにスエットのズボンを履いていた。
コンタクトではなく、眼鏡を掛け、髪を後ろで縛っている。普段着の瑞貴も、魅力的だった。
「お腹すいていませんか？」
「ああ……ええ」
食欲は無かった。にもかかわらず、私ははっきりと断らなかった。
瑞貴の心遣いを無下にはしたくなかった。
「何か作りますね」
瑞貴は立ち上がりキッチンに向かった。
私は瑞貴が腰掛けていた椅子を見た。ソファーには毛布が置かれている。
私に寝室を譲り、瑞貴はソファーで夜を明かしたことを知り、気が引けた。

オートロックに、来訪者確認用のモニター付きインターフォンと、セキュリティシステムは万全のようだ。１ＬＤＫらしく、部屋の中は掃除は行き届いていて、きちんと片付けられてる。フローリングの床は塵一つない所からも瑞貴の性格が伺える。

テレビなどのＡＶ機器が充実している。映画のＤＶＤが重ねて置かれ、意外にもテレビゲーム機器がある。

棚には化粧道具や香水と供にダイエットサプリメントの壜や缶、箱が並んでいる。

壁には時計の他にリトグラフが飾られている。

芸能人というより一人暮らしのＯＬのような部屋だった。

部屋の隅には観葉植物と共に全身が映るような大きな姿見の鏡がある。ペットや男の匂いのするようなものはない。

この部屋で奇妙な部分が一つあった。

カーテンが完全に閉めきられている。光が遮られ、まったく入ってこない。

まるで瑞貴の心を象徴しているかのようだ。

キッチンでは瑞貴が冷蔵庫の中を確認している。

水回りは充実していて、調理器具揃っている。料理は得意そうだ。

瑞貴が奏でる包丁の音を聞きながら、私はテレビを見た。

ニュース番組だった。

昨日の化粧会社の新製品発表の記者会見イベントの様子だった。

芹沢玲香だった。

自社の新製品である口紅を手に持ち、フラッシュを浴びている。

アルカイック・スマイルを浮かべ、商品をアピールしていた。画面には映らない記者たちに、めいいっぱい振り撒いている。

たった数十時間前の出来事だった。

あの後、私は地獄の落し穴へはまりこんだのだ。

曽根崎から受けた暴行行為が、本当に昨日の出来事だったのか、まるで昔の記憶のようなどこか不鮮明で、現実感がなかった。

おそらくだが、あまりの恐怖と痛みとの記憶の為に、脳が完全に

再現を拒否しているのだろう。
だが対照的に、芹沢との邂逅の記憶は私にとって鮮明すぎた。
昨日まじかで見た、性悪さは微塵もない。
白いワンピースを纏い、清純さをアピールしている。
とんだ道化だった。でなければ茶番だ。
テレビというフィルターで芹沢の存在感を適度に抑制してくれる。
やはり芹沢玲香は向こう側の人間なのだ。
だが、真実を見た私にはモニターの芹沢玲香がが美しさを通り越してひどく醜悪に見えた。
瑞貴が料理を運んできた。
お粥だった。気遣いに涙が出る思いだった。
スプーンを取り、私は粥を啜った。短時間で作った割には、美味かった。
顔への攻撃は無かった為、口に入れることはできるが、胃はまだ焼けるように熱い。
瑞貴は向かい側に座るとテレビに眼を向ける。
テレビでは放送時間を稼ぐ為に、芹沢のネタをリピートしている。
瑞貴の横顔は能面のようだった。冷静を装ってはいるが、内心は穏やかではないだろう。
痛みと気まずさでますます食欲は失せていくが、私はお粥に手を付けた。
煙草を押しつけられできた手の火傷が疼き、スプーンを落としそうになった。
さすがに完食はできなかった。瑞貴に悪いとい思いつつも、私は皿に粥を残し、スプーンをテーブルに置いた。
「どこか遊びにでもいきませんか？」
私は瑞貴を誘っていた。
一拍置くと、「そんな身体で……ですか？」と呆れたように瑞貴は言った。
「お互いに今必要なのは、気晴らしのようだ」

自分を労わることより、まず瑞貴を元気づけたかった。
瑞貴は苦笑すると、「お気を使わなくて結構ですよ」と言った。
「……一般人の誘いに芸能人の方はやはり乗っていただけませんか？」
「そんな意味で言ったんじゃありません」
瑞貴は否定する。
冴えない顔だった。瑞貴の悲しそうな顔を見るのは忍びない。
「……それにわたし、芸能人じゃ有りませんから」
「じゃあ、一般人同志、大手を振って表を歩けますね」
私の言葉に瑞貴は一瞬きょとんとすると、吹き出した。
「わかりました」
瑞貴は観念したように言った。
「実は観たい映画があるんです。付き合ってもらえますか？」
「……映画か。いいですね」
私は瑞貴の提案に同意していた。
嫌な現実を忘れるには、物語に浸るのが一番いい方法かもしれない。
私はテレビに映る芹沢玲香を見た。
はっきりとした憎悪を自らの内に意識していた。

私たちは有楽町を訪れていた。
車を映画館近くの地下駐車場に停めると、有楽町マリオンへ向かった。
瑞貴は黒のニットにグレーのスカートで、白いコートを纏っている。
眼鏡は掛けず、コンタクト姿である。
瑞貴が見たかった映画は、今話題のサスペンス巨編だった。商業主義におかされていない作家性の高い作品で、こういうものを選択する瑞貴の趣味の良さが伺えた。

映画を見終わると、私と瑞貴は銀座の町を歩き回った。
瑞貴と一緒にいると、身体の痛みも苦ではなかった。
それくらい楽しかった。えりとのデートなど、比ではなかった
高級宝飾店やブティック、百貨店、デパ地下、スイーツ店など銀座をすっかり満喫し、気が付けば、すっかり夕方になっていた。
楽しい時間はあっという間に過ぎていく。
私と瑞貴はマロニエゲートの一一階にあるイタリアンレストランで、夕食を取ることにした。
食欲はなかった。
だが、今食事を取らないのは曽根崎に負けを認めるような気がしてならなかった。
無理やりでも食物を胃に入れるつもりだった。
夜景をバックに、オーダーした料理を口に運ぶ。
前菜のサラダ、ミートソースとジャガイモのラザニア、パルミジャーノチーズリゾット、和牛のロースとこんな状態でなければ、最高のデートとなっただろう。
怪我を負っているのが、口惜しかった。
瑞貴も私に付き合ってくれているといった感じだった。
「……最近、よく映画や舞台をよく見に行くんです」
前菜のサラダをフォークで突きながら瑞貴は言った。
「……グラビアをやっているとそういう欲求が強くなってくる。声や音もなく、ポーズや表情でいろんなことを表現しなければならない。そういったものが形になると、もっと別の形で自分を表現したくなる。ドラマとか映画とか演技の仕事がすっごく眩しく見えるんです」
わたしはラザニアを食べながら聞いていた。
普段はクールな瑞貴が熱っぽく語る姿はとても新鮮だった。
「どんな映画がお好きなんですか？」
私は熱くなっている瑞貴を冷やさないよう、たわいもない質問を投げ掛けた。

「今日見たようなものかな。ハリウットのような大作はどうも苦手で……面白かったですか？」
「ええ。とても」
本心だった。私自身ハリウットのような商業作品はデートで付き合うことはあっても、一人では決して観ない。
映画の話題が一段落すると、瑞貴は「……蓮沼の方ですけど」と切り出してきた。
私は座りを直す。
「食事の約束を取り付けました」
「……本当ですか？」
私の言葉に、瑞貴は力強く頷いた。
「電話を掛けたら、最初は凄く嫌がられたんですけど、森川の名を出したとたん、態度が一変して……。一端電話を切って、散々焦らして向こうから電話が掛かってくるのを待ったんです。誰から聞いたって散々問い詰められましたけど、その辺はうまく誤魔化しておきました」
「有難うございました。正直駄目だと思っていました」
私は礼を言った。
「少し不愉快なことを聞いてもよろしいですか？」
「蓮沼に擦り寄って、セレブにでも移籍するんですか、とか？」
尋ねたかったことを先に言われ、私は少々面食らった。
私は「はい」と頷くと、瑞貴は困ったように微笑する。
「ありえません。そういうのはもう……」
「……そうですか」
嘘は言っていないようだ。私は安心した。
「それに蓮沼の性格はよく知っています。約束を守るような人でもないし……」
「……蓮沼氏を怒らせてしまった。それが仕事を干された原因ですか？」
私の問いに答えずに瑞貴は外を見る。

私も外の景色を見た。
陳腐な表現だが、眼下に広がる世界は、ネオンやビルの明かりが瞬き、淡い群青色の深海のようだった。こんな状態でなかったら、女を口説く絶好のシチュエーションであろう。いい女が目の前にいるというのに、つくづく口惜しい。
勝ち組の連中が集うような店で負け組二人が飯を食っている。なんとも滑稽だった。
「蓮沼は女性にだらしない人だと、業界の間では有名です」
「そうですね」
「気に入った芸能人には、仕事をブッキングするという形で雁字搦めにしていくんです。それはそうでしょう。昨日まで、その他大勢の居ても居なくてもいいような小っちゃい仕事しかなかったのに、突然月九のようなドラマの出演が入ってくるんです。舞い上がらないほうがどうかしている」
「……確かに、そういうバーターはお得意のようだ」
私の言葉に同意するように瑞貴は頷く。
「ドラマの世界観を壊してでも、役を増やして捩じ込んできますから」
「で、視聴率も下がるわけだ」
私の言葉に、瑞貴は笑った。
私は周囲に視線を走らせた。瑞貴に気付く者はいない。
皆が場や料理に酔い、楽しい一時を過ごしている。
瑞貴の悲しい現実であり、現状そのものだった。
私は瑞貴の嫌な噂を思い出していた。蓮沼や桧垣など、瑞貴の周りにはろくな男が寄り付かない。もちろん私も含めて、だ。
男運の悪さも瑞貴の芸能活動の空転を助長している。
「芹沢は蓮沼と懇意なんですか？」
私は訊いた。
「みたいですね」
「……物部守雄が欲しがっているから？」

私の問いに「多分」と瑞貴は首を傾げる。
「……何回か接触し、移籍の交渉は個人レベルで行なっているはずです。芹沢が首を縦に振れば、強引に引き抜く。あそこはいつもそうですから」
瑞貴の考え全てを納得したわけではなかった。
何か腑に落ちないものがある。それだけでは説明のつかないことが多すぎる。
「……気を保たせてるんでしょう。彼女のしそうなことです」
「でも、あなたの場合は意味合いが違った」
瑞貴は手を止めた。
「あなたの事務所はセレブ系列。上の人間に睨まれれば……」
「蓮沼は元々テレビ局の人間。テレビ局に強いパイプを持っています。キャスティング権は彼の意のままですから」
瑞貴は不愉快さを滲ませながら笑った。
「何が目的ですか……？」
私の問いに瑞貴から笑みが消える。
「何かとは？」
「お約束の件です」
「ああ……」
「森川さんのことを知って何をなさるつもりですか？」
「もういいんです。忘れてください」
瑞貴は疲れたように言った。
仕返しでもするつもりだったのだろう。やり方次第では協力してもいいとさえ思っていた。それくらいの借りが、瑞貴にはある。
「……これはお伝えしなければなりませんね」
「なんでしょう？」
「依頼人が森川氏を探している理由です」
瑞貴が興味を示した。
「森川氏は芹沢玲香の芸能人生を潰しかねないほどのネタを持っているらしいのです」

「といいますと？」
「どうやら、それは盗撮映像のようです」
「ええっ！？」
瑞貴は大きな声を上げた。
「……まあ、本当かどうか分かりませんが」
「でも、根津さんがそんな眼に会うくらいですからね……」
興奮と驚きで渇いたのか、瑞貴は唇を舐めた。
瑞貴の仕草に私は思わず肌が粟立った。
次の話題を切り出そうか、迷った。
尋ねづらい雰囲気がある。だが、今の時を無くして芹沢との確執の理由を聞き出すことはできないだろう。
「芹沢さんとは何か因縁があるんですか？」
瑞貴は私の言葉に、再び困ったように微笑した。
「……彼女には色々言いたいことはたくさんあります。デビュー当時から何かとありますから」
「聞かせていただけませんか？」
私の問いに、瑞貴は目線を下げると、再び窓の向こうを見る。
「……昔の話です。私がまだ駆出しのモデル……いいえ、コンパニオンっていった方が正しいかな。あるオーディションです。わりと大きい企業のイメージガールを決めるものでした。わたしはオーディションにエントリーしました」
瑞貴は静かに語りだした。私はフォークを置く。
「後で聞いたんですが、完全な出来レースだったんです。アクティブ所属のモデルを起用することは慣例でした――」
テレビや企業などのキャンギャルは、最近はほとんどが出来レースだと聞く。選考以前に採用が決定している。バックマージンやキックバックなど実弾攻勢もさることながらやはり決め手になるのは事務所の力だ。弱小事務所などはグラビアやイベントなどでファンを徐々に獲得していきながら知名度を得ていくというのが最近のやり方だ。週刊誌のような発行部数の多い雑誌にグラビアを飾れれば、

スポンサーなどの目に触れ、名を覚えてもらい、テレビやＣＭに出演するチャンスもある。つまり素材さえ良ければ、大手と十分渡り合っていけるが、とどのつまりはコツコツと実績を積み上げていくしかない。近道はない。瑞貴は自らの魅力と実力で勝ち取ったのだ。

「アクティブは元々モデル事務所ですが、派遣業だけの他のモデル事務所は違い、芸能部門もある総合プロダクションです。芸能界においても強いパイプを持っています。一モデル事務所所属の人間が勝てるはずがない――」

瑞貴はワイングラスに注がれているミネラルウォーターを飲む。運転があるため、酒の類は頼んでいなかった。

「実際、わたしと芹沢は最終選考まで残りましたが、結局最後は芹沢が……」

重い話だった。

聞いていて、こっちまで胸が痛くなる。

「後でその事実を業界関係者に聞かされました。悔しかった。本当に悔しかった……」

瑞貴の視線はテーブルの上を彷徨っていた。

私のほうを見ようとはしない。

「その時、芹沢はわたしを勝ち誇ったような顔で笑いました。その眼は蔑みと嘲笑に満ちていました。それ以来彼女の顔が忘れられないんです」

瑞貴は怒りを抑えるような表情を見せた。

「芸能界が実力ではなく、事務所の力により左右されるという事実を目の当たりにした瞬間でした。わたしの甘い幻想を打ち砕いたんです。努力でどうにかなる。本気でそう考えていたんです。可愛いでしょう……？」

瑞貴の語るモデル業界の生々しい内幕に私は口を挟めなかった。

「もちろんわたしが落選した理由は、単純に素材として魅力が無かっただけなのでしょう。でも、いまでも、どこかでその答えを求めている」

「答え……？」
「芹沢とわたし――」
そう言うと瑞貴は言葉を止めた。
「……いいえ。なんでもありません……」
その後、瑞貴がどういう言葉を続けようとしたのか、私には容易に想像できた。
芹沢玲香と小川瑞貴。事務所という要素を取りのぞいた場合、どちらがタレントとして魅力があるか――彼女が問いたいのはそういうことではないのか。
見つかるかどうかも解らない、探しても辿り着けない答えを探している。
「だから仲良くできなかった？」
私の問いに瑞貴は誤魔化すように笑う。
「……もっとも彼女はわたしと口も聞こうとはしませんでしたけど」
瑞貴から笑みが消える。芹沢の話をするとき、瑞貴の顔は決まって険しくなる。
「……人のことは言えませんね。わたしも業界に染まってすっかり嫌な女になってしまった……」
「そんなことは……」
私は否定しようとした。
「少しでも良い事務所を求めて、モデル事務所を点々として、撮影会のモデルやらをこなして、ようやくわたしは今の事務所に拾われました。それなのに……」
瑞貴は悔しそうに唇を噛む。
慰めの言葉が思い浮かばない。私の知り得る言葉では何を言っても空疎で表層的なものにしかならない。自分の語彙の無さを呪う。
「なぜ、芸能界を……？」
私は別の質問を放った。
「――スカウトです。街を歩いているとき、声を掛けられて。わたし自身この世界でやっていけるなんて、それまで思ったこともなか

った。でもせっかくのチャンス無駄にはしたくないって……」
瑞貴は酒を呷った。
「人より幸せになりたかったから……欲深いんです」
瑞貴は自嘲気味に笑う。
芸能界を目指す人間は不幸な子供時代を送っている人間が驚くほど多い。
親の離婚率は高く、実家がボロ屋など珍しくない。
そういったものが芸能界において原動力となる。彼女も御多分に漏れず、そういう境遇なのだろう。
芸能界は自己実現を成すための手段なのだ。
「ご結婚はなさらないんですか？」
私は我ながら不躾な質問を瑞貴にしていた。
「……結婚に夢は持っていませんから。根津さんは？」
「私もです」
結婚に夢を抱かなくなったのはいつだろうか――私は思い出そうとしていた。おそらく今の稼業をはじめる手前だろう。
探偵見習いの頃から、男女間の現実を嫌というほど見ている。他人の間に何かを求めること自体、愚かなのだろう。
「……もうこんなことになってしまった以上、調査は終わりですね」
「いいえ」
私は否定した。
「まだ辞めるつもりはありません」
「……なぜですか？」
瑞貴は眉を眉間に寄せ、尋ねる。
「リベンジ……でしょうか。こういう性分でしてね」
瑞貴は不可解そうな表情で私を見る。
「冗談です……実は依頼人の方から金をもう振込まれましてね。もう後には引けないんです」
「そうですか……」
そうなのだろうか……？

私は自分自身に尋ねた。
単に瑞貴の前で格好つけたかっただけなのではないのか。おそらくそれは正しい。
「貴方にも借りを返さなければならない」
これも正しい。
こちらの方が今の私にとって重要だった。
「しかし……」
「そういうお約束でしょう？」
私は瑞貴にきっぱり言った。
「……ですが、蓮沼への接触ももう結構です。これ以上は貴方の身に危険が及ぶ」
蓮沼に近付く理由はもはや瑞貴には無い。
だが、瑞貴は次に意外なことを言った。
「――根津さんがそういうことなら、わたしも引けませんね」
「……ちょっと待ってください」
私は思わず止めた。
「根津さんとのお約束ですから」
瑞貴は微笑んだ。
「なぜ、そこまでこだわるんですか？」
私の問いに瑞貴は答えず、困ったように視線を外した。
「危険すぎる。貴方の存在が向こうに伝わった可能性があると申し上げたはずです」
危険なだけではない。不愉快な思いもするだろう。
そんなことは彼女にはさせられない。させる理由がない。
「だからこそです」
瑞貴ははっきりと言った。
「あれだけ恐い目に遭わせたのだから、もう何もしてこないだろうと普通は考えるはずです。蓮沼側は油断しています。そこが狙い目です。少なくともわたしに暴力を振るうことはないと思います」
瑞貴の大胆さに私は唖然となるばかりだった。いや、瑞貴は初め

て会った時からその行動力を匂わせていた。
思わず、総毛立っていた。
この行動力こそが今の彼女を作り上げ、なんとか芸能界で生存してこれたのだろう。
「……芹沢玲香の誕生日が迫ってます。セレブを出し抜くためにも、情報は必要です」
森川が動く可能性が高いという事だ。
それは森川を捕まえるチャンスでもある。
否定できないのが今の私の弱さだった。
「お互い、やられっぱなしは悔しいでしょう……？」
自嘲気味に言う瑞貴に、私は大きく頷いていた。

隠し撮り型ヒアリング

ダイニングのテーブルには精密ドライバーや瞬間接着剤、ドリルなど工具が散乱している。工具の他にも超小型ピンホールレンズ式ワイヤレスＣＣＤカメラ、ＣＣＤカメラ用広角レンズ、送信機と受信機が数台、受信機内蔵の２・５インチ液晶モニター、モトローラ製トランシーバなどが無造作に置かれている。

すべて秋葉原で購入してきたものだった。

私はコサージュにピンバイスで穴を開けていた。真っ赤なバラのコサージュだった。

秋葉原で購入してきたピンホールレンズ式ワイヤレスＣＣＤカメラをコサージュをシリコン接着剤で貼り付け、中に埋め込む。カメラと送信機のスイッチを入れ、手元の受信機内蔵の２・５インチ液晶モニターで映り具合を確認する。

私がバッテリーをベルトが着いたカバーに収めると、瑞貴がリビングに入ってきた。瑞貴は黒のパーティードレスを纏っていた。

「……似合いますか？」

瑞貴は体を翻しながら尋ねる。

とっさに言葉が出なかった。言葉を失うくらい美しかった。

我に返ると「……ええ、とても」と言った。

「……本当ですか？」

瑞貴は疑うように聞く。

私のリアクションを間違って捉えてしまったようだ。

目も眩むような美しさとはこのことだ。

ドレスは瑞貴の美しい身体のラインをくっきりと映し出し、Ｖの字に開いた背中は肌理の細かい美しい素肌をのぞかせている。裾の片方は深いスリットが入っていて、瑞貴の流れるような長い足が欲情を誘う。張りのある形の良い胸の谷間がのぞく。

露出度が高いセクシーなドレスだった。

蓮沼の口を軽くするための色仕掛けを考慮したものだ。
だが、聞き込みの為とはいえ、蓮沼の前に差しだすのが惜しかった。
すでにメイクの方も終えている。大きな瞳をより強調するために、アイラインでくっきりと縁取りし、下品でない程度に目蓋に色を塗っている。
ピンクのグロスの口紅が愛らしい唇を彩り、怪しい光沢を帯びている。
私はその唇を貪り、吸い付くしたい衝動に駆られた。
自らの欲望を理性で抑えこむと「これ、着けていただけますか」と瑞貴にコサージュ型隠しカメラを渡した。
まだ身体の節々が痛かった。湿布や軟膏を塗りたくっている私は、愛用している香水の使用を控えていた。
私はしばらくの間、瑞貴の部屋に寝泊りすることになった。ウィークリーマンションかレンタルルームでも借りるつもりだったが、瑞貴の勧めにより潜伏させてもらうことになった。
ダイニングで寝泊りしているため、私の持ち込んだ荷物が部屋の隅で増えつつあった。
瑞貴は私を信頼してくれていた。女と、しかもとびっきりの美女と部屋を一緒に居て、変な気分にならないといえば嘘になるが、彼女を場の雰囲気で押し倒すような真似はしなかった。
利害関係と同情、そして被害者同志の寄り添い。今の私たちはそれしかない。私自身それを十二分に理解していた。
元々普段から、調査の関係上、車の方には必要最低限の調査器材や着替えなどは積んでいた。
曽根崎に脅しを掛けられたことは神山には報告していない。
する必要は無いと判断した。私の報告で神山が恐れをなし、依頼を中止したら、元も子もない。
瑞貴はコサージュを胸上部に付けると、コードを服の中に入れ、目立たないように背中を這わせ、服のたるみで隠す。必要があれ

ば、テープで固定するように瑞貴に指示した。
私は瑞貴の頬の部分が荒れているのに気が付いた。肌の荒れは化粧で誤魔化しているようだ。
事務所解雇は予想以上に瑞貴の精神を蝕んでいる。早く手を打たなければ、瑞貴が壊れかねない。
「これを装着してください」
私は瑞貴にバッテリーを手渡す。
「これは何処に……？」
「足に忍ばせるのがいいでしょう。拳銃を隠し持つ女スパイのように、ね」
私の言葉に瑞貴は微笑すると、スカートをたくし上げ、脚を突きだす。ベルトはベルクロ式だった。裾の奥が見えそうになり、私は視線を外した。
バッテリーを足に巻き付け、ワイヤレスカメラと接続すると瑞貴はドレスの乱れを正す。とくに違和感はない。
私は瑞貴にワイヤレスカメラのスイッチを入れさせ、手持ちのモニターでカメラの映り具合を確認する。
「……完璧ですね」
そう言いながら私はテーブルにある耳栓のような形のものを摘み上げると瑞貴に差し出す。
「これは？」
「ワイヤレスイヤフォンです。耳に入れてください」
瑞貴は髪を掻き揚げるとワイヤレスイヤフォンを装着する。小作りで形の良い耳だった。
私は瑞貴にカード型受信機を持たせると、手持ちのモトローラ製トランシーバーを口元に寄せ「聞こえますか？」と尋ねた。
「はい」と瑞貴は頷いた。
音は携帯電話型盗聴器で拾うつもりだった。盗聴器といってもただ外部マイクを着けただけの代物だ。だが、発信式ではなく電話回線使用のため、遮蔽物に妨害されることがない。またＧＰＳ機能も

あるため、万が一身柄を拘束されても居場所を位置情報により把握することができる。車で待機している私が色々指示を与える。映像は1・5ギガヘルツの周波数で飛ばし、私の手元にある受信機内蔵の2・5インチ液晶モニターで監視、録画するという具合である。

モニターで映像を確認しながら、私はカメラの位置を微調整する。

「合図の再確認をしておきましょうか」

「はい」

事前に符丁を色々決めていた。

髪を触る――「了解」の意。

顎を撫でる――「もう一度言ってください」の意。

「これは？」

私は右手を擦る。

瑞貴はクスリと笑うと「ぶん殴って、逃げる――ですね？」と言った。

「……その通りです」

緊張を解すための冗談だった。

実際に使うことは、まずないだろう。そういう状況には絶対にさせない。

危なくなったら、多少無茶をしてでも救いに出るつもりだった。

盗撮は保険だった。瑞貴と会うことで浮かれ、蓮沼が口を滑らせる可能性は極めて高い。少なくとも画を押さえておけば良かったと悔やむことはないだろう。

すべては瑞貴次第だ。

瑞貴に取り付けたすべての機器のチェックが終わると私はポケットからシートを取り出した。

「睡眠薬です」

「……ハルシオンか何かですか？」

「――ベンザリンです。強力な睡眠薬で、ハルシオンとは違い不確定要素が少ない。上手くハマれば記憶をも吹っ飛ばす。酒と一緒に飲まれせれば効果は増します」

以前、医者に処方してもらったもののあまりだった。
「……危なくなったらこれを使ってください。スタンガンのような物は持ち歩けないでしょうし、これならいくらでも言い訳が効く」
瑞貴の眼が一瞬、眼が泳いだ。
不安の色を感じ取り、私は「やっぱりやめますか？」と尋ねた。
「……いいえ。もう後には引けません」
瑞貴はきっぱりと言った。自ら迷いを振り切るような口調だった。
「根津さん――」
「はい？」
瑞貴は私の顔をずっと見ていた。
「……いいえ、何でもありません」
私は問いただすことはしなかった。
戦いを前にして、瑞貴の心を不要に乱したくはなかった。

美容院へ行き、瑞貴の髪をセットし終わると、私と瑞貴は目的地に向かった。
青山にあるレストランが、今日の約束場所である。
もちろん我々が指定した場所でもある。電波を拾いやすく、車を近くに停めやすい立地条件に見合う場所で営業している所を選んだ。
レストランの近くで、電波が拾いやすい所に車を停めると、私は運転席で、ダッシュボード近くに設置したモニターを見ていた。
モニターにはレストランの様子が映っている。
瑞貴が撮影者の為、瑞貴の姿は見えない映像を飛ばしているため、ときどきノイズが入るが、見られないほどではない。イヤフォンからは、レストラン内の雑音が聞こえてくる。瑞貴に取り付けたマイクが拾っているのだ。モニターにはまだ誰も座っていない椅子の背もたれが映っている。
雑誌がこぞって特集を組みそうな内装の店内だった。スタッフの教育も行き届いているようだった。

機材だけでも、相当の金と手間が掛かっているのに、どれだけの情報を得られるのか、今更ながら不安だった。
何より、私は曽根崎とかち合わないか、内心ビクビクしていた。
喉が渇く。私は事前に購入していたミネラルウォーターのペットボトルを手に取ると、水を含んだ。張り込みで水を飲むなど、プロとして許される行為ではない。
――来ました。
瑞貴の声がイヤフォンから伝わってきた。
画面が動いた。
瑞貴が立ち上がったのだろう。激しく画面内の映像が揺れる。
蓮沼だった。
金の掛かった一流の服を身につけているのにかかわらず、体型と滲み出る下品さが、すべて台無しにしている。
蓮沼は乱暴に椅子を引くと、席に座る。
――久しぶりだな。
馴々しく、どこか高圧的な態度に私は瑞貴ならずとも不愉快さを覚えた。
――そうですね。
蓮沼はメニューを取ると、店員を呼び付け注文する。態度が実に尊大だった。見ていて、不愉快になる。瑞貴をこんな男の前に差しだしたことを後悔しはじめていた。
――最近、どうだ……？
蓮沼が白々しく尋ねてきた。
――事務所をクビになりました。
瑞貴は少し言葉を噛んだ。
――災難だったな。
蓮沼は嘲るように言う
――貴方がそうしたんじゃないんですか……？
私は見ていてハラハラした。
薬でも飲ませて、少し心理状態を落ち着けさせてからに送り出す

べきだったかもしれない。
――……言いがかりだな。
蓮沼は否定した。
――俺は誰よりもお前のことを心配している。なんだったら、新しい事務所を世話してやろうか？
蓮沼のにやにやした顔に、私は気分が悪くなった。
ウェイターが注文した料理を運んでくる。
蓮沼が頼んだのはフィレ肉のステーキだった。
瑞貴は前菜を注文していた。
蓮沼はフォークを取る。スーツの袖からは時計が覗く。ダイヤがびっちり嵌ったベゼル使用の趣味の悪いシャネルの時計だった。蓮沼が着けると余計に下品さが際立つ。
――セレブに逆らって、誰が私を迎えてくれるんですか？
ワイングラスに臙脂色の液体が注がれていく。酒に詳しくない私に、銘柄はよく分からないが、値が張るのだけは確かだ。
蓮沼はグラスを取ると一気に中身を入れた。口の中に留め味わう事無く、嚥下する。
蓮沼の所作は、実に見苦しいものだった。
瑞貴は明らかに熱くなっていた。指示を出したほうが良さそうだ。
私はトランシーバーを握る。
「瑞貴さん。蓮沼の機嫌を損ねるようなことは避けてください。今は堪えて」
瑞貴は苛立たしげに髪を触る。
いちお「了解」してくれた。
――俺に愚痴を言いにきたのか。なら帰るぞ。
肉を噛みながら、蓮沼は言った。
――……すみません。突然一方的にクビになったものだから。なんか収まりがつかなくて、ムシャクシャしているんです。誰でもいいから同情して欲しくて……。
蓮沼はステーキにナイフを入れ、一口大に切り取ると、肉を口に

運んだ。
——森川のことは誰に聞いたんだ？
——業界で噂になっているのを、たまたま聞き付けたんです。
——たまたま……？
——蓮沼さんが、困っているみたいだから、お役に立ちたいと思って。
——白々しいな。桧垣はどうした？
蓮沼はくちゃくちゃと肉を咀嚼しながら、言った。見ているだけで、食欲が減退する。
当分肉類は食えそうにない。
——だからあれは……。
瑞貴は苛立ったように言った。
——局が仕掛けた話題作りだと何度も言ったじゃないですか……。
蓮沼は黙っている。
——桧垣さんに口説かれたのは事実です。でも身体の関係はありません。本当です。
私の脳裏に桧垣の顔が浮かんだ。
——貴方に睨まれただけで引っ込むような情けない人ですよ。そんな人に幻滅こそすれ、恋愛に発展することなんてありません。わたし頼れる人が好きだから——。
蓮沼の顔がにやけている。
画面には映らないが、瑞貴は笑顔を必死で作っているだろう。
女優を目指しているのだ。それ位のことが出来なければ、その資格はない。
蓮沼は相変わらず、鼻の下を延ばしている画がモニターに映っている。私は胸を撫で下ろす。
聞き込みはまだ、本題にすら入っていない。
——お忙しんですか……？
瑞貴が尋ねる。
——ああ、色々あってな。

蓮沼はナプキンで口を拭った。
「今の話もっと突っ込んでください」
私は口を出す。瑞貴は髪を触る――了解の意だ。
――色々って……？
――色々だ。
回りくどい。
蓮沼はわざと答を避けたのが、私にも分かった。
ようは瑞貴をからかっているのだ。つくづく最低の男だ。
――セレブの力でまた誰か売り出すんですか……？
話題の振り方が上手い。極めて自然な運び方だった。
――そうだ。だが、見てくれだけの能無しじゃないぞ。今度の玉は才能も実力もある。
――新人ですか？
――ああ。
蓮沼は頷く。
――小さい頃から劇団に所属していてな、演技の素養もある。これが中々のものだ。
「……小川さん。もっとそこの部分を踏み込んでください」
私はマイクに指示を出す。
――つまり新人の為の裏工作に忙しいというわけですか……？
瑞貴は髪を触ることなくそう尋ねていた。
瑞貴の物言いに私は肝が冷えた。今の言い方では皮肉にしか聞こえない。
蓮沼の表情が一気に険しくなった。
歯痒い――男に媚びるのが下手すぎる。
蓮沼相手では無理もないだろうが、彼女が芸能界で冷遇されている理由の一端が垣間見えた。
私はトランシーバーを口元に近付ける。
「……瑞貴さん。不愉快でしょうが、もっと目の前の男に媚びてください。機嫌を損ねてかけています。それから、新人の名前を聞き

出してもらえませんか……？」
了解――瑞貴は苛立たしげに髪を触る。
――……冗談ですよ。いちいち本気に取らないでください。
瑞貴の言葉に、蓮沼は虚を着かれたようだ。その為か怒りは引っ込んだようだ。
冷や冷やする。
――でも、羨ましいな。
――何故だ？
蓮沼が尋ねる。不機嫌さはまだ抜けていない。
――だってそうでしょう。蓮沼さんに見込まれたわけですから。順風満帆じゃないんですか。
――いまさら俺に媚びてどうする？
――別に媚びてるわけじゃありません。ただ、桧垣さんと違って蓮沼さんは口だけの人じゃないから……。
蓮沼は満更でもない顔をしていた。
――後になってからそういうことが分かったんです。本当です。
瑞貴のなかなかの女優っぷりに、私は舌を巻いた。
いや、女とは本質的にこういう生き物なのだろう。
――名前はなんて言うんですか？
瑞貴の言い方も多少柔らかくなった。
――……企業秘密だ。教えるわけにはいかん。
自慢げに答える蓮沼に私は舌打ちした。
だが蓮沼の口調にもかなりの変化が起きていた。態度がかなり軟化している。
――忙しいのに、なぜ森川さんを探しているんですか？
瑞貴が森川の件に触れた。
――そんなことを聞いてどうする？
――わたし、クビになっちゃったから。蓮沼さんのお役に立てるかもしれないと思って。
蓮沼の目が細くなる。口元は弛んでいる。

――つまり、森川の件で俺の気を引きたいとそういう訳か？
――いまさら別の仕事には就けません。それに、蓮沼さんへの信頼も取り戻せるでしょう？
――……変わったな、お前――。
――変わったんじゃなくて、気付いたんです。
持ち直したことに、私は安堵し息を吐く。
瑞貴の女優ぶりに苦笑した。もう少し感情の制御が上手ければ、言うことはない。
――芹沢さんの何を握っているんですか？
瑞貴は尋ねる。
――誰かに頼まれたのか？
蓮沼の疑り深さに、私はうんざりした。
瑞貴はもっとうんざりしているだろう。
――セレブに逆らおうとする芸能人なんて居ません。そんなこと貴方が一番ご存じじゃないですか。現にわたしは――。
瑞貴の言葉が一瞬途切れた。
――蓮沼さんに従ったじゃないですか。
衝撃が走った。
同時に私は蓮沼と瑞貴の関係を悟った。
手が震えている。
笑ってしまうくらい動揺している自分が、そこに居た。
――教えてください、蓮沼さん。
瑞貴の声を聞く限り、瑞貴に動揺はない。
――……まあいいだろう。
蓮沼はやっと観念したのか、口をナプキンで拭った。
――森川は芹沢玲香の盗撮映像を入手している。芹沢の息の根が止まるような、な。
やはり――私の予想は正しかったが、それどころではなかった。
暴露された瑞貴と蓮沼の関係は、私から正常な判断を奪っていた。
蓮沼が身を乗り出し、顔を近付ける。

画面に広がる蓮沼に、思わず私は思わず身を退き、モニターから離れた。
――……ここだけの話だが、俺は会社を立ち上げるつもりだ。
蓮沼は小声で言うと、席に戻る。小声で言う必要性が分からない。この男は大げさな真似を時々する。
――独立というやつだ。社長にもようやく認めさせた。森川を捜し出して芹沢を引きぬくというのが、独立の交換条件だ。
新情報だった。
そして、蓮沼側の理由が判明した瞬間だった。
だが、私はどうでも良くなっていた。
先の事実がそれ程、私を打ちのめしていた。
――社長さんは森川さんを使って芹沢さんをアクティブから引き抜くつもりですか？
瑞貴が尋ねていた。
動悸が激しくなっていた。目眩すらした。もっと集中しなければならないと分かっていても、言いようもない苛立ちが私の中で起こっていた。
――いやに芹沢にこだわるな。
――……わたしをハメた人ですから。
口の中がひどく乾く。私は水を喇叭飲みする。渇きは癒されない。自身から吐きだされる息が、重く、熱かった。
――あんな女どうでもいい。扱いにくくて、我侭まで、高慢稚気で、高飛車。おまけに金に汚い。お前と違って……。
蓮沼はグラスを取り、ワインを呷る。
――嫌な女だ。綺麗しか取り柄が無い、どうしようもない女だ。
蓮沼はそういうと酒を飲み干し、息を吐きだす。
――社長……物部は奴を気に入っているが、あの女の本性を見抜けていない。いや、そういう清も濁も魅力の一つとして考えている。だが、周りで世話をする人間の身になってみろ。あいつに苦労させられるのは眼に見えている。あいにく俺はあの女が大っ嫌いなんで

な。
私は動揺を抑えこみながら瑞貴に「藤崎理奈のスクープについて尋ねてみてもらえませんか」と指示を出した。
瑞貴に自分の動揺が伝わるのは避けたかった。
――話は変わりますけど、先日の藤崎さんのスクープの犯人は分かったんですか？
瑞貴は蓮沼に尋ねた。
――いいや。
蓮沼は首を振る。ウエイターが空になったグラスにワインを注ぐ。
――……俺は、あれはアクティブスターが仕掛けたものだと思っている。アクティブはセレブと手を切りたがっているしな。そうなればセレブは大打撃だ。なんとしてでもアクティブを引き止めねばならん。
蓮沼の説明に私はようやく合点がいった。
つまり奥野を接待付けにしているのは、奥野のみならず、アクティブを芸翔に渡さないために情報を得るためなのだろう。
と考えれば、神山が仕掛けたものではないらしい。
独立と会社存続――セレブが危なくなれば自分の独立騒ぎどころでは無くなる。自己の利益の為に、蓮沼は奔走しているのだろう。森川探しも必死になるわけだ。
蓮沼はグラスをとる。
結構な量を飲んでいるが本人に変化はない。酒は強いようだ。
――……どうだ？　お前も俺の下でやってみる気はないか？　このまま芸能界を去るのはお前の本意じゃないだろう？
蓮沼は唇を舐めた。あの舌が、瑞貴の身体を舐めたかと思うと、引っこ抜いてやりたかった。
――考えさせてください。
瑞貴の答えに、蓮沼は怪訝な顔をした。当然だった。
――……さっきと言うことが違うな。考えるまでもないだろう。お前を受け入れてくれるところなんてお前の言う通り、無いだろう

……？
口が脂っこくなったのか、蓮沼はウエイターにデザートを頼んだ。フルーツのシャーベットだった。
――……本当にそう思ってらっしゃるんですか？
蓮沼の挑発に瑞貴の演技が振れる。最後までやり遂げてほしい、と私は祈っていた。
――どこかあるんだ？　つまらん見栄を張るのはよせ。
蓮沼は瑞貴をからかい楽しんでいた。強者が弱者をいたぶる事で得る暗い喜び。瑞貴の反応を楽しみ、興奮し、瑞貴に欲情しつつある。底意地が悪い。
注文していたシャーベットが蓮沼の前に置かれた。
――……少し、情緒不安定だな。休んだ方がいい。充電してから仕事に復帰しろ。お前がその気なら復帰後の面倒は俺が見る。
蓮沼はそう言いながらシャーベットをスプーンで掬うと、口に放りこむ。
――……愛人になれ、の間違いじゃないんですか？
瑞貴の言葉に、否定も肯定もせず蓮沼は笑う。
――……まあ、そういう気の強いところも可愛いが、な。今すぐに答えを出せとは言わないさ。
蓮沼はシャーベットを置き、身を乗り出した。
――この後、空いているのか？
――……ええ、さっきも言った通り、わたし時間だけはありますから。
――場所を変えて飲み直そう。今後のお前の将来について話し合う必要があるだろう。俺もお前のことに関しては少々行きすぎた点もあったと反省しているんだ。どうだ？
蓮沼の露骨で下手な誘い方にこっちが赤面する思いだった。
――……わたしを捨てたのは、貴方ですよ。少しわたしを馬鹿にしてませんか？
瑞貴の言い方に刺はなかった。まるで男を弄んでいるような言い

方だった。腸は煮え繰り返っているだろう。
よく自分を制したと、瑞貴を誉めてやりたかった。
――……居なくなってみて、初めて価値が分かる場合がある。お前はそういう女だ。
瑞貴の笑い声が聞えると、蓮沼がフレームアウトした。瑞貴が席を立ったのだ。
――今日は帰ります。安い女と思われたくないから――。
私は特に何も言わなかった。
これ以上会話を続けさせても情報は得られないだろうし、瑞貴にとっても多大なストレスだろう。
――でも、今度会う時は……。
瑞貴の思わせぶりの言葉に蓮沼は満足したように笑みをこぼすと、乱暴に瑞貴の手を取った。カメラが激しくブレる。
――……森川の件、もし情報が入ったら俺に報せろ。悪いようにはしない。
スーツの乱れを直しながら、蓮沼の声が入ってくる。
――わたし、今欲しいものがあるんですけど――。
――お前の欲しいものなら何でもくれてやる。バックでも、仕事でも、な。
蓮沼の下品な笑い声を最後に、耳から引き抜くように私はヘッドフォンを取った。
蓮沼が独立する――その情報を得ただけでも収穫はあった。
森川の追跡はそのことと無関係ではないはずだ。
今の私には、そんなことはどうでもよかった。私はシートに凭れ掛かった。
衝撃的な事実であった。まさかとは思っていた。
私はその事実を受けとめられずにいた。髪に手をやり、掻き毟る。
身が焼けるような、不愉快な事実だった。狭い運転席で私は身悶えしていた。
助手席の窓を叩く音が聞こえてきた。

瑞貴は帰ってきた。私は助手席のドアを開け、中に入れる。
私は取り敢えず自分の感情を抑えると、「お疲れ様でした」と言った。今の私には、在りきたりな労いの言葉しか思い浮かばなかった。
瑞貴は口を開かなかった。
非道く疲労している。
表情は硬い。硬いというより、顔から表情の動きが欠落していた。
助手席に座っても、瑞貴の緊張は解けなかった。
イグニッションキーを回し、私は車を走らせる。
バックミラーを見ながら、尾行確認に集中した。というより、尾行確認と運転に集中することで瑞貴との会話を避けたかった。
「――意外に冷静になれないものですね」
瑞貴がやっと口を開いた。
「……やる前は、もっと上手くやる自信があったのに……。彼が目の前に居るとどんどん気分が悪くなって。根津さんの指示が無かったらわたし、あいつに水をぶっかけてたかも知れない――」
今の瑞貴に何を言っても皮肉にしか聞こえないだろう。私は言葉を飲み込み、無言になるしかなかった。
「……なぜ、黙ってるんですか？」
瑞貴が口火を切った。
「お聞きにならないんですね？」
「何をですか？」
私は横目で見ながら瑞貴に聞き直す。
自分の女でもないのに、浮気を問い詰める器の小さい男のようだった。
「私はいつも貴方に、はぐらかされてばかりだ」
私は努めて、なるべく明るい口調で言った。
「でも今回は――」
瑞貴は唇を咬んだ。
「見損なったでしょう」

私は何も言えなかった。
「――はっきり言ってください。タレントとしても女としても最低だと」
答えなかった。
「それとも知っていましたか？　私と彼の関係を」
「……噂では」
「そうですか」
何かを諦めたように、瑞貴は言った。
「こういう場合芸能人なら、まったくの出鱈目だって否定するんでしょうけど……」
自嘲気味に瑞貴は言った。
「……少しドライブでもしませんか？　気分転換に」
私は瑞貴を誘った。
今度は瑞貴が何も答えてはくれなかった。

私は車を湾岸方面に向けていた。無性に海が見たかった。
暗い車内の中でメーターが淡い光を放っている。
私は運転席の窓を開けていた。
車を走らせることで、少し風に当たりたかった。
それくらい私の身体は熱くなっていた。
それは蓮沼に対する怒りか、瑞貴に対するものなのか、解らなかった。
レインボーブリッジを渡ると、車を橋近くの駐車場に止め、私は瑞貴と共に車を降りた。
私達は近くの海岸公園へ向かった。
公園からは夜の海が見える。
真っ黒なベルベットの布のような海が、眼下に広がっている。
寄せては返す波の音が周りに静かに響き、止むことはない。
夜の海が放つ潮の香りが漂う。

夜風が、夜の寒気と共に私の火照った頬を撫で、心地よかった。
瑞貴はドレスの上に黒いコートを羽織っていた。私にはまるで葬式帰りの寡婦のように見えた。
瑞貴は歩みを止め、近くの手摺りに寄り掛かると海を眺めた。
「……私の歳、ご存じですか？」
瑞貴が訊いた。
「……二五、でしたね」
プロフィール上はだ。それを額面どおりに信じるほど初心ではない。
「――二八です。本当は……」
恥ずかしそうに瑞貴は言った。
「……芸能界で二八なんて、オバさん扱いです。売れてる人ならともかく、笑いのネタにはなれど誰も相手になんてしてくれない」
フォローできなかった。
年齢をハンデだとは思わない。いい女はいくつでもいい女だ。
「……最後のチャンスだったんです。芸能界でステップアップするための。この世界でやっていくための……。だから蓮沼の要求を呑むしかなかった」
私は何を言っていいのか、分からなかった。
自分の気持ちすら把握できなかった。
「ドラマ出演のオファーが来て、すぐに呼び出されました。事前にセレブ系列の偉い人だと噂には聞いていました。事務所の今後の仕事の保証と共に、身体を差し出すことを仄めかされました」
瑞貴は右の二の腕を握り締めていた。
「――それはいいんです。仕方の無いことです。わたしに魅力と実力が無かっただけですから」
「そんなことはありませんよ」
私の言葉に瑞貴は自嘲気味に笑った。歪んだ微笑だった。
瑞貴の唇は何か言葉を紡ごうとして、開いたり閉じたりしている。
瞳はしきりに瞬きを繰り返していた。

「身体まで張って得た仕事でした。ちょい役だけどプライムタイムのドラマに出演できるんです。話題作りの客寄せパンダだとも十分理解してました。それでも嬉しかった――。それなのに……」
言葉と共に、鼻を啜る音が聞こえた。
「それを芹沢に潰された――」
私は瑞貴の方を見なかった。
それは瑞貴に対して冒涜に等しい行為に思えてならなかった。
私は黙って海を見ていた。
「共演者である俳優が私を口説いたんです」
「……お話に出てた、桧垣恭吾ですね」
私の答えに瑞貴は頷く。
「――わたしの方も蓮沼との関係に疲れていました。桧垣さんとはお付き合い程度で食事に数回行きました。彼は共演者で私の数少ない味方でもあったんです。機嫌を損ねて、敵に回すような真似はしたくなかった。たとえそれが下心見え見えのものでも……。もっとも身体の関係はありません。誓って――」
嘘ではないだろう。そう思うことにした。
信じているにもかかわらず、瑞貴をまともに見れない自分の技量の狭さが情けなかった。
「蓮沼は独占欲の強い男です。桧垣と食事に行ったという事実だけでも、蓮沼を怒らせるには十分でした。散々罵られました」
「誰が彼に告げ口を……？」
「……芹沢玲香でしょう。疑いようもありません」
「一方でドラマの視聴率は二桁を切り、敗戦一色。で、貴方が責めを負わされた……？」
瑞貴は頷く。
「……おかしな話ですよね。わたしは脇役なのに……。話題作りで投入されただけなのに……」
私の中で、芹沢に対し言いようもない怒りが湧いていた。
他人事ながら、瑞貴にひどく感情移入していた。

「――局側としては事務所への手前上、芹沢の評判を落とす訳には行かない。アクティブスターには神谷祐希という次を担う存在もいます。事務所との今後の関係を維持するためにも、わたしを切ることで手打ちに……」
「彼女はなぜそんなことを？」
「元々、彼女はわたしが出演するということが面白くなかったんです。企画自体乗り気じゃなかったのに、事務所の思惑が入り交じりドラマは台無し。さらに保険としてわたしが投入された。彼女にしては非道く女優としてのプライドを傷つけられたのでしょう」
瑞貴は再び手摺りを握る。
「でも、わたしにはまったく関係のない話です。それだけの理由で彼女はわたしの芸能活動を奪ったんです。悪意を撒き散らし、わたしの――」
瑞貴は唇を震わせていた。親指の爪を噛む。
「わたしの夢を踏み潰したんです――」
瑞貴の瞳から涙が溢れ、流れ落ちた。
口を手で押さえ、喉をつまらせ嗚咽した。
言葉がなかった。
瑞貴の肩に手を置くと、瑞貴は私の胸の中に顔を埋めた。体を震わせ、泣き声を必死に抑えようとする様子が伝わってきた。
私は瑞貴が収まるのを黙って待っていた。

報復へのプレリュード

私は瑞貴の自宅で手持ちの武器を点検をしていた。催涙スプレーや投擲型催涙ガス缶の使用期限、神経パルス兵器マイオトロン、シュアファイアのバッテリー残量などを確認する。

私が今手にしているのは射出型遠距離用スタンガン『テーザー銃』である。

テーザー銃は自分が所持する武器でとっておきの得物である。ワイヤー付きダートを跳ばして標的に打ち込み、電流を流してショックを与える非致死性武器である。

武装願望が強い私は、アメリカから個人輸入代行業を通してこれを入手した。非致死性とは名ばかりで実際に死人も出ている程の威力で、銃器と遜色ないものといってよい。

過剰防衛と誹られようが一行に構わない。

もう暴力には絶対に屈しない。

私はそう心に決めていた。瑞貴の告白を聞いた以上は――。

あの後私達は、瑞貴の部屋に戻った。気落ちしている瑞貴を勢いに任せて迫るような真似はしなかった。そこまで私は無神経な男ではない。

いや、求めれば、瑞貴は確実に私に応じてくれるだろう。だがそれは、蓮沼が瑞貴に行なった行為と同じことに思えてならなかった。

ここ数日、気まずい関係が続いていた。

瑞貴は朝食を終えると、自分の知り合いや芸能関係者に当たりを掛け、直接聞き込みへ出向いていた。

私をどこか避けているように思われた。

無理もない。

瑞貴の行動は、私の為というより自らの喪失感を埋めるための代償行為に近いものだろう。

本気で芹沢玲香に報復するつもりなのだろうか。
おりを見て、意志を確認しておかなければならない。
私の方はと言えば、調査が完全に行き詰まっていた。
蓮沼から引き出した情報はこれと言って有力なものは無かった。
一番インパクトの大きいものは、皮肉にも瑞貴と蓮沼が肉体関係があったという体たらくぶりだ。
奥野の線が断たれた今の私にできることはせいぜい芹沢宅の張り込みか、情報集めしかなかった。
とりあえず目新しい情報が入ってきていないため、目黒にある芹沢宅の張り込みを行なうつもりだった。
芹沢玲香の誕生日まで三週間を切っていた。
武器の点検を終え、アタッシュケースに収めると、私は防刃ベストをスーツの下に着込み、車へ向かった。車は瑞貴自宅近くの月極駐車場に止めてある。
運転席に座ると、私は携帯を取り出した。
着信履歴があった。宮島だった。
あまりのタイミングに小躍りする思いだった。私は通話ボタンを押す。電話はすぐに繋がった。
――……ああ、どうも根津さん。
宮島の様子がおかしかった。声からでもすぐに分かった。
「……何かあったか？」
――いいえ、特には……。根津さんこそその後大丈夫ですか？
私は心配が杞憂に終わったことに、安堵した。
必要以上に慎重になりすぎている自分に苦笑する。
「……いろいろあった。まあ、それはいい。何かネタでも入ったか？」
――伊沢達也第二弾です。
「……なんだと」
私は思わず声を上げていた。
――……今週の週刊ＦＩＮＳＨに掲載されます。

週刊ＦＩＮＳＨ――ショットアップと双璧をなす老舗の写真週刊誌である。
スクープネタのインパクトはショットアップより劣るが、時代の流れを読むセンスは抜群で、数ある写真誌が休刊に追い込まれた中、紙面を変転させる事で生き残ってきた。
中高年層の心を掴み、生き残ってきた実績は伊達ではない。
――伊沢の事務所弱いですからねえ、叩きやすいんですよ。で、まあ今回のネタがまた、パンチが効いているというか……。
「……もったいぶるなよ。なんだ？」
――わかりやすく言えば、乱交パーティですわ。仲間とカラオケボックスかどこかで撮られたみたいです。
当事者で無いにも関わらず、私は目眩がした。
――しかもツーショットの写メ画像の一緒に掲載されます。女の方は目線は入ってますが、馬鹿面をした伊沢が楽しそうに写ってますよ。
携帯を握る手が震えている。
――まあ、本当の標的は藤崎でしょうね。伊沢を叩くことで藤崎を間接的に攻撃する、と。
セレブのタレントである藤崎を叩くことは不可能だろう。セレブのマスコミ対策は万全である。
しかし、相手側の方は話が別である。対応は遅れてしまうし、セレブと違いマスコミを黙らせるだけの力が無い。
今回のスクープは伊沢のイメージを落とす意図もある。
馬鹿な男と付き合っていれば、藤崎自体のイメージも悪くなる。藤崎も同じバカだと世間は認知するということだ。
これにより藤崎はタレント生命に赤信号が点ることになるのは目に見えている。例の携帯電話のイメージキャラクター争奪戦から藤崎は完全に脱落するだろう。
「……芸翔なのか？」
私は宮島に尋ねた。答えを聞くのが怖かった。

――……わかりません。でも掲載誌から察するに間違いないと思います。ただ、最近の週刊ＦＩＮＳＨでは芸翔系のタレントがグラビアで幅を利かせていますから……。
芸翔との関係が深いということだ。
――……当分は尾を引きそうですよ。物部の奴ですけど、怒り狂ってるらしいですよ。さっそく手下に裏取りさせているみたいです。
宮島の言葉に胃が重くなる。まだ、先日のリンチの傷も治り切っていない。
「セレブの曽根崎という男を知っているか？」
私は宮島に尋ねていた。
――ああ、あの元刑事とかいう男ですよね……？
「……なんだと！？　確かなのか？」
私は思わず大声を出した。
――ええ、確か元警視庁のマル暴担当です。物部に引き抜かれて、タレントのクレームやトラブルの処理をする今の仕事に……。ある意味、ヤクザよりタチが悪いっすね。
タチが悪いなどというものではない。国家権力が絡んでくるなど考えもしなかったことだ。
すぐに身を隠して正解だったようだ。曽根崎に押し付けられた煙草の火傷が疼く。
――以前、警視庁詰めの番記者から尋ねられたことがありまして……。確かな情報ですよ。有能な刑事だったらしいですが、不祥事やらかして馘になったって……。
「今でも警察と繋がりはあるのか？」
――どうでしょうね。色々便宜は計ってもらってるんじゃないんですか？
宮島は憂鬱になることをさらっと言う。
――でも身分証が無い警官なんてツブシききませんから。
「金を積まれればどうかわからないだろう。何せセレブの資金は潤沢だ」

確かに元警官などプロの探偵から見れば調査能力など足元にも及ばない。
所詮は国家権力と身分証が無ければ聞き込みもままならないような連中だ。
だが、官憲のコネが今も生きているならば、話は別だ。
――……奴になんかされたんですか？
宮島の声に緊張が走っていた。
「近々、キャバクラで飲もうか。宮島ちゃんともっとゆっくり話がしたい」
――……なんすか、急に？
「次会うときまでに、曽根崎に関しての情報を集めておいて欲しい。家族構成、現住所、女性関係、過去の実績、何でもかまわん。番記者の方に問い合せてみてくれ。大至急頼む」
返事がない。
電話の向こうでさぞかし嫌な顔をしているだろう。
「……もちろん私の奢りで、だ」
――本当ですか！　絶対ですよ！！
現金な男だった。
私は苦笑すると「了解した」と言い、電話を切った。
宮島の情報を整理するため、私は思索に入った。
写真の内容から推測するに、明らかに伊沢周辺の人間からの流出と見て間違いない。
だが、もし芸翔の謀ならば私に一言あってもいい筈である。
このネタは私が提供したも同じだ。
私の仕事の成果をこんなふうに利用されるのは不愉快極まりない。
私は芸能記者ではない。まして、芸翔と連むつもりはない。
何より曽根崎という男に私は脅迫されている。当然、私の立場も危うくなる。
伊沢と曽根崎のネタに動揺し、宮島に芹沢のパーティーに関する情報の裏取りをすっかり忘れてしまったことに舌打ちしながら、私

は事の真偽を確かめるに神山に電話をした。
――耳が迅いですな。
神山は電話の奥で笑っていた。
「では、やはり……」
――ええ、今回は我々が仕掛けました。
事無げに言う神山の言葉に、私は思わず携帯電話を握る力が強くなった。
――……まあ、何かと根津さんにはご迷惑をかける形になると思いますが、ご了承ください。
神山はぬけぬけと言う。
つまりこれでセレブは本気になるということだ。
私は文句を喉の奥で飲み込むと「どこでこのネタを？」と訊いた。
声が笑えるくらい擦れていた。
――貴方の調査結果を元に伊沢周辺の人間に近付き、買収しました。少々金は使いましたがね……。
「伊沢の画像を撮ったのも……？」
――金で雇った人間です。芸能人志望の娘でね、事務所に所属させることを条件に伊沢をハメろ、と。簡単でしたよ。
女と金による妨害工作――さぞかし札束を積んだのだろう。
こんなに露骨に妨害工作を仕掛けるなど予想外だった。
芸翔の巧妙な遣り方に、私は思わず舌を巻いていた。
と同時に芸翔への不信感が決定的なものとなった。雑誌側にも相当な圧力を掛けたのだろう。物量作戦にも程がある。
なぜ、そこまで本気になる必要がある――？
「事前にご相談いただきたかったんですが……」
私は感情を抑えながら抗議じみたことを言った。
――なぜですか？
神山の一言に、冷水を浴びせられた思いだった。
――私は貴方の調査結果を金で買った。それをどうしようと私の自由でしょう。それに貴方はおっしゃったじゃないですか。妨害工

作の類いはしない、と。
ふざけるなと、怒鳴り散らしてやりたかった。
これで私の危険が増すということだ。
馬鹿正直に調査報告書や証拠記録を渡したことを悔やんだ。神山は私を完全に使い駒としてしか見ていない。
だが、今は耐えるしかない。瑞貴の為にも――。
「……そうですね。少し僭越でした」
電話の奥で神山の笑い声が聞こえた。胃が灼けるように熱くなる。電話であるということが、唯一の救いだった。
「……物部が黙ってはいませんよ」
――でしょうね。
神山は物部をまったく脅威としていない。さすが芸翔のトップである。
――藤崎には別の写真を送りました。まあ、これも彼女も暫くは仕事に手が付かないでしょう。
嫌がらせにも程がある。クライアントながら神山のやり口に反吐が出そうなほど、胸糞が悪くなる。やはり大手の仕事など受けるべきではなかった。後悔が引く。
神山との通話が終り、携帯をしまおうとすると電話が震え、着信ランプが瞬いた。
非着信だった。相手は容易に想像できた。
電話を出るかどうか、逡巡した。意を決し、私は通話ボタンを押す。
――根津だな……？
聞き覚えのある濁声に顔中が熱くなる。
曽根崎だった。
私の予感は的中した。痛み付けられたことが鮮明に蘇る。
すっかり治っているはずの左手の甲の火傷が疼くような錯覚に襲われた。胃がヒリヒリする。
――今回のこともお前が絡んでるのか？

「……伊沢達也のことですか？」
私は会話を矢継ぎ早に行なった。少しでも間を作れば、私への容疑は決定的なものとなるだろう。事態を収束させるために、私が生贄になることもありうる。
それだけは絶対に避けなければならない。
――……そうだ。
曽根崎は肯定した。
私は会話を繋ぐために「一つ有益な情報をお教えしましょうか」と切りだす。
――なんだ？
「今回の件、首謀者は芸翔の神山さんですよ」
――それで？
「……これで貴方の仕事が一つ省けた」
――俺を舐めてるのか……？
曽根崎は私の冗談を受け付けなかった。また、受話器の奥で煙草を吸っているのだろうか。そんな想像を私はした。
――どこでその情報を仕入れた？
「――ネタ元は明かさないのが私の主義でね。真偽のほどは御自身で取られたらどうですか」
我ながら上手いかわし方だった。
曽根崎の苛立たしげに息を吐き出す様が聞こえる。
――……腐ってもプロだな。あの後からお前の居場所がつかめない。
「もう、これ以上あんな目に会うのは嫌ですからね」
――……どうだ。もう一度会って、痛い目に会うか？
曽根崎の言葉に身が竦む思いだった。
そんな話に乗る訳が無い。今度こそ半殺しになる。
次の一手をどう打つか、頭をフル回転させる。
言うべき言葉はすぐに思いついた。
「……そうですね。それもいいかもしれない。もう少し考えさせて

ください」
――……本気で言っているのか？
「この前の話ですよ。ネタを買い取るという……。決心がついたらお電話します。ですから曽根崎さんの電話番号をお教え願えますか？」
――……会社の方でいいのか？
曽根崎の声のトーンが変わった。警戒しているとすぐに分かった。
「でしたらこの話は無しだ――」
私はきっぱり断った。
「何か情報が入ったら真っ先に曽根崎さんにお伝えしようと思ったんだが……残念ですね」
――……どういう心境の変化だ？
「……いや、別に。あんな暴力ふるわれたら誰だってそうなるでしょう。そのおつもりで私に脅しを掛けたんでしょう」
いつのまにか、また心理戦になっていることに私は苦笑した。
だが今回は違う。私の方が、いささか優勢のようだ。
森川の居場所がつかめず、前回とそして今回のスクープ騒ぎによる藤崎潰し……セレブ陣営側の焦りを感じずに入られない。
それは曽根崎の焦りでもある。
曽根崎はさぞかし上の人間に責っ付かれているのは容易に想像できる。私に電話を掛けてきたことがその証拠だ。
私は曽根崎の状態を図らずも看破したことに落ち着きを取り戻していた。
攻めるなら今だ。
「……貴方だって、森川さんの居場所がお知りになりたいんでしょう？」
私は曽根崎に尋ねた。
――依頼人を裏切るつもりか？
「……居場所を探せとは言われたが、捕まえろとは言われていない」
沈黙。

曽根崎は今、混乱している。
私はついに曽根崎に対し有効打を放ったのだ。私はそう判断した。
完全に私のペースだった。
「元警察官でも、芸能マネージャーの居場所を知ることは困難と見える……」
刹那、会話が止まると
――調子に乗るなよ……！
と、怒気がこもった曽根崎の言葉が返ってきた。
「……疼くんですよ」
私は怯まなかった。
「貴方にやられた煙草の火傷が、ね」
私は火傷の後を擦りながらそう答えた。
曽根崎は沈黙する。
「……元刑事さんなら、携帯電話などから森川を追うことだってできるんじゃないんですか？」
私は曽根崎を挑発するように言った。
――簡単に言うな。昔の伝手を使えるならこんなに苦労はしない。
「――でしょうね。でなければ私にこんな揺さぶりを掛けてくる必要もないでしょうから」
沈黙。
案外、昔の仲間に頼らないのは曽根崎なりの矜持かもしれない。
つまらないプライドだった。つまり曽根崎はその程度の男ということだ。
「……現実的なお話をしましょう。ギャランティはお幾らほどになるんですか？」
曽根崎は答えない。
「芸翔が提示する額の二倍でしたね。もっとちゃんとした具体的な金額を提示していただけませんか？」
曽根崎は再度沈黙する。
どうやら、ハッタリだったようだ。あまりの御粗末さに私は笑い

が込み上げてきた。
「……お話になりませんな」
——幾ら欲しいんだ？
「……貴方が金を払うわけじゃないでしょう」
私は曽根崎を嬲っていた。
「まず上司とよく御相談の上、もう一度お話合いをしましょう。お話はそれからだ」
曽根崎の無言は続く。
意外に抵抗されると、弱いらしい。
「……断っておきますが、後で脅迫されたなんてふざけたことは言いっこなしですよ。もっとも、そんなしょっぱい手は元警官の方なら、恥ずかしくてお使いにはならないでしょうけどね」
電話の奥から舌打ちが聞こえる。
曽根崎は、自尊心を大きく揺さ振るようなやり方が一番効果的のようだ。
——……いいだろう。
曽根崎は私に自らの電話番号を教えると電話を切った。
緊張が解けると疲労感が一気に吹き出す。
だが、心地よい疲労だった。私の口の端が弛んだ。
初めて曽根崎に一矢報いた気になった。

私と瑞貴は原宿で合流することになった。
藤崎のスクープや曽根崎からの電話など、事態の急変を受けて、私は瑞貴と連絡を取った。
蓮沼の件に拘っている状況ではなかった。
瑞貴と話し合い、今後の計画や行動を修正する必要があった。
原宿に到着すると、午後三時を回っていた。
平日だというのに、街は若者たちで溢れかえっている。
学校帰りの学生の姿も多かった。
瑞貴が指定したのは竹下通りにあるヘアサロンだった。

美容師でも聞き込みをかけたのだろうか。
原宿竹下通りは美容室で犇めきあっている。立地条件と話題性が、一旗揚げようと思っている野心家な美容師たちのメッカだ。実に浅ましい限りだ。
私自身、仕事で原宿周辺を張り込むことはよくある。ファッション誌を開けば、芸能人たちの行きつけの店が紹介されている。それから行動範囲を手繰っていくことはままある。
ヘアサロンは原宿の裏通りの細い路地の先にあった。
私はヘアサロン近くのコインパーキングに車を止め、瑞貴が来るのを待っていた。
店内が外から見えるガラス張りの店舗で、外観は女性受けしそうな白を基調にした金を掛けた作りだ。席はすべて客で埋まり、スタッフが洗髪やカットなどの施術を行っている。
繁盛しているようで、若い女が引っきりなしに店に入っていく。
よく予約が取れたものだ。
数分で予約は埋まるという話だから、もともと予定にあった行動なのだろう。
このヘアサロンの事はよく知らなかったが、瑞貴が利用するくらいなのだから、有名な店なのかもしれない。
車中で、私はシートを倒し、横になりながら気を揉んでいた。
瑞貴とどんな顔をして会えばいいのか、分からなかった。
公園でのことが頭を掠める。
涙に濡れた瑞貴をフォローできずにいた自分が腑甲斐無かった。
軽口や冗談は苦手なほうではないが、あんな状況ではさすがの私もなす術はない。
昔からそうだった。修羅場や愁嘆場になると言葉が出なくなる。
嵐が過ぎさるのをじっと待ち、言い訳を諦める。
私は軽い疲労感を感じ、いつしかねむりにおちた。
ガラスを叩く音が聞こえ、私は目が覚め、身を起こす。
一人の女性が立っていた。

瑞貴だった。
思わず我が目を疑った。
私は助手席のドアを開ける。
「こんな時にって思われるかも知れませんが……」
瑞貴は言う。
「……いいえ」
瑞貴の長く美しい黒髪が、肩に掛かる程度まで短くカットされていた。
印象がまるで違っていた。
長い髪の時は大人の女そのものだった。
だが、今の瑞貴は陰の美しさに、陽の美しさが加味され、若返った感じになっている。
陰気な印象を吹き飛ばすような溌剌さが、全身から放たれている。
気恥ずかしそうに視線を泳しながら「似合いますか？」と瑞貴に尋ねられたとき、言葉が出なかった。
不覚にも自分の状況を忘れそうになった。
「よく似合っています。とても……」
私は慌てて答える。
まるで中学生のような受け答えだった。
「……本当ですか？」
恥ずかしそうに尋ねる瑞貴に、私は「ええ」と頷いた。
髪型を変えることで、心機一転を図ったのだろう。
私には瑞貴なりの決意の表れに思えた。

強い女だ。
素直にそう思った。

生まれ変わった瑞貴のお陰で、私の中で蓮沼の事が完全に消え去っていた。
瑞貴は助手席のドアを開けると、乗り込む。

いつもの瑞貴から伝う柑橘系の体臭が鼻を擽る。ざわめいていた自分の心が、落ち着いていくのが分かった。
「新たな瑞貴さんを祝して、どこかで食事をしましょうか。もちろん今後の打ち合せを兼ねて」
「はい」
瑞貴の声は弾んでいた。
瑞貴に感化されたのか、私の気分も弾んでいた。
焦るべき状況でありながら、むしろそれを楽しむように、私はエンジンのキーを回した。

急展開

私達は渋谷にあるチャイニーズ・ダイニングへ行った。
予約の五時半まで、少し時間を潰し、店に入った。
裏通りに面した所に店の入り口はあった。地下にある都会の隠れ家的な店だ。
私と瑞貴は階段を降りていく。
「よくご存じですね。こういう店――」
私の頭上で、感心したように瑞貴は言った。
「私の仕事は芸能人を相手にしていますから。自然と、ね」
私の言葉に瑞貴は、苦笑した。
個室の場合、予約が必要だが、直前の確認の電話で簡単に取れた。
芸能人との食事は個室がある店に限られる。
知名度はあるが、後ろ盾の無い瑞貴は格好の週刊誌の的でもある。
十分注意する必要があった。
芸能人とはいつもこんな苦労をしているのだろうか。
普段は探る側の為、気が付かないが彼らのわずらさしさが初めてわかった。
「いい店ですね」
瑞貴に気にいってもらい、私は一安心だった。
フロントで名前をスタッフに告げ、個室席に案内される。
店は暗く、間接照明が微かに照らすだけだ。
夕方の時間帯の為か、空席が目立つ。
これから仕事帰りのサラリーマン連中で込み、忙しくなるだろう。
テーブル席に座り、一通り注文が済むと瑞貴が「セレブの人から電話が来たって言ってましたよね……」と尋ねてきた。
私は大きく息を吐きながら頷いた。
「電話越しで散々遣り合いましたよ。生きた心地がしなかった……」
私の大げさな仕草に、瑞貴は笑った。

「そちらこそ成果はどうでしたか？」
私は尋ねると、瑞貴は頷く。
「やはりパーティーは開かれるみたいですね」
「確かですか？」
「……はい。知り合いにファッション雑誌モデルの娘が居るんです。買物やヘアサロンに付き合うついでに色々聞き出せました。もちろん、わたしの事は驚かせたいから、こちらの事は言わないで欲しいと念を押しておきましたから」
相変わらずこういう部分はそつが無かった。
人付き合いは下手そうだが、交友関係は中々広いらしい。
「芹沢玲香の直接ではないんですが、知り合いみたいな娘と繋がりがあって……。芹沢はやはり誕生日パーティーをやるようです。モデル仲間の中でも芹沢の誕生パーティーは話題になっています。結構参加を望んでいる娘たちが多いそうで……。今年の誕生パーティーは、その参加者が中心になって仕切るそうです」
「……まるで、大所帯の芸人軍団だな」
私の言葉に、瑞貴は笑った。
芸能人は徒党を組むことがとかく好きな連中が居る。
大物ほど金はあるが、孤独で寂しいのだろう。
瑞貴の情報は中々興味深く、面白い内容だった。
朝早く行動を起こしただけのことはある。
「……次は、根津さんの番ですよ」
瑞貴に促され、私は宮島からもたらされた情報や神山とのやりとり、そして曽根崎からの電話の内容を再度伝える。
「仮に、セレブが大金を提示してきた場合、情報を提供するんですか……？」
瑞貴は疑問そうに尋ねてきた。
「向こうに提供する情報は別に真実でなくても構わない、ということですよ」
あっ、と瑞貴は声を上げる。

「偽情報を流して、向こう側を混乱させる……」
「そういうことです」
私の答えに、瑞貴は満足そうに微笑んだ。
曽根崎は私を情報源の一部として見ている。それを利用しない手はない。
私はあることに気が付く。
曽根崎が私の携帯で電話をしてきたということは、私の携帯の情報を抜かれている。
当然、芸翔や神山との関係はもちろん瑞貴と私の繋がりを相手側に知られていることになる。
私は急に不安になった。
顔に出たのか「どうしました？」と瑞貴が尋ねる。
「……いいえ」
私は自分の疑念を瑞貴に説明した。
「……それはあまり心配しなくても大丈夫なんじゃないでしょうか？」
「なぜですか？」
「ですから、わたしの情報源は貴方であるということにすればいい訳で……」
「……ああ、成程」
「もし、相手側に尋ねられたら、情報を提供しあう間柄だということにすれば……」
瑞貴の機転には目を見張るものがある。
そして自らの小心ぶりに、私は笑った。
「……考えてみれば、タレントと探偵がこうして一緒に居るなんてありえませんからね。少し自意識過剰でした」
「――大丈夫です。蓮沼だったら上手く誤魔化せます。任せてください」
頼もしかった。
やはり瑞貴の方が度胸が据わっている。女は土壇場に強い。

「……さっきの話を続きなんですけど、開催場所は六本木らしいんですが、会場は何処なのかは、まだ決まっていないようです」
「そうですか……」
さほど問題ではなかった。時が来れば自然と分かるだろう。
今の状態でこれほどの情報が流れているのだ。
主催側が自分たちの優位性を誇示するために、情報を放流するのは目に見えていた。
オーダーした料理や飲み物が運ばれてきた。私は運転があるため、ウーロン茶を瑞貴はビールを頼み、乾杯すると一気に飲んだ。
しばらくの間、私達は運ばれてきた料理を楽しんだ。
餃子や海老のチリソース煮、棒々鶏に海鮮スープなどに舌鼓を打つ。
瑞貴と私の間でたわいもない会話が続いた。今度公開する映画の話や、話題のスイーツや料理など、互いにある蟠りを払拭しようとしていた。
話も尽き、注文した料理が一通り片付いた頃、私はこれからの自分の行動をどうするか、思案していた。
藤崎の再度のスクープにより、芹沢周辺の調査活動は大幅に制限される事になる。
張り込みを行なえば、曽根崎とかち合う可能性は高い。
芹沢の携帯のデータを調べれば、何か別の事実が判明したかもしれない。
犯罪を問われる覚悟で、入手したにもかかわらず奪われるなどいい面の皮だ。
私は自分のミスを改めて悔いた。
瑞貴を見ると、いつしか箸を置き、バックからサプリメントが入ったピルケースを取り出していた。　私はとっさに手を延ばし、瑞貴の腕を掴んだ。
「――瑞貴さん。差し出がましいようですが、少し飲みすぎです」
私の忠告に、瑞貴はハッとなる。

瑞貴は食事の後にダイエットサプリメントを常用している事が多かった。
肌の荒れもサプリメントが原因だろう。それだけストレスが増しているということだ。
サプリメントは瑞貴にとってもやは信仰そのものである。薬に依存することで今の状況を乗り切ろうとしている。麻薬でないとはいえ、身体に良いはずが無い。
「そんなものに頼らなくても貴方は充分美しい――」
「癖になってて……」
ピルケースをバックに戻すと、瑞貴は「根津さん」と私を呼んだ。
「はい？」
私は返事をする。
「――依頼人は誰なんですか？」
突然の瑞貴の問いに、私は無言になった。
「……そろそろ教えてくれても、いいんじゃないですか？」
瑞貴は微笑しながら言った。
私は観念した。
もう、瑞貴の頼みには抗えない自分がいた。
「――芸翔の神山さんです」
私の言葉に、瑞貴から大きくため息が漏れた。
「……お分りでしたか？」
「なんとなくは――」
瑞貴はどこか落胆したように言った。
「頭の良い貴方ならば察しはついているとは思っていましたよ」
「皮肉……ですか？」
瑞貴は微笑みながら、私を睨む。
その様子はえり以上に可愛かった。大人の女が見せる子供じみた仕草は、時に若い女以上の愛らしさがある。
「まさか……。気分を害したならば謝ります」
私は慌てて言った。

「……頭良くなんかないですよ」
瑞貴は目をふせた。
「――良ければ、もっと芸能界で成功しています。仕事の為ならば、好きでもない人と簡単に寝るような女ですよ。バカです、わたしは……」
瑞貴は恥じるように俯く。
「……仕方の無いことですよ。相手は強権を振りかざして貴方に迫った。逃れる術はない」
彼女が男の扱いに長けていたなら、もっと上手く躱していたかもしれない。
それが瑞貴の長所でもあり、欠点でもある。
その不器用さは嫌いではなかった。
「……私もお聞きしてよろしいですか？」
「はい」
「私の調査結果を聞いてどうするおつもりだったんですか？」
瑞貴の大きくて美しい瞳が泳ぎがちになる。瞳の揺れが止まると私に視線を定めた。
「……初めは仕返しでもするつもりでした」
「どういった風に……？」
「……わかりません」
瑞貴の答えに会話が止まる。
「そんな答えばっかり――」
瑞貴は苦笑し、残っている料理を箸でつついた。
「……残酷なことを言うようですが、仮にネタを押さえたとして、あなたの芸能界復帰は極めて難しいと思います」
私の言葉に瑞貴の箸の動きが止まった。
「……私には残念ながらそういうコネはありません。神山さんとの関係もあくまで依頼人と探偵という極めてドライなものだ。現に神山さんは言葉とは裏腹に私の扱いに配慮の欠けらもない。彼をご紹介してもかまいませんが、一筋縄ではいかないでしょう。こんな危

険を犯す意味はあるのでしょうか……？」
「……そうですね」
私の言葉に意気消沈したのか、瑞貴の目線は下がっていた。
寄る辺無き彼女にとって、私が残された最後の砦だというのは理解している。
芸能界を追放されたら、瑞貴が路頭に迷うのは想像する迄もないことだ。
だからといって別の仕事に就くこともきわめて困難だろう。
芸能人の転職ほど悲惨の一言につきるものはない。
顔は知れ渡っているし、どこにいても周囲の注目を浴びる。
そして例外なく、冷笑や嘲笑の対象となる。
残された道は結婚引退しかない。
下手に事務所を移れば、いま以上に望まない仕事をやらさせるハメになる。
バラエティー番組で慣れないトークをさせられ、コント番組で屈辱的な役をやらされるかもしれない。そんな瑞貴をテレビで見るのはあまりに忍びない。
「でも、芹沢玲香を道連れにすることならできるかもしれない――」
瑞貴の瞳だけが浮き上がり、私を見る。
「それでもいいなら、あなたに協力しますよ」
「本気ですか？　本気で仰ってるんですか……？」
「ええ」
私は頷いた。
「森川の居場所を掴み依頼人に伝えれば私の仕事は終わる。森川を捜せとは言われているが、ネタを押さえろとは言われていませんから」
「なぜですか？　そこまでする理由は……？」
「貴方には借りがある――」
私のその言葉に、瑞貴の表情が甘えるような、どこか媚を含んだ表情になった。

それは女の顔だった。
芸能人として視聴者に曝す、小川瑞貴としての偽りの人格ではなく、生身の女である小川康子という本当の自分を剥出しにした瞬間でもあった。
小川康子として私に向き合っている。少なくとも今の私にはそう見えた。
錯覚かもしれない。
私はその錯覚に酔っていた。
錯覚でない証拠に瑞貴は私の手に自らの手を延ばしていた。
肉体関係を迫るつもりはまだ無い。
もし、そういう関係になれば私は後に引けなくなる。
男女の関係になれば、別の要素も絡んでくる。
それは感情だ。
感情が絡めばプロとして仕事を貫徹できない可能性が高くなる。
思わぬミスも招きかねない。
今の段階でミスはまだ犯せない。
私はそんな自分に笑いそうになった。
私はもはやプロではない。
依頼人を裏切ろうとしている。そして、一人の女を巻き込んでいる。探偵のみならず男としても失格だ。
だからこそ、抱けない。今は。ミスをもはや起こさないために。
探偵ではなく男として私の死守したい最後の一線だった。
「……お願いします。でなければ、わたしは次に進むことはできない」
「わかりました――」
瑞貴の言葉に、私は己れの覚悟を決めた。
宮島はグラスを煽る。グラスの中身を飲み干すと周囲の女が拍手する。

宮島のピッチが早かった。
顔は赤く、酔いが回っているのが分かる。
私と宮島は高田馬場にあるキャバクラに来ていた。安さが売りの激安店で、都内と比べ店も狭く、揃えているキャストの質もお世辞にも良くない。
だがその分気楽に楽しめて、キャストのノリもよかった。仕事でなければ私も弾けただろう。
あくまで主役は宮島だ。
店の角のボックス席で、キャバクラ嬢が盛り上げる中、私は宮島にどんどん酒を勧める。宮島が曽根崎に関するネタを掴んだということで、約束通りキャバクラで飲む事になった。
別の客からの指名が入り、宮島側のキャバクラ嬢が席から離れた時、私は「芹沢玲香が誕生日パーティーをやるっていう噂があるんだが……」と宮島に尋ねた。
「……相変わらず耳が早いですね」
「何、何なの話？」
私の隣のキャバクラ嬢が話に食いつく。
「……お客さん何やっている人？」
別のキャバクラ嬢が尋ねる。
「芸能関係」
私は即答する。
キャバ嬢が一気に色めき立つ。
体を密着させて、媚態が先程より際立つ。
「……根津さん」
宮島が窘める。
「別にかまわないだろう……？」
嘘はついていない。
宮島は大きく息を吐く。アルコール臭がすでにきつかった。
「……もう、手を引いたほうがいいんじゃないんですか？」
宮島は珍しく私に忠告してきた。

「引けない理由がある」
「……女ですか？」
宮島の問いに私は戸惑う。
「――そんな所だ」
呆れたように溜め息を漏す宮島の肩を、私は抱く。
「……また奢るよ。今度は高級キャバクラだ、六本木の。今回、色々迷惑も掛けたし、お礼もしたい。今回のことのケリが尽きしだい必ず奢る。約束する」
「えー、ひどーい」
宮島の席に座っているキャバ嬢が口を尖らせる。
「……拗ねないの。また来るから」
宥める宮島はキャバ嬢の後から抱きついた。
「わかりました」
頭を掻きながら宮島は観念した様子だった。
「……場所を変えましょう。お勘定して」
引き止めるキャバ嬢達を振り払うように、私たちは席を立った。

キャバクラを出ると、私たちは酒を抜くために、サウナに向かっていた。
サウナ室で汗をかく間、互いに無言だった。
私自身何を聞くべきなのか、頭の中を整理していた。
サウナ室を出ると私と宮島は備え付けのマッサージ機に身を委ねた。
気持ちが良かった。
もみ玉に背中をほぐされ、私は思わず声を出した。
私も疲れているのかもしれない。
「芹沢をマークしている連中がいるんです」
宮島が口火を切った。
「誰だ？」

私は尋ねる。
「ショットアップです」
「本当か？」
「……ええ。芸翔のスクープを仕掛けた連中に間違いありません」
「どういうことだ？」
「さあ、そこまでは……」
宮島は首を傾げる。
「……芹沢のネタを捜している連中が他にもいるんですよ」
「どういう連中だ？」
「いずれもセレブの息がかかった連中ですよ。まったくどいつもこいつも欲の皮つっぱらかして、大手芸プロの言いなりになりやがって……腹が立つ」
「……耳が痛いな」
私は曽根崎の言葉を思い出していた。
借りは返すと。
セレブも芸翔に対する報復行動を本格的に始めたということだろうか。
そのために、私に聞き込みを掛けてきたのだろうか。
いずれにしろ、もうあんな思いはしたくなかった。
いま思えば、連中はどこに私を軟禁したのだろうか？
どこかの事務所だろうか……？
忌ま忌ましい出来事だったが、掘り起こし、思い出す必要があるかもしれない。
「……何かやらかしたんですかね。芹沢は？」
「さあな」
「……何か掴んでるんですか？　教えてくださいよ」
宮島が私に詰め寄る。
勘の鋭さは女並みである。
宮島には盗撮映像の件は伝えていない。
信用してしないわけではないが、まだマスコミにリークする時期

ではない。
ネタを漏らせば、宮島の性格上、裏取りに奔走するだろう。
それは宮島を危険の火中に巻き込むことになる。
もっとも現時点でネタの信憑性は極めて薄い。
バラしたところで、中年雑誌の飛ばし記事扱いが関の山だ。
私自身まだ確証は得ていないのだからだ。
「……ないよ。何か掴んだら、宮島ちゃんに真っ先に教えるから、そろそろ曽根崎について教えてくれよ」
私ははぐらかすと、本題に入るよう宮島を促した。
「曽根崎ですけど、こいつノンキャリなのに警部補まで努めてるんですよ」
「ほう」
「……いろんな意味で有能な刑事だったらしいです。あいつが警視庁を辞めた理由ですが、ヤクザの目溢しする事でネタを取るっていう捜査方法の為、癒着が取り出たされて馘になったらしいんですわ。なんでも金融業者への情報漏洩と収賄容疑の罪で詰腹切らされたって……」
警察と暴力団の馴合――公権力にとっては必要悪なのだろうが、実に手前勝手な理論だ。
何故か曽根崎らしかった。
「でも、真相は上司のキャリアが関与しているらしいそうで。飲み屋での豪遊や自宅新築の建設資金なんかに当てられたらしくて、捜査対象は末端の警官までに留まり、キャリアの関与はうやむやになったそうで……。その詰め腹を切らされた格好で、懲戒免職処分寸前のところで上司に依願退職を求められ、辞表を提出したそうです。だから書類送検されてないんですよ」
「面白いな」
「……家族とは離婚しています。離婚した女房に娘がくっついて行ったみたいです。娘は来年進学らしくて、慰謝料やら養育費に加え、入学金が掛かるため生活には汲々しているんじゃないですか……」

「……ということは子供を突けば、さしもの曽根崎も観念するかもしれんな」
強力な武器を手に入れたも同じだった。
曽根崎の人物像が朧気に掴めてきた。
相手を知ることは、恐れを軽減させる。
「……エグいっすねえ、相変わらず」
私の受けた仕打ちを宮島に説明しようとしたが、思い止まった。
宮島を恐がらせても意味の無いことだ。
「さあ、リフレッシュしたところで、もう一軒行きますか」
宮島が立ち上がる。
「……まだ飲むのか？」
私は呆れる。
「……当ったり前じゃないですか？　夜はこれからですよ」
私は内心うんざりした。徹底的に集るらしい。宮島との夜はまだ終わらないようだ。
早く帰って、瑞貴の顔が見たかった。

朝の光が眼球を苛む。
瑞貴の部屋への帰宅途中、私は出勤途中のサラリーマンや学生とすれ違った。
こういう瞬間、つくづく自分が社会から隔絶された存在であることを思い知らされる。
結局、宮島につれ回され、朝まで飲まされるハメになった。
だだでさえ酒は苦手なほうなのに、胃が重く、頭が冴えない。
ふらふらの状態で瑞貴の部屋へ着き、ドアを開けると、瑞貴が出迎えに来た。
宮島から得た情報を心待ちにしていたのか、目覚めは早かったようだ。
眼鏡姿だが、すでにメイクは済ませていた。
リビングのテーブルには私の朝食と思われる、ラップを貼った皿

が用意されている。
パンにハムエッグとサラダ、と在り来りな内容だった。
食欲はなく、一眠りしたかったが、瑞貴の心遣いを無下にする訳には行かなかった。
バターが塗られたパンに噛り付き、サラダを頬張る。
サラダは瑞貴の手作りのドレッシングで、大蒜が効いていて美味かった。
マグカップに注がれたスープを飲みながら、私は宮島からの情報を報告した。
すべてを伝えた後、
「……どう思います？」
と私は瑞貴に尋ねた。
瑞貴は食事を一時中断し、テーブルに肘を突く。
テレビの音が部屋の中で響いた。
活字媒体の内容を臆面もなく伝えている空疎な内容の番組が垂れ流されている。
日本ではそれを報道番組というらしい。
瑞貴の考えに耽る姿は美しかった。
元々どこか知的に見える容姿の持ち主である。
瑞貴は結論に至ったのか、顔を上げた。
「……森川さんを誘き出すためではないでしょうか」
瑞貴の言葉に、私はハッとした。
「芹沢玲香がバッシングされれば、森川さんは黙ってられないでしょう。なんらかのアクションを起こすはずです。その期を狙って森川さんを捕らえる……」
「……なるほど」
私は納得した。
文句の着けようがない答えだった。
「何を焦ってるんでしょう、セレブは……？」
瑞貴の問いに答えられなかった。

「……もう一度、蓮沼を探ってみますか？」
瑞貴の大胆な申し出に私は我が耳を疑った。
「本気ですか……？」
私の問いに瑞貴は頷く。
「……あの男、独立がどうとか言ってましたよね」
「ええ」
「それ、何か関係あるんでしょうか……？」
混乱している。
頭の動きが鈍い。寝不足と酒の影響だろうか。
「……どうします？」
「これ以上あなたに負担は掛けられない」
私は断った。
この期に及んで綺麗事言う自分が滑稽だった。瑞貴の方がよっぽど腹が据わっている。
「この前、わたしの意志を伝えたでしょう……？」
瑞貴は怒ったように言った。
気圧された私は、誤魔化すように鼻の頭を指で掻いた。
「……わかりました」
私は言った。
「……でも、聞き込みはまだいいでしょう。とりあえずは芹沢会の動向と、蓮沼を張り込んでみますか。消極的かもしれないが、リスクが少なく確実だ。曽根崎も蓮沼の近くに今はいないでしょうし」
瑞貴は「わかりました」と納得したように頷きながら言った。
気が抜けたのか、欠伸が出た。
瑞貴は微笑む。
「少しお休みになりますか？」
「……そうですね」
瑞貴も欠伸をしていた。
瑞貴は恥ずかしそうにすぐ口を手で隠す。
「……わたしも二度寝しようかな」

そう言うと瑞貴はダイニングを出ていった。
私はスーツを脱ぎ、下着姿になった。フローリングの床に横たわると、近くに畳んである毛布を頭から被った。
急激に疲労を覚え、眠りはすぐに訪れた。

高架道路の下に私は居た。
その大きさから、六本木の高速道路の真下であるとすぐに分かった。
隣で腕を組んで横断歩道を一緒に歩いている女が居る。
瑞貴だった。
私が瑞貴に何かを語りかけようとした時、瑞貴は微笑する。
私は瑞貴の腕を掴む。
瑞貴は私から腕をするりと抜くと、早足で逃げた。
私をからかうような笑みを浮かべている。
私は追い掛ける。もどかしいほどに、足が動きが鈍く、歩みが遅い。
歩を進めているのに一行にアマンドに辿り着かない。足が思うように動かず、歩にスピードが出ない。
「待ってください――」
私は声を搾り出すように言った。
瑞貴が困ったように、歩みを停めると、首を傾げる。
瑞貴の唇が開いたとき、身体に揺れを感じた。
私は眼が覚めた。
私の傍らには瑞貴が居た。まだ夢の中を彷徨っているようで現実感がない。
意識がどこか混濁している。
一方でどこか気恥ずかしかった。
目蓋が思うように開かず、わずかな隙間で壁時計を見ると針は二時を回っている。
「……どうしました？」

口臭を気にしながら、私は尋ねた。
油断するとすぐに眠りに落ちそうな状態で、声が思うように出ず、代わりに欠伸が出た。
「今さっき、コンビニに行く際、下のメールボックスを確認したんですが……」
瑞貴は二つ折りになった紙を差し出す。
紙がかすかに震えている。
瑞貴は興奮しているのか、頬が紅潮していた。
私は受け取ると紙を開いた。
眠気が吹っ飛んでいた。頭を殴られたような衝撃だった。
紙には電話番号と思われる数字と共に名が記されている。
『森川』、と――。

電話越しの心理戦

私はシャワーを浴び、眠気を完全に取ると、秋葉原へ買い出しに走った。必要な器具をを買い揃えると、すぐに瑞貴の部屋に戻った。

買ってきた部品と共に車に積んである器材を部屋に運び込み、セッティングへ入った。

携帯電話に録音用アダプターを取り付けると、自前のパソコンに接続した。ダイニングの角にあるコンセントに延長コードを接続し、電源を近くに確保していた。イヤホン端子にハンディトラスターとフリーハンズマイクを接続する。

すべてを終える頃には、すっかり夕方になっていた。

私はパソコンの電源を入れる。

ＯＳが立ち上がると、ポインターを動かし、インストール済みのソフトのアイコンをクリックする。

「……これはなんですか？」

セッティングに忙しい私に、近くに居る瑞貴が興味深そうに尋ねてきた。

「嘘発見ソフトです。興奮や情動から生じる緊張やストレスを音声で判断し、相手の話が本当か嘘かを分析してくれます。真偽の判定とストレス度をグラフィックで表示してくれます」

携帯電話編集ソフトと同様に、私のパソコンにインストールしてある調査用のソフトウェアだ。

森川の真意を聞き出すための、対応策である。

「……これ信用できるんですか？」

「イスラエルの国境警備隊で使用されているのと同じシステムで精度は八五パーセント……中々馬鹿にしたものではありませんよ」

「まるで、警察みたいですね」

瑞貴のさして面白くない冗談に、私は曖昧に笑った。

私はポインターを動かし、ソフトをリアルタイムモードにする。

モニターに表示された音質のグラフを表示している。
さらに電話にはＩＣレコーダーが繋がっている。
電話の内容をＩＣレコーダーに記録するためだ。
「……私が電話してもよろしいですね」
私は瑞貴に確認する。
「もちろんです……さっそく電話しますか？」
「……いえ、もう少し焦らしましょう。この時間だとどこかに行っているかもしれないし、向こうから電話がくるかもしれない。がっつくと、向こうに主導権を握られてしまう」
私の言葉に瑞貴は頷く。
すでに心理戦は始まっている。
負けは赦されなかった。

午後十時を回った頃、私はパソコンに繋がっている携帯電話を手に取った。
この時間まで森川から電話は無かった。
結局、私が折れた形になった。
瑞貴が傍らでイヤフォンを耳に装着している。
携帯を握る手に力が入っている。
私はすでに緊張していた。
紙に書かれた電話番号を入力し、最後に通話ボタンを押した。
呼び出し音が数回鳴ると、『この電話を転送します』という案内が流れた。
留守電か、と思いきや、電話は繋がった。
「……森川さんですか」
私は電話の向こう側に話しかけたが、沈黙だった。
電話の向こうの雑音にまで気を配る。思ったほど雑音は少ない。外ではないようだ。
――……なぜ蓮沼を調べている？

やっと言葉が返ってきた。野太い男臭い声だった。
――誰に頼まれた？
声や言葉からは感情を読み取ることができない。
ストレスのメーターにも変化はない。＜極度の情動＞と出ている。
「……お答えできませんね」
私は拒否する。
「こちらも色々お聞きしたいことがあります。こうなったのも何かの縁だ。この際互いに情報交換をしませんか？」
――……何の為に？
＜強い緊張＞――警戒しているようだ。
「……お互いの為に決まってるじゃないですか」
私は白々しいことを言う。
向こうがトラスターを使っていたら、嘘とはっきりとでていただろう。
「私は依頼人を信用していない……真意を知りたいんです。不可解なことが多すぎる。いざとなれば、依頼は放棄する覚悟はある――」
――……だから、小川瑞貴をけしかけて蓮沼に接触させたのか？
森川の言葉に驚愕した。
すでにあの頃から、森川は蓮沼を監視していたようだ。
どこか森川を舐めていた自分の愚かさが恥ずかしくなる。
心理状態は＜興奮＞――私も同じ状態だった。
――お前の思う通り、神山は信用しない方がいい。
＜真実＞――私の情報は芹沢に筒抜けなのだろうか。
そう思うと私は、「貴方の行動は芹沢さんの意志と考えてよろしいのですか？」と口にしていた。
――……俺の行動は芹沢とは関係が無い。芹沢とはしばらくの間、連絡も取っていない。全ては俺の意志だ。そもそも芹沢は監視されている。部屋を調べたお前ならよく知っているはずだ。
＜不正確＞――芹沢が裏で糸を引いている可能性はフィフティ・フィフティ。

「片岡さんの指示で、芹沢さんを貴方が監視していたとお聞きしていますが……？」
一呼吸空くと、
――……言ってみれば、芹沢は軟禁状態だ。神谷を脅すことで、片岡に揺さぶりをかけたが、かえって片岡の警戒心を高めただけにすぎない。片岡からなんとしてでも芹沢を取り戻さなくてはならない。
と、森川から返ってきた。
＜真実＞だった。
その割には芹沢はのびのびやっている。この前のイベントでも明らかだ。
芹沢にとって森川がどれほどの重要度を締めてるかは甚だ疑問だ。
「……貴方は芹沢さんの何を握ってらっしゃるんですか？」
私は核心に迫る質問を放っていた。
――お前には関係のないことだ。
「監視の際に入手した盗撮映像か何かですか……？」
森川は答えない。
私は舌打ちした。
「共闘しませんか？」
私は森川を誘った。
――……お前は信用できない。
森川は拒否する。
＜真実＞。
「……御尤もです」
私は苦笑した。お互い様だった。
「でも、私は蓮沼氏よりはましだと判断なされたから、私と接触を試みた。違いますか？」
――確かに俺とお前との情報を統合すれば、疑問は全て氷解するかもしれない。
真偽は最低レベル。

つまり＜嘘＞だ。
ディスプレイのストレスメーターが一気に跳ね上がる。
自分の有力な情報を提供する気はないらしい。
声色に特に変化はないが、何かと嘘のつけない性分らしい。
「だったら尚更……」
――お前は信用できないといったはずだ。
森川はきっぱりと言った。
森川は芹沢のことで頭がいっぱいのようだ。
こんな状態ではとても互いに分かりあえそうもない。
私自身、森川を利用することはあっても、森川と組むつもりはない。
なにより、そんなことは瑞貴が許さない。
芹沢と馴れあうなら、蓮沼の方に走るだろう。
だが、森川をこちら側に引き込まなければ、今回のことに決着は着かないだろう。
瑞貴の顔を見ると、微かだが眉が拠っている。
――……調べてもらいたいことがある。
「なんでしょう」
――トウキサチ。
「……トウキサチ。誰ですか？」
頭の中を検索する。該当する名前はない。
漢字でどう書くかを、森川に尋ねると『東希紗智』と森川は答えた。
――タレントの卵だ。年齢は十五、六……蓮沼が売り出そうとしているらしい。それ以上のことは俺も知らん。
＜真実＞――森川の腹の中が少しだけ読めた。
森川も頼れるのは私だけだということだ。
「……断ると言ったら？」
――小川瑞貴のことを蓮沼にバラす。
思わぬ方向から襲撃されたような気分だった。

ソフトは＜真実＞と回答している。
額を触ると、粘っこい汗を掻いている。瑞貴の顔にも緊張が浮かぶ。
――……小川とお前がどういう関係はどうでもいい。だが、俺はお前と小川が一緒に居る写真を抑えてある。蓮沼がこのことを知ればどうなるか、想像が着くな？
私は再び瑞貴の方を見る。瑞貴の不安げな顔をしていた。
瑞貴の芸能生命は完全に断たれる。
つまり森川はわたしたちより優位に立てると踏んだうえで、接触してきたのだ。完全に予想外だった。
「……貴方が調べればよろしいじゃないですか」
私は無駄だと知りつつ、子供じみた抵抗を試みた。
――俺の噂は業界中に知れ渡っている。派手な動きはできない。
「罠にでも掛けようと？」
――そんなことはしない。
判定は＜ごまかそうといる＞。
ストレス度も高い。
「……分かりました。お引き受けします。でも、一つ約束してください」
――なんだ？
「貴方が芹沢玲香を守りたいように、私も小川瑞貴を守りたい。私はともかく彼女が不利になるような事は絶対にしないでいただきたい」
私が森川と同じタイプの人間であるということを思わせることで共感や親しみを産ませることが狙いだった。
さらに森川の良心に働き掛けることで、瑞貴や私のリスクを減らす。
交渉術の初歩だ。
――考えておく。
＜嘘と真実＞――ソフトでも判断できないらしい。

少なくとも森川を裏切らなければ、瑞貴の安全は確保できるだろう。
「東希紗智に関しての何を調べればいいんですか……？」
私は森川に尋ねた。
――姿、顔、形。蓮沼がどういう戦略で東希を売りだそうとしているのか、また現在決まっている仕事の内容なども知りたい。おそらく蓮沼自身が動いて色々根回しをしている最中だ。
「東希祐希に関しての情報は……？」
――モデル事務所がある。事実上、蓮沼のものだ。会社運営費はこれも蓮沼が所有する番組制作会社を通して、この会社に流れている。ペーパーカンパニーと大差はないが、番組製作費との名目により、多額のマージンやキックバックがこの会社を通して蓮沼に流れている。おそらく東希紗智のプロモーション経費もここから捻出されているはずだ。
＜真実＞――このネタは事実らしい。
会社に隠れて、小遣い稼ぎをしているのだろう。
子悪党のやりそうなことだ。
「本人の画像や写真があれば送っていただきたいのですが」
――……自分で調べろ。まだお前に俺の居場所を知られるわけにはいかない。もっとも俺自身、東希紗智の顔を知らない。それを調べるのもお前の仕事だ。
舌打ちを飲み込む。
やはり簡単にはいかない。
「……もう一度お聞きします。なぜ私に接触してきたんですか？」
答えが返ってこない。
「……芹沢の誕生日が近いからですか？」
沈黙。
――小川ならば蓮沼の真意を聞き出せる。そう思ったからだ。
＜嘘＞――モニターを見ながら私は「成程」と呟いた。
森川は蓮沼の真意などどうでもいいようだ。

「だが、調べるのはあくまで私だ。小川さんをあの男の前に差しだすつもりはない」
――……お前次第だ。
＜嘘と真実＞――そう言うと森川は電話を切った。
「……どう思いますか？」
瑞貴に尋ねる。
「わかりません――」
どこか瑞貴は拗ねているようだった。
私は苦笑した。
私のことを疑っているのだろう。
クールな瑞貴が熱くなっている。それだけ瑞貴は私に対し気を許しているということだ。
「……勘違いなさらないでください。芹沢玲香に組するつもりはありません」
瑞貴は不振に満ちた眼差しで私を見た。
私は慌てた。
「森川がキャスティングボードを握っている以上、あの男を野放しにはできない。何よりあの男は芹沢玲香を潰すネタを持っている。ご理解ください」
「証明してください」
瑞貴は私に詰め寄る。
私は反射的に瑞貴と唇を重ねた。
軽く触れた程度だった。これくらいは、してもいい頃なのかもしれない。
私ははっとなった。
キスが停滞していた脳細胞を冴え渡らせたのか、点在していた事実や事柄が線で繋がっていく。
「……どうしたんですか？」
瑞貴が尋ねてきた。
一つの仮説が、私の頭の中でくっきりと形を成していた。

仮説と検証

男女のツーショット写真だった。
モノクロの写真は紛れもなく隠し撮りに違いない。恐らく偽装したカメラで前方に回りこみ、可能な限り近付き撮影したものだ。撮影の標的にされた二人は手を組み、寄り添うにように歩いている。
だが、女の方にどこか不自然な点があるようにも見受けられる。今時、サングラスを掛け顔を隠しているが、撮ってくれと言わんばかりだ。もしかしたら、事務所側のリークかもしれない。
私は運転席で、コンビニで購入したＦＩＮＳＨ最新号を見ていた。芹沢玲香のスクープ記事だった。
相手の男は、服飾デザイナーの仙道譲という男である。何件も自分の店をもつ実業家で、最近はマルチアーティストと称し、有名アーティストのジャケットやＰＶ、飲食店のプロデュースなども手懸けている。馬鹿な女優が好みそうな肩書きだった。金も唸るほど持っているだろう。
いよいよセレブの報復が始まったと見ていいかもしれない。
さほど衝撃的なネタとも思えない。事実、記事は巻頭ではない。数ある記事の中の一つのものだ。はやり、森川を引き摺り出すためのネタなのだろうか。森川が私に接触してきたのも事前にこのネタを掴んでの行動かもしれない。
もう一冊買った女性週刊誌の表紙の見出しには、『芹沢玲香と神谷祐希の現場で大喧嘩』と、デカデカと載っている。
記事の内容はたわいもないネタだが、記事の後半に芹沢担当のマネージャーが退職したという文が記載されていた。森川がＭというイニシャルで表記されている。関係者が見たら危惧を覚えただろう。飛ばし記事とも思えない。真実が絶妙な配合で混ざっている。
私は青山でビルを張り込んでいた。

比較的、張り込みしやすいのが幸いだった。ビルは道路添いにあるため、反対側に車を路上駐車しての張り込みだった。
事務所を張り込んですでに三日が経過している。
森川がもたらした情報のオフィスがあるビルである。ビルには一階には喫茶店で、弁護士事務所などが入っている。最近入ったのか、事務所オフィスの看板プレートは空白だった。
事務所の景気は良さそうだ。売れっ子モデルの存在が居ないにもかかわらず、だ。
場所が渋谷区にあり青山へのアクセスも近いなど、立地もいい。この手のオフィスは大概、住宅マンションで細々活動しているケースが多い。やはりセレブの系列になり、資本援助やプロモーション協力を受けているのだろうか。
登記簿を上げてみたが、商号や代表取締役、役員の全てが辞任・交代されている。会社に内紛、もしくは乗っ取りがあった証拠である。
蓮沼が独立後に活動するための自らの城なのだろうか。
運転席に座り、人の出入りがあれば双眼鏡で確認する。だが、動きは無い。
「誰も来ませんね」
助手席に座る瑞貴が言った。今日は特に予定が無いということで私と一緒に張り込みをしていた。瑞貴はダウンジャケットに、デニムパンツを履いている。外で張り込みが出来るように、着込んできた。
「……あそこの事務所、ご存じでしたか？」
「いいえ」と瑞貴は首を振る。
「……どうせ、蓮沼が誰かから奪い取ったものでしょう」
瑞貴も私と同じ考えらしい。
私はこの張り込みに飽き始めていた。森川の命令とは言えど、何か意味があるのだろうか、疑問だった。
もはや、森川を捜索する必要はない。だが、森川は影を見せただ

けにすぎない。
森に潜んでいる獲物を日の下に引き摺り出して捕らえるには、獲物が欲する餌が居る。
そして、捕らえるためには罠を仕掛けなければならない。
その罠をどうするか、張り込みの間、私はその絵図をどうするかずっと考えていた。
瑞貴の携帯電話が鳴った。瑞貴は携帯電話を開くとすぐに閉じる。
「……蓮沼から最近良く電話が掛かってくるんです。適当にあしらってますけど……」
瑞貴は嫌悪の顔を浮かべながら、溜め息を漏らす。
「でも、こっちを探っている気配はないんです。自分をマークするほど蓮沼は暇ではないし、わたしが恨んで何かをするなんて考え、まったく頭に無いんでしょうね――」
確かにそうだろう。瑞貴の抵抗など蓮沼にとって蟷螂の斧に等しい。
だが、それが狙い目でもある。
蓮沼は瑞貴へ再び執着しつつある。もっとも私も瑞貴を蓮沼に渡すつもりはない。
「森川さんが持っているネタですけど、どういった物なのでしょうね？」
前方を見ながら瑞貴が言った。
「……逆にお聞きしますが」
「はい……？」
「何故、森川は芹沢を監視していたと思います……？」
私の問いに瑞貴は一瞬考えると「会社の命令でしょう」と言った。
「会社に言われただけで、マネージャーが盗聴や盗撮を行なうと思いますか？」
瑞貴は怪訝な顔をする。
「盗聴はよく聞く話ですが、盗撮行為はあまりに行き過ぎた行為と思いませんか？」

「別の目的があった……？」
瑞貴の言葉に私は頷く。
「大金目的、もしくは単なる趣味、ストーキング……」
瑞貴は思いつくままに言葉にする。
私は否定も肯定もしなかった。
「でも、彼が芹沢さんの監視していたとして、監視で得た物品や映像、もしくは記録を易々と他人に渡すものでしょうか……？」
瑞貴の疑問はもっともだった。
「ストーカー行為だとすれば、どんなに大金を積まれても、そういったものは手元においておくものじゃないんでしょうか。もし仮に彼に顕示欲があったとしても、それは周りの人間より目標相手に自分自身の存在を示しますよね……？」
瑞貴の言葉を聞きながら、私はえりの言葉を思い出していた。えりは森川が会社の人間にもっとよく管理しろと支持されていたと言っていた。
「お金が目的というものどうも……脅迫になりますよね。そんな芹沢玲香を傷つけるような真似をするはずはないと思いますけど……」
「……私もそう思います」
私は同意する。
瑞貴と矛盾点を探りながら、私は瑞貴と論議を楽しんでいた。私の中ではある程度回答は出ていた。その答えはすぐに明かさないのは、戯れであった。
「芹沢玲香を引き抜く為……？」
伺うように瑞貴は言う。私は首を振る。
「……芹沢玲香の芸能活動を終わらせるようなネタをもし得たとするならば、それは芹沢玲香をコントロールできる。違いますか？」
私はヒントを出した。瑞貴の口を閉じ、首を傾げる。
「でも、蓮沼は芹沢玲香を嫌っています」
「そこですよ」
私は指摘した。

「森川が監視していたのは会社に言われてというより、蓮沼がそのネタ欲しさに森川を動かしたというほうがしっくりくる」
「どうやって……」
私は答えない。瑞貴はあっ、と声を上げる。
「……森川さんも独立を考えていた――？」
「ええ」
瑞貴の導き出した答えに私は同意した。
結局、結論はそこに行き着く。
一人のタレントに惚れ込んだ男が、会社との方針に合わず仕事が上手く行かない女性タレントを身請けするために、安定を捨ててまで一本立ちしようとする……芸能界ではよくある話だ。むしろ有りすぎる。
「……おそらく蓮沼は、森川の独立に資金援助を申し出た。もちろん資金だけではない。仕事におけるセレブという後ろ盾も、ね。これで独立後の仕事も盤石な体制で行なえる。そんなことを言って、森川をそそのかしたんでしょう」
事実、セレブはそうやって自らの勢力範囲を拡大してきたのだ。
「その交換条件として芹沢玲香の特ダネを要求した……？」
瑞貴が怪訝な顔で訊く。
「独立という話も、もしかしたら芹沢と森川の間で予め上がっていたのかもしれない――」
私はシートにもたれる。
「事務所との方向性の違い、ギャランティの配当や値上げの要求などの金銭面の不満、契約更新の時期。上げれば切りがない……」
私は考えられる可能性を列挙した。
「……なにより、芹沢玲香は後輩の神谷裕希にその座を脅かされつつある。危機感を抱いていたとしてもなんら不思議ではない」
私の言葉に、瑞貴は顔を顰めていた。
嫌悪感の何物でもなかった。
人事ではないのだ。

いつ自分の身に起こってもおかしくはない。事務所に縛り付けるための交渉材料……芸能事務所は時々そういう無茶を行なう。
「そして、そこが蓮沼独立と関係しているのでは……？」
瑞貴は顔を上げ私を見る。
「――蓮沼は自らの独立の条件として、森川を捜してくるように言い付けられた。というのは、実は森川を連れてくることではなく、芹沢を引き抜く事が自らの独立の条件だったと考えればしっくりくる。そしてその為に森川を利用しようとした……」
「なるほど……」
瑞貴も私の考えに納得した。
「……まあ特ダネに関しては、森川自身にもメリットを及ぼすでしょうね」
「どんな……ですか？」
「芹沢が自分を裏切らせないための保険になる――」
瑞貴は再び声を上げる。芹沢の芸能生活に引導を渡すことができるものなのだ。転ずれば、芹沢を縛る首輪になる。
「森川さんは今何をしているんでしょうね」
瑞貴の何げに呟いた言葉は私の疑問でもあった。
森川が蓮沼の弱みを握るために動いていることは明白だ。
そもそも何故、東希紗智のことを調べるように我々に要求してきたのか。
今は時を待ち、どこかに形を潜めているのだろうか？
それとも、我々のように誰かを調べているのだろうか……？
「――根津さん」
瑞貴に名を呼ばれ、私は我に返った。
瑞貴の声は緊張していた。
「蓮沼です……！」
私は瑞貴が指し示す方向を見た。
ビルの目の前に車が一台横付けされていた。
後部座席から、髪を後に撫で付け、てからせた男が現われる。

蓮沼だった。
蓮沼は相変わらず厚顔不遜な様子で事務所に入っていく。
後に一人の娘を伴だっていた。高校生くらいの娘だった。さらに後に現場マネージャーとおぼしき女が後を続く。キャリーケースを引きずる姿から、蓮沼との力関係ははっきりしていた。
森川の情報である年齢が十五、六にぴったり合う。
「あの娘が、東希紗智……でしょうか？」
私は答えられなかった。
だが、肌が粟立っていた。
核心に迫りつつある。私の本能と経験がそう告げていた。
写真に収めたい……探偵としての性だろうか。
素性を知りたかった。

蓮沼一行は一旦事務所に戻ると、すぐに出て、社用車に乗り込んだ。
蓮沼が乗った車両を尾行して着いた先は、築地にある大手映画配給会社の本社ビルの前だった。
蓮沼たちがビルに入り、すでに二時間が経過している。
蓮沼が乗っていた車両は関係者専用の駐車スペースに停められてある。だが、首都高や道路が錯綜しているため、本社ビル周辺には張り込める場所が存在しない。
私は蓮沼の車の後部バンパーに車両追跡用のＧＰＳ発信機を取り付けていた。
車両用発信機はＰＨＳ携帯電話をベースに改造したもので、知り合いの業者に作ってもらった特注品である。曽根崎が私に仕掛けたものなど比較にならないほどの精度を持ち、一〇メートルの誤差でパソコン画面上や携帯のモニターでリアルタイムに追跡することができる。
私はビルから一区画離れた所に車を止め、運転席でパソコンのモ

ニターを眺めていた。
モニターには蓮沼の車両の位置情報が表示されている。
三日という時間をすでに投資している。このチャンス不意にしたくはなかった。
私は蓮沼のこれからの行動を予想していた。
美少女は東希紗智に間違いないだろう。
蓮沼がわざわざ出向き、直々に営業を掛けていることが何よりの証拠だ。
端で見るかぎり、美少女に対しての蓮沼の扱いは丁寧だった。
どこか貴重品を扱うような態度で接している。明らかに瑞貴の時とは違っていた。そのことからも蓮沼の期待の度合が伺えた。
美少女の顔をまだ完全には確認し切れていなかった。横顔からもその美しさは十二分に伺えるが、正面からの写真はまだ収めることができないでいた。
「……もうファンになったんですか？」
瑞貴の言葉には刺があった。
顔を見るとどこか不機嫌そうだった。

「……私が今一番ファンなのはあなたですよ」
白々しい私の言葉に、瑞貴は冷ややかな眼を送ると「あの娘が、蓮沼の言っていた逸材のなんでしょうか……？」と尋ねてきた。
私は困惑と共に、瑞貴の感情の変異に苦笑した。
「……映画配給会社ということは何か映画にでも出演するんでしょうか？」
瑞貴が言った。
「デビューがいきなり映画出演なら確かに箔が付きますね」
私の言葉に、瑞貴は表情を険しくする。
瑞貴が不愉快になるのも無理はない。瑞貴と美少女の芸能界のスタートはあまりに違いすぎる。
映画出演ともなれば尚更だ。

瑞貴の喉から手が出るほど叶えたい夢を、美少女はあっさり掴もうとしている。主演でないにしていも、準主役級なら話題性は十分すぎるだろう。
しかも、その配給と制作を担うのは日本を代表する老舗の映画会社である。
蓮沼の行動は、売り込みを兼ねた独立の為の根回しなのは、明白だった。
瑞貴の機嫌がどんどん悪くなっている。明らかに苛立っていた。
困った状況になった。
その時、蓮沼たちがビルから出てきた。
「行きましょう」
私は内心蓮沼たちに感謝していた。

私は車を発進させて、すぐに蓮沼の車両の後方を取った。
今度、蓮沼たちが向かっていたのは汐留方面だった。
行き先は言うまでもない。業界最大手の広告代理店本社だろう。
私の予想は当たった。
蓮沼と美少女が乗る車は、広告代理店のビルに着くと車両専用口へ入っていった。
私達は蓮沼の車と並走するように本社ビルの周りを回った。
車両用通路はタクシーが数珠繋ぎに並んでいる。
ビルの正面玄関へ近付くと、地下駐車上の入り口が見えた。
蓮沼の車は地下へ入っていった。私はそのまま通り過ぎる。
地下に入ったため、モニター地図から蓮沼の車の位置情報が消失する。
私はハンドルを切り、本社周辺を回る。張り込みに適しているポイントを探していた。
社屋はあまりに巨大だった。全面全てがガラス張りの近代的なビルは、その権威と権力を象徴するモニュメントそのものだった。

本社社屋の周りは大型劇場とホールで構成され、さらに地下にはショッピングモールやレストランなどの複合商業施設が広がっている。
周辺は映画会社以上に高速道路が錯綜し、お世辞にも道路交通は便利には見えない。あらかじめ発信機を取り付けて正解だったようだ。
ビル正面玄関の前の反対車線に車を移動させれば、入り組んだ道路に加え車や人の往来も多い為、追跡に支障を来す。また、正面玄関付近では複数の警備員が常に見回りをしているため、地下駐車場入口付近での張り込みは不可能だ。警備員にも呼び止められてしまうだろう。
位置情報が再び表われるまで、ここからが勝負である。
私は車両専用口の正面の汐留シティセンター側に車を止めた。
シティセンターもまた社屋に匹敵するくらいの大きさを誇っている。
私は本社ビルへ目を向けた。
本社ビルの側面ではシャトルエレベーターが上下している。
最上階にはこの辺一体を眺望できるレストランがあるらしい。
「……根津さんは、ここと取引があるんですか？」
瑞貴が尋ねてきた。思いもよらぬ質問に、私は吹き出してしまった。
「……私みたいな人間、相手にしませんよ」
私自身、営業を掛けたことはなかった。気後れ以前に、この会社は独自の調査部門を抱えている。その情報収集能力は大手の探偵社など比ではなく、マーケティングリサーチから企業の実態、視聴率の調査にまで至る。
入手した情報は都合よく加工され、メディアを通して世間に放流されているのは周知の事実だ。
「……映画に加えて、ＣＭまでも決まっているんでしょうか？」
瑞貴がぽつりと呟いた。

「まさか――」
さすがの私も否定した。
デビュー前の新人がそんなにとんとん拍子に決まるものなのだろうか。それほど蓮沼はやり手なのだろうか。
また車内の空気が重くなってしまった。
クビ直後のタレントにとって、東希のような存在は嫉妬の対象以外の何物でもないだろう。
とにかく、彼女の顔がはっきりと確認できるよう映像もしくは写真に収めなければお話にならない。私の知り合いや情報通に話を聞くことすらままならない。
そもそも、彼女が東希紗智であるという確証はまだ無い。
十中八九間違いないだろうが、決定打に欠く。これでは森川も納得しないだろう。
東希紗智の情報が何かしら入手できれば、森川と交渉ができる。苦労して得た情報を只で渡すつもりはない。いくら瑞貴が人質だとしても、だ。
だが、そうやって確認すればいいのか。本人に直接聞くしかないのだろうか。
考えがまとまらない。
上手い手が見つからず、私はシートに頭を沈めた。
「何を考えているんですか……？」
瑞貴は私の顔を覗き込みながら尋ねてきた。
「どうすれば彼女が東希紗智本人かどうか、確認できるのか考えているんです――」
「……やってみましょうか？」
瑞貴の言葉に私はシートから身を起こした。
「どうやって……？」
「彼女は今日はおそらくこのままどこかで泊まるでしょうから。わたしが直接部屋に行って、彼女に接触してみます」
「しかし、蓮沼が……」

瑞貴は笑う。
「……蓮沼はおそらくこの後、どこかのクラブで飲み歩くか、打ち合せに決まってます。銀座がすぐそこなんですよ。彼女が一人になれば、後は簡単に行くと思います。隠しカメラとかあります？」
自信満々の瑞貴の気圧されるまま、半信半疑の私はグローブボックスからセカンドバックを取り出した。
露店で買ったブランド品の偽物だった。
小さな穴を開け、中にはピンホールレンズを取り付けたビデオカメラが入っている。
私が説明しようとすると、瑞貴は苦笑し「使い方ぐらい分かりますよ」と遮った。
「……お腹空いてません？　何か買ってきましょうか？」
瑞貴が尋ねてきた。
確かに少し腹が減っていた。
「お願います」
私が頼むと瑞貴は頷き、助手席のドアを開けた。
車を降りると、瑞貴はすぐに振り返る。
「もし、動きがあったら、私の事はかまわず追ってください」
瑞貴の言葉に私が頷くと、瑞貴はドアを閉めた。
瑞貴も手慣れてきた。やはり女優より探偵業のほうがあっているのかもしれない。
本気でそう思った。

接触

モニターの地図に位置情報が再び出現したのは数時間後だった。
もう日は落ち、夜がすぐそこまで迫っている。
私は車を動かし、正面玄関へ向かった。瑞貴もすでにコンビニから戻り隣に居る。
正面玄関に着くと、私は車を止め、運転席から正面玄関を覗いた。
本社ビル入り口付近に蓮沼はいた。蓮沼の偉そうな態度が遠目からも分かった。
広告代理店の関係者と思われる二人の男と談笑している。蓮沼が乗っていたナンバーの車とタクシーが横付けると、タクシーに乗り込んだ。
男たちが頭を下げると、タクシーが動きだした。瑞貴の予想通り、蓮沼はこのまま銀座へ向かうだろう。
美少女とマネージャーは歩き出した。
車で追うまでも無く、美少女とマネージャーが入っていったのは、社屋近くにある近くにあるホテル、東京コンラットだった。
美少女は、ここに宿泊するようだ。新人が泊まるには分相応なホテルだ。おそらく明日も本社の方で打つ合わせがあるのかもしれない。本社近くの方が、何かと都合がいいのかもしれない。
すぐに女性マネージャーがホテルから出てくると、車に乗り込み、その場を去った。美少女と一緒には泊まらないらしい。残務処理が残っているのかもしれない。ますます好都合だった。
「……行きますか？」
私は尋ねると、
「接触する前に、まず先に銀座へ行きたいんですが……」
と瑞貴は答えた。
「蓮沼の後でも追うつもりですか……？」
「……まさか」

瑞貴は笑う。
私は真意の読めぬまま、瑞貴の要望どおり一旦銀座方面に向かった。
有名百貨店の前で、瑞貴は車を降り、用を済ませると、再び私は瑞貴を車に乗せ、ホテルへと送り届けた。
私の不安とは裏腹に、盗撮用のセカンドバックと先ほど百貨店で買ってきたものを入れた紙袋を提げた瑞貴は「じゃあ、行ってきます」と笑顔で車を降りていった。
瑞貴を待つため、私は一区画離れたところに車を移動させた。
いいホテルだった。女を誘い、口説き落とす場所としては申し分ない。今度利用してみるのもいいかもしれない。
一方で、瑞貴のことが心配だった。
気を紛らわせるように私はえりに電話した。
――そろそろ、絶対電話かかってくると思ったよ。芹沢さんの誕生パーティーの件でしょ？
えりの言葉に私は苦笑した。察しの良さは相変わらずだった。
「その通りだ」
――ねえ……？　どこからそういうネタ聞き付けるの？
「地獄耳なんだ」
私はえりの言葉を適当に受け流した。
――事務所の人間がその件で大騒ぎしてたよ。何人かは呼ばれるみたい。
やはりえりの耳にも伝わってきているらしい。
「えりは出席するのか……？」
――スルーに決まってんでしょ……。分かってて聞かないでよ。
えりの答えに私は思わず笑った。
――身内だけのパーティーだって。なんか一時はどっかの芸能事務所の社長さんとかも出席するとか、すごっく大げさな話になっちゃって、ドラマの打ち上げみたいにホテル借り切って、大々的に行なうとかいう話もあったらしいよ。

「開催場所はどこか分かるか？」
——一次会は六本木のクラブらしいんだけど……。なんかいろんな人が来るらしいよ。広告代理店の人とかも来るって……。
「クラブ……」
思い浮かばなかった。
——映画の主演が決まって、その前祝いも兼ねてるらしいの。その日だけは仕事は入れてないみたい。それに記事に載ってた彼氏って、六本木ヒルズに住んでるんでしょ……？
「……そうなのか？」
——だから、クラブで一次会やって、その後彼氏ん家でホームパーティでもやるんじゃない……？
えりの洞察力に私は素直に感心した。
——これから遊ぼうよ。情報教えたんだから、美味しいところ連れてって。いいでしょ……？
えりが誘ってきた。どうやら暇らしい。
「……すまない。今仕事中なんだ。埋合わせは今度するよ」
私がそう断ると、えりは、
——最悪。
と、一言言うと電話を切った。
えりとの電話から一時間後、瑞貴は戻ってきた。時間はもう九時に迫ろうとしている。瑞貴を助手席へ乗せると、私はすぐにその場を離れた。
新橋方面へ車を流しながら、私は「作戦はどうでした？」と尋ねた。
「バッチリでした」
瑞貴は満面の笑みを浮かべる。
「何の疑いもなく、部屋に入れてくれました。甘いものには弱い。やっぱり女の子ですね」
何のことはない。
瑞貴が銀座によって買ったものは、今話題のスウィートだった。

それを手見上げに、少女の部屋に向ったのだった。
差し入れと称し、東希紗智の懐に入る――実に女性らしい発想だった。
ゆえに効果的である。業界で長年冷飯を食っているわけではない。
ただ、私には一つの疑問があった。
「どうやって部屋の番号を……？」
私が尋ねると、瑞貴は微笑んだ。
妖艶で含みのある笑みだった。瑞貴のこんな笑みは今までに見たことがなかった。
「……いちお芸能人ですから」
誇らしげな瑞貴の言葉に、私はすぐに察しがついた。
自らの魅力で、ホテルマンを誑し込んだのだろう。
彼女に頼まれたら、男はもとより女性も嫌とは言えないだろう。
何せチョイ役とはいえ、瑞貴にはゴールデンドラマ出演経験があるのだ。その金看板は効果絶大だ。
瑞貴はシートに身体を沈めると、顔に疲労を滲ませていた。何だかんだ言って緊張し通しだったのだろう。
「どこかで何か食べていきますか……？」
私が尋ねると、瑞貴は言葉を発せずに首を振る。
言葉を発することすら億劫になっているようだ。
「お休みください。ついたら起こしますから」
私の言葉に、瑞貴は頷くとシートを少し傾け、目を閉じた。

瑞貴宅に戻ると、私はすぐにセッティングに入った。ビデオカメラをテレビに接続すると、再生モードし、テープを巻き戻す。
瑞貴も目を覚まし、私の様子を黙ってみていた。
車中で軽い睡眠を取ったからか、瑞貴は多少回復したようだ。
食事も取らず、私と瑞貴はテレビの前に座ると、カメラの再生ボタンを押した。一瞬のブロックノイズが走ると、画が映る。

ルームナンバーのプレートが貼られた、ドアだった。
ドアの入り口直前で、録画をスタートしたのだろう。
瑞貴と思われる手が部屋のドアをノックすると、ドアが開いた。
瑞貴の存在に美少女が明らかに戸惑っている様子が映っている。
――御免なさい。突然おしかけちゃって
と、謝る瑞貴に
――いいえ。
と、美少女は微笑む。画面では部屋の中に移動し、美少女はベットに腰掛けた。
画面越しでも、その美しさにはやはり眼を向けるものがある。
当然のことだが、美少女は瑞貴を前にしている為がやや緊張しているようだ。
「――彼女の芸名はやはり東希紗智でした」
瑞貴は言う。
画面の中の瑞貴は東希紗智のことを、笑いを交え必死で緊張を解そうとしていた。
――蓮沼さんの期待の新人だから、どんな娘か興味があって。
瑞貴の言葉に東希は万更でもないような、初々しい反応を見せる。
――蓮沼さんには内緒ね。怒られちゃうから。
優しく言う瑞貴に、東希は頷いていた。
たわいもない話が続く。
皮一枚の向こうにどんな思惑があるのかも知らず、東希は瑞貴の問いに答えていく。
瑞貴の話術は、巧みに東希紗智から情報を聞きだしていく。
ビデオ内の東希は、確かに可愛い娘だった。
素人目にも原石のようなものを感じさせるものがあった。
肌は浅黒いが、むしろ少女の健康美を際立たせている。
肉親の愛を一身に受けて育ったからか、屈折した部分は見受けられず、屈託の無い笑顔を周囲に振り撒いている。地方出身者なのか、都会の空気や情報に毒されている様子はなく、年相応の振る舞いは

清涼感に満ち溢れている。
芸能界で仕事をするということが嬉しくて仕方がない様子がこちら側にも伝わってくる。陳腐な表現だが、輝きを放っている。デビューすれば瞬く間に時の存在となるだろう。渋谷界隈を彷徨っているような、自分というものが無く、すぐに雑誌や世間が撒き散らす情報に振り回される恋愛しか興味の無い、垢と精液で薄汚れた小娘どもとは存在から違う。
東希は瑞貴に自らの事を簡単に説明した。
年齢は十六歳、小さい頃から劇団に所属し、演技を習う。一年前、映画の一般公募のオーディションに応募するも落選。だが、その時仕事で来ていた蓮沼の眼に留まり、スカウトされる。
――今日来たのって打ち合せ？
映像の中で、瑞貴が尋ねる。
――はい。
東希は頷いた。
――まだ、親と一緒に暮らしてて……。仕事や打ち合せがある時、東京に通ってるんです。
上京させるより、親元を行き来させる方が変な色が着かなくていいのかもしれない。
都会に染まり、仕事に息詰まり、輝きを失っていくタレント志望の娘は多い。
――今度映画に出るんでしょ？
瑞貴の質問は続く。
――あっ、はい。
瑞貴の誘導尋問に東希はまんまと填まっている。素直で純朴な東希が気の毒になった。
――どういう映画？
――えっと、まだ台本渡されてなくて……。
――すごいなあ。ＣＭとかも決まってるの？
――あっ、そっちはまだわかんないんですよ。

紗智は手を振って否定する。仕草が可愛かった。鼻の下が伸びそうになる。
――でも、もしかしたら決まるかもしれない……。今日広告代理店の担当の人と会って来たんです。
瑞貴が視点の為、瑞貴の表情は映らない。
瑞貴を見ると無表情でモニターを見つめていた。
殺意に似たものを必死に押し止めている――私にはそう見えた。
モニターの向こうの瑞貴と東希は一緒に笑っている。
――どういう仕事？
――私もよく知らないんです。極秘プロジェクトみたいで……。
裏工作の匂いがした。
東希の預かり知らぬところで、蓮沼は色々手を回しているのだろう。
セレブの政治力もさる事ながら、何にもまして東希の素材としての魅力もある。
事務所が映画の出資に関わっているのかもしれない。
――夢がどんどん叶っていく……。信じられないって感じです――。
東希の何気ないの無い一言を放ったとき、瑞貴はカメラに触れ、再生を止めた。
「これ以上は、とくに重要なものはないので」
瑞貴の言葉はどこか冷たかった。
瑞貴の心中はこの時如何なものだったのか――？
それを聞きだす術はない。聞くつもりもなかった。
「あと、これ――」
瑞貴は携帯電話を開くと、画像データを再生して私に見せる。
東希の画像だった。ピースサインをした東希紗智が写っている。
画像もクリアで、東希の顔形表情がはっきりと確認できる。
これならば森川も納得してくれるだろう。
「電話番号とメルアドも聞き出しています」

「――お見事です」
私は素直に瑞貴を誉めた。
「これで目的は達しましたね……？」
瑞貴の言葉に、私は口の端を緩めた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8792s/

私は静かに報復する

2011年11月29日23時54分発行